
SUN's fault -the 2nd story-

おおいす

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

SUN's fault — the 2nd story —

【Nコード】

N8247G

【作者名】

おおいす

【あらすじ】

WANT the reriefの続編。未曾有の災害「ブラック・マンデー」。この事件を境に家を飛び出した高辻日向と家族を失った庄治慶介。暗い過去を「暗黙の了解」として封印し、何事も無かったかのように同じ境遇の仲間と過ごしていた。

グラウンド・ゼロ ―プロローグ（前書き）

「僕らの世界 ―ウォン―」の続きとなる物語です。

グラウンド・ゼロ ―プロローグ

その日、世界は変わってしまった――。

昼休み、中四国州最大の政令指定都市、針木市の中心部に位置する針木学園。

食堂真ん中の柱に設置された液晶テレビが告げる。

丁度十年前のこの季節ことだ。

我々の世界を襲った大いなる厄災の原因は未だ不明とされている。その厄災とは、熱効率を大幅に高めることが出来る原子力発電の実験施設で融解事故が発生し、黒い雨をこの街に降らせた大惨事である。

「久――」

「うん……」

沙耶悠希と沙耶久が、短い言葉を交わす。

『それは、未だに爆心地となった御座市南西部の地方には高濃度の放射性物質が散乱しており、近づくことすらも困難な状況であるためです。当時の調査も満足に行えない状況です』

過去の映像はまるで吹雪の中のように、ホワイトアウトする。

ただそれは雪ではなく、死の灰と呼ばれるものだった。

『塚本研究所が発表した新しい原子力発電所、実験段階で運用されていたはずのそれは、メルtdownを起こし――、そして暴発しました』

ニュースキャスターが、当時の事件を語り続ける。

「……」

普段は真剣な空気を茶化して台無しにする庄治慶介も、この話題の時だけはけして口を開こうとしない。

『放射線による死者は半径一キロメートル以内の住民は約九十五パーセントが死亡。直接的な爆風以外にも、放射性物質のフォールダウンによる二次災害なども含め、死亡者五万人、負傷者十四万人の

過去日本では前例を見ない大惨事となりました――』

その時、テレビの映像に変化が訪れる。

「――っ！」

ガタンツと椅子が倒れる。

机を叩き必死な形相の慶介が立ち上がった。

「・・・・・・・・」

佳織はテレビの映像から目を反らすように俯き、拳を強く握る。

のぞみも、栄治も、久も――沈痛な面持ちでその映像を見上げる。

「うっ――」

日向が、口元に手を当てて、蒼白い顔をしている。

それぞれが、様々な傷を抉られるように、その映像に見入っていた――。

『――日本国民の皆様、貴重なお昼時に申し訳ありませんが、どうか・・・・・・・・どうかお願い申し上げます』

ニュースキャスターの声は、酷く震えている。

『一分で結構です・・・・・・・・、ただ、失われた五万人の命の為に・・・・・・・・黙祷をお願いいたします』

慶介は立ったまま目を閉じる。

久も、のぞみも佳織も栄治も、悠希も――。

ただ、日向だけは震えながら、その光景を焼き付けるかのように画面を見入っていた。

『死の灰が晴れて来たその向こうに聳える歪な建築物を、どうか忘れないで下さい――』

白い霧が晴れ、遙か遠くに映されていた建築物がズームされていく。

『これが、グラウンド・ゼロ――南御座原子力発電所です』

――ブラック・マンデー。

教科書にも乗るようになった禍々しい象徴が、彼らの目の前にその姿を現した。

彼らの故郷——御座市。

被爆地となった南区を初めとして、広大な面積を持つその街は全長百キロにも及ぶ高い防護壁によって、今なお囲まれている。

その忌々しい外見から、『プリズン』と揶揄されることもある。

御座市の中心部として栄えていた、針木市の隣に位置する中央区は放射能汚染は酷くないものの、フォールダウン——『黒い雨』と呼ばれる放射性物質の落下に大混乱を迎えた。

通称——ブラック・マンデー。

慶介は、思い出す。

急ピッチで建設されていく巨大な防護壁を横目に、南神父に手を引かれて、御座市を追われた難民達と共に県境を歩いていた幼き日を。

小高い丘から振り返ったその先は——いくつもの黒い煙を上げるビル群。

自衛隊に強制連行された市民グループたちが起こしたテロ事件の傷跡。

父と母は、その一連のテロに巻き込まれて死亡した。

「……………」

慶介は南の声を聞きながら思う。

一つの世界が滅びていく光景を思った。

サン1 ―幕間(前書き)

僕らの世界 ―ウォン―の続き(同時系列)となります。

サン1 ―幕間

サンの話をしよう。

太陽の名を模した彼女の名前――サン。

家族を捨てた少女の話であり、家族を憎む少女の話でもある。
なので、まず彼女の家族について語るべきだろう。

家族構成は、父親と母親、そして姉だ。

父親である森野勇次は、政治家だった。

針木市市長、森野勇次の名を知らない者はこの街にはいない。

ブラックマンデーと呼ばれた御座市の事件において、彼は御座市の市民を受け入れを可決させた。

その為の資金を、州や国と掛け合い引っ張ってきた。

迅速かつ的確な対応は市民から高く評価され、一部の人たちは彼のことを英雄と呼ぶようになった。

サンは英雄の娘だった。

このように森野勇次のことを羅列していれば、彼は仕事人間であるかのようにイメージされるかもしれない。

だが、彼はプライベートも大切にした。

仕事に結果を残しつつ、プライベートの時間を作る。

まるで理想のような父親だったらしい。

母はとある財閥の娘だった。

箱入り娘というものだ。

男女同権が謳われる現代では珍しい、夫を立てる妻だった。

家族という、狭い社会の中で幸せを見つけるような女性だった。

家庭内は極めて円満。

ただ一つ、問題があるとするならば――サンは生まれつき身体が弱く、ベッドの上に居ることが多かったくらいだろうか。

だが彼女はそんな不自由な身体に生まれても、けして自分の境遇

を不幸だと思わなかった。

優しい家族に囲まれて、彼女の日々は充実していた。

取り分け姉は、彼女に優しくかった。

同じ年のはずなのに、姉はしっかりとした子供だった。

明るく悪戯好きで、しかし思慮深く賢い、妹のことを第一に考えてくれる姉だ。

彼女も姉のことが大好きだった。

誰もが羨むような、そんな円満な家庭だった。

そんな彼女にもただ一つだけ、羨ましいと思うことがあった。

それは深窓から眺める陽だまりの庭の景色。

そこで大好きな姉が男の子と楽しそうに遊ぶ風景が、彼女にとってはやけに遠い世界だった。

その時だけ、彼女は不自由な自らの身体を呪ったのだ。

鏡に映る、真っ白な髪の少女――。

白い髪の、赤い目の、ウサギの少女――。

――あなたは、誰ですか？

日常 ―高辻日向

世界には今、自分ひとりしかないのではないかと錯覚するところがある。

例えば、友達と別れた後。

一人部屋で目覚めた時。

お風呂から上がったときに眺める妙に広い空間。

そして、皆で楽しく談笑しているときにたまにこうなる。

途端に世界というものが空虚になる。

これを孤独感と呼べばいいのだろうか。

「・・・・・・・・・・・・・・・・た」

言葉はしつくりとこない。

「・・・・・・・・なた」

この気持ちを、なんて呼べばいいのだろうか。

「日向――！」

・・・・・・・・。

「・・・・・・・・っっ」

ぐわんぐわんと鼓膜が揺らされて、思わず耳を押さえてテーブルに伏した。

「どうやら刺激が強すぎたようだ」

慶介が腕を組みながら尊大な態度で言う。

「そりゃ耳元であれだけ大声出せばな」

栄治が呆れたように慶介に告げる。

「しかしだ栄治、二回読んでも返事のないサノバビッチだ。男なら不感症だと思っじゃないか」

「自分のテクがしょぼいって結論には至んねーのか」

佳織が野次る。

「お前ら昼中堂々とする会話じゃねー」

栄治は両手を上げて仰け反り、大げさにリアクションしてみせる。

「だいじょぶ、大奥まだ来てない、あとお前それ寒みいよ」

「ショックー！」

佳織の痛烈な突っ込みに、栄治はさらに仰け反る。

体を張ったリアクション。

「そして俺のテクはしょぼくない。秒速三往復のゴールデンフィンガーは今日もあちち、あちち、だ。あと貴様寒いぞ」

慶介も乗っかる。

「ダブルショックー！」

栄治はついにブリッジの体制になった。

「おいおい、さすが栄治だよ、スベったネタを躊躇いなくテンドンかよ」

だが、当の本人である栄治は凹む中に悦の表情が見られる様子。光悦とファミレスでブリッジをする姿は、誰がどう見ても変態そのものだった。

「テクは関係ないでしょ、テクは・・・・・・・・」
ゆらり、と伏していた顔を上げた。

さて、どうしてくれようかしら、佳織、慶介。

「・・・・・・・・あんな」

低い声で、まずは佳織を睨む。

「あっ、私は無罪、委員長の耳レイプしたのはそこにいる野の獣」
佳織が慶介を指差す。

「貴様――、そもそものは貴様がそうしようと案を出したんだろうが」

「耳レイプー、耳を甘噛みしながら、丹念にしゃぶり続ける・・・
・・・・いかん、萌えるではないかー」。膝枕されながらだとベター」

栄治は栄治で一人身悶えている。

「あっ、栄治のスイッチが入った」

「佳織、話逸らすんじゃねえ！」

よし、敵はとりあえず庄治慶介。

「・・・慶介、あんたねえ・・・」

「不可抗力だ」

尊大に腕を組んで言う。

この男の辞書に反省という言葉はない。

「野獣、意味分かってて言ってる？」

佳織がにやにやしながら尋ねる。

「無論だ」

「三十字以内で述べてみ」

佳織が茶化す。

ぐりぐりー。

「・・・ダメだ、うまく言葉にできん。よくあるだろう？

小田和正シンドロームだ」

「ねえよ」

佳織の高速チョップがゼロ・コンマの速さで入る。

ぐりぐりー。

「というか日向、無言で俺の足を踏むのを止めろ。地味にかなり痛い」

「・・・地に頭をへばりつけて謝罪を」

いつもの数倍は低い声で謝罪要求。

ぐりぐりぐりぐりー。

「ダメだー攻撃が止まん。しかし、テロに屈するわけにもいかん。謝罪を認めるということは全ての冤罪を認めるということだ。栄治よ、こういう時はどうすればいいんだ？」

この・・・、自分のしたこと柵に上げて人をテロリスト扱

い？

「冤罪じゃないからな？ 素直に謝れよ」

「むっ、確かに正論だ。しかし正しいというのは得てして面白みにかける」

「……久みたいなと言うなよ」

「栄治に面白いこと期待するのが間違いか」

「……」

栄治がむっとした顔をする。

「おい、慶介——、人を寒い呼ばわりしやがって。それでも俺が本気を出せば——」

「はい、すべったー」

佳織が投げやりに答える。

「まだ何も言っていない！」

再びブリッジ。

「おいおい、お前。それは展開はええよ」

佳織のいじる相手は栄治へと移ったようだ。

「止めてやれ佳織、アイツのプライドはズタボロだ」

「そうかー？ これでもコイツ打たれ強いぞ、マゾだからな」

「ちよっと待て！ それこそ冤罪だ」

栄治はブリッジから器用に起き上がる。

「で、時に沙耶姉弟とのぞみは？」

とりあえず、話を変えることにした。

「おっ、委員長復活」

「つてきみい、ふつときながら投げっぱなしジャーマン！ これ噂の放置プレイ！」

栄治は三点倒立を始めた。

周りのお客さんの視線が痛い……。

「委員長言うな」

学級委員でもなんでもないのに、皆は私のことを委員長と揶揄する。

うっとおしいだけで、別に嫌というわけじゃない。

この破天荒な集団には、正論でブレーキをかける存在が必要なのだから。

と、そういうことを言うと悠希に『アナタは苦労性ね』って笑われたっけ。

「だいじょぶ、だいじょぶ。褒めてんだって。デブにデブっていう感覚で」

「全、然、褒めてない――！」

そして最もブレーキをかけなくちゃいけない危険人物が二人。それが塚本佳織と庄治慶介。

彼らは目を放した隙に何をするかわかったもんじゃないから大変なのよ。

「時に日向、そろそろ足が折れそうだと悲鳴を上げている」

「黙れ、レイプ野郎」

で、とりあえず慶介はシめる。

「俺のプライド、傷ついた、ヨー。チェキラッ」

この馬鹿は人を小馬鹿にする才能に長けた憎憎しい天敵だから。

「レイプ野郎のプライドって、どうなのそれ？」

で、悪ふざけにすぐに食いつく佳織には、いつも頭を痛める。

「ある意味欲望に純粹であるとも言えるなー」

「二重螺旋コードの問題だ」

慶介が口を挟む。

「遺伝子のせいにしない。理性とモラルの問題でしょうが」

「ああ言えばこういう女だ。そこまでして報復戦争がしたいか？

人間は哀しいな」

「黙れ、アンタが一言謝れば済む問題でしょうが」

「ダメだ、テロには屈せんと決めた」

どこかの大統領みたいなコメントをしゃがる。

「じゃあ足が折れるまで我慢するといいわ」

「……すみませんでした」

慶介は即答した。

「よわ・・・・・・・・」

「エセ不良」

「すみませんでした！」

無駄に元気よく謝る。

「まったく・・・・・・・・」

ふう、と溜め息をついて、ようやく慶介の足を解放した。

「アンタたちといるとホント退屈しないわ」

「褒められたー」

佳織が両手を上げる。

「いや、微妙なところだと思っただけど・・・・・・・・」

「うむ、トイレに行きたいところだが、本気で足が痛い」

「自業自得という言葉があるな」

「やはりテロに屈するべきではなかったのか？」

「・・・・・・・・言葉って正しく伝わらないなあ」

そうして栄治は苦笑い。

スイッチの入っていない普段の栄治は、厳つい見た目に反して常識人の部類に入る。

「栄治、言葉が通じる相手かどうかをまず考えなさい」

「しかし本気で足が痛い。一体何キロあるんだ」

「慶介・・・・・・・・本気で足折られたい？」

「前言を撤回しよう」

「なんでそんなに尊大なのよ」

そんな仲間に囲まれる日常が楽しかった。

楽しければ孤独を感じる暇もない。

笑っている。

慶介が、栄治が、佳織が。

——そんな風景の中で。

「・・・・・・・・あっ」

間抜けな声が漏れる。幸せに魔が差すように――。

「・・・・・・・・日向？ どうした？」

私は見た。

記憶に眠る、少年の姿を見た――。

＊

少年と少女を繋いだのは、鮮明なオレンジのゴムボール。

開いた窓から部屋に舞い込んで、気ままに跳ねる。

元氣すぎて、外の世界を知らない少女にはちよつとだけが恐いのに思えた。

ボールはすぐに、部屋の壁にぶつかって止まる。

ちよつとだけ躊躇して、でも好奇心が勝った。

近寄ってみる、触ってみる、拾ってみる。

「キミも、遊びたいの？」

遠かった外の世界の少年が、少女の世界の入り口で無邪気に笑っていた。

――あそびたいけど、あそべないの。

そう答えた。

だって、ウサギの少女は走れない。

森野陽子 ― 庄治慶介

足が少しだけまだ痛む。

おかしな歩き方をする俺の姿は、道行く凡人どもの奇異の視線に晒される。

気づくたびにひと睨みするが、きりが無い。

そりゃ気にもなるか。

こんなイケメンが足を引きずって歩いてたら、漂うハードボイルド臭に抱かれなくなるだろうよ。

あのあとすぐにお開きとなった。

栄治は用事があると帰り、佳織は友達と遊ぶそう。

日向はバイトがあると言った。

時刻は既に夕暮れ。

アスファルトがオレンジ色に染まり、伸びる影はのっぺりと長い。ファミレスの帰り道、見慣れた後姿を見つけた。

「久」

精悍な顔の少年が振り返る。

「あれ、慶介、奇遇だね」

その横にいた、腰まで伸びた黒髪が特徴的な少女も振り返る。

「なんだ、悠希もいたのか」

「ええ」

穏やかな笑みだった。

「二人して今日はどうしたんだ？」

「パパに会いに行ってたんだ」

久が口にする父親という言葉は、けして戸籍上の父親には繋がらない。

関係は複雑だそう。

「南さんか」

「久も性格が悪いわ」

悠希が呆れたように言う。

「なんだ？ どうしたんだ？」

「パパって呼ぶと南さんすごい恥ずかしそうだったから連呼してたんだ」

爽やかに人の嫌がることをする男だ、コイツは。

「止めてくれて何度も言ってたのに……」

「仕方ない、アレは俺たちのパパだ」

「アレ呼ばわりって、アナタ何様よ」

「庄治慶介公である」

世が世なら、針木のとある一帯を治めていたはずだ。

いや、半分マジ話で。

「公様、お腹がすきました。飯奢ってください」

「うむ、公の財布は所持金百円をきっている。今すぐ納税しろ」

「……とんだ領主様なこと」

うむ、金がないのは辛いことだ。

「そういえば慶介……」

「なんだ？」

「慶介の出席日数について、学校から南さんに電話があったみたいだよ」

「……」

無言で携帯電話を取り出す。

「着信が五件もある……」

「電話取りなさいよ」

「歩いているとバイブレーションがよく分からん」

「あるある」

操作してみる。

着信は全て、南パパがかけたものだった。

「電話させると言っていたわ」

「速やかにか？」

「ええ、お前の授業料は誰が払っているのか、って伝言を預かってるわ」

「ぐっ……」

ぐうの音も出ない。

せっかく授業料を払っているのだからまともな学校生活を送って欲しいと何度説教されたことか。

しかし夜行性の生き物にとって朝八時は就寝時刻だ、仕方がないだろうが。

「立ち話もなんだからどっか寄ってく？」

それは魅力的な提案でもあるが。

「もう時間が時間だわ」

「俺も資金が底を尽きた」

お開きの雰囲気だ。

「アナタは早く電話しなさい」

「……どうしてもか？」

「速やかに、とのことよ」

「今は有難い説教を聞きたい気分じゃない」

「多分僕らでダメだったら、南さん日向に電話すると思うよ？」
久が口を挟む。

「あのやかましいヤツか」

げんなりとした。

そんなことされたら、日向と顔を合わすたびに規則がどうか、モラルがどうか、授業料がどうか、小言が待っているじゃねえか。

「……今晚電話しよう」

約束は出来んがな。

「多分しないだろうね」

「絶対しないわ」

沙耶姉弟は俺のことがよく分かっている。

「あらあらあらあら」

往来を歩く三人に騒がしい声が近づいてくる。

「あれ、佳織？」

「ヒッサーに悠希に野獣じゃん。三人でどーしたの？」

「俺にだけ悪意を感じるな」

佳織の横にもう一人見慣れない少女がいた。

「なになに、かおりんのトモダチ？」

少女は気さくな雰囲気の話に加わる。

あまり人見知りをしないようだ。

「トモダチとその下僕二人」

佳織はナめたことを言う。

「おい、いつから俺は貴様の下僕になった？」

塚本佳織、このオンナとは一度決着を着けねばなるまい。

「そっちの幼い系の方がペット的な感じで、デカイのは汚物処理専

門」

オンナじゃなければ、ぶっ殺してるトコロだ！

「まあまあ、慶介・・・・・・・・」

久が苦笑する。

「佳織、紹介してもらえるかしら？」

そして悠希は淡々と自分のペース。

クールにマイペースだ。

「うわ、喋り方がなんか上品。どっかのお嬢？」

「南家の大奥サマ」

「ああー、かおりんが昔いたっていう施設の？」

「そうそうそうそう」

「話がすぐに脱線するわ・・・・・・・・」

困ったように悠希が溜め息をつく。

気持ち分かる。

女の囁りはうっとおしい、と昔思ったまま日向に言ったら耳を千切られそうになったのを思い出した。

数少ない俺のトラウマの一つだ。

「ソリソリー、こっちはクラスメイトの陽子ちゃんです、じゃーん」
「ご紹介に預かりました森野陽子です。どもどもー」

陽子は佳織と同じノリだった。

「サノバビッチが二人だ・・・」

思ったことをそのまま口にする。

「うわっ、なんかいきなり失礼だよ汚物の方」

「汚物じゃねえー！ 汚物処理班だ！」

このオンナ、佳織と同じ穴のムジナか！

「慶介・・・認めちゃってるよ」

久は呆れた声だった。

「んで陽子ちゃん、こっちの女の子が悠希で隣がその弟のヒツサー」

「へー、姉弟？」

「血は繋がってないけどね、同じ足長おじさんに拾われたんだ。ま

あよろしく」

「うんうん、よろしくー」

とりあえず久と陽子が握手する。

さすが仮面優等生沙耶久だ。

人付き合いに差し障りがない。

「んでデカイ方が汚物」

「だから汚物やめいー！」

いつまでそのネタを引っ張るつもりか！

「汚物だから握手はしないほうがいいかな」

「ダメダメ、そんだけで妊娠する」

「うわ、皮膚の接触だけで感染するの？」

「・・・俺はレベル五のウィルスか？」

「元気だしなよ、汚物」

ニヤニヤとしながら久が右肩を叩く。

「・・・久よ、楽しそうだな？」

「まあ佳織が飽きるまでの我慢よ、汚物」

含みのある笑みで悠希が左肩を叩く
悠希よ、お前もか……。

ブルータスに裏切られたカエサルもこんな気分だったのだろうな。
「賽は投げられた……。」

ぽつりと呟いてみた。

ローマ帝国万歳だ。

「で、いっこ聞きたいんだけどー」

陽子というオンナ——語尾が間延びしたような喋り方が印象的だった。

「なんだ？」

「キミたちってさあ、何つながり？」

＊

「慶介は、話に乗るんだね？」

教会の屋根裏部屋。

そこは矮小な世界だった。

そこに招かれた同士は頷きあう。

「ああ」

「契約成立だな」

「僕たちは、同志になる」

久が右手を、甲を上にして差し出す。

その上に栄治が右手を重ねた。

俺はそれを眺め、逡巡した後。

「異論はない」

そう言って手を重ねた。

昔の話だ。

七人が教会に集う前の話。

密約の思い出である。

懐かしいことを思い出したもんだ。

暗黙の了解 ― 庄治慶介

「何つながり、か……」
呟く。

「下らねえ……子供の妄想じゃねえか」

俺たちの間には、一つだけ絶対的なルールがある。

通称『暗黙の了解』。

『それって、暗黙の了解ってこと？』

教会にきたばかりの日向が佳織の苗字を聞いた時、その過去に触れそうになった。

それは聞いちゃいけないことだよ、と久に諭された時にアイツはそう口にした。

それ以来、俺たちはそのルールを暗黙の了解と呼ぶようになった。最も分かりやすいのは佳織。

塚本という名前を聞けば、佳織がどうして教会に引き取られたのかが何となく分かる。

ブラック・マンデー第一の事件、塚本一族毒殺事件――。

触れるのは、誰だって躊躇われる。

空気の読めなかった日向を除いたらな。

皆が皆何かを背負っている。

名前も、心も、顔も、表情も、何もかもがウソだらけ。

ただ共通するのは、踏み込むには重過ぎる何かがあるってコトだ。その暗黙の了解には奇妙な一致があった。

それぞれが、対になっていることだ。

のぞみが入ってから久だけが両手に花状態になったわけだが。

久と悠希、栄治と佳織、――そして、俺と日向。

俺と高辻日向の暗黙の了解ってヤツは、複雑に絡み合っているは

ずだ。

だから俺たち男三人は、密約を結んだ。

彼女たちの爆弾をそれぞれの責任とする契約だ。

彼女たちを爆発させてはならない。

もしも片方が爆発すれば、もう片方である俺たちも爆発する。

それで俺たちは終わりだ。

このぬるま湯に浸り続けるために、その爆弾を解除することを約束したのだ。

全く馬鹿馬鹿しい。

そんなに簡単なことじゃねえって話だ。

それにそんな大それた話でもない。

俺たちはただ時間の流れに任せて、ゆるやかにその傷が薄れるのを待てばいいことだろうが。

自分に言い聞かせるように。

なのに心はざわめき続ける。

違う、と頭のどこかで警告が聞こえてくるのだ。

「森野、陽子か……」

原因は分かっている。

意外なアウトサイダーの登場だった。

「別に、そんなこともあるっちゃあるだろう」

それは、まるで自分を納得させているようだった。

「……ふん、バカバカしい」

嘲笑してみせる。だが、心にしこりは残り続けた。

慶介よ――。

お前は、迷っていたのだろう。

「それにしても、変わらないなアイツも」

辟易として呟いた割には、どこか優しい心地だった。

「慶介——？」

名前を呼ばれて振り返る。

「日向か」

「ええ」

針木駅西口のディスカウントストア前、日向のバイト先だった。

「バイトはもう終わりか？」

「もう結構な時間でしょ？ アンタこそこんな時間までどこほつき歩いてたのよ？」

「あの後久たちと会った」

「へえ……、久たちって、久と悠希とのぞみ？」

「いや、のぞみはいなかったな。確か病院だったはずだ」

「ああ……」

日向の表情が曇る。のぞみの事情は全員が知っていた。それはまた別の話だ。

「久たちは今日どうしてたの？」

「教会に行っていたらしい」

「へえ……南さんところ？ 私も行きたかったな」

「なんだ五十台のオジさま好みか？」

「アホ」

「違うな、俺の知能指数は人間の限界を超えている」

「確かにアンタは人の理解を超えてるわ……」

「ふっ、そうだろう」

「貶してるのよ」

コイツはぬけぬけと失礼なことばかり言う。

「……お前は優しさの意味を知った方がいい」

「アンタはやましさの意味を知らないさ」

いがみ合う。

天敵同士である。

規律を重んじる日向と考えてみれば対極じゃねえか。

考え方は全く正反對。

よくもまあここまで続いてきたもんだ。

「ああ、アンタといがみ合っても時間のムダだわ——」
そう言って日向は携帯を操作し始める。

「なんだ、彼氏からか？」

「うっさい、ってあれ？ 着信がある？ 南さんからだ」

「やはりオジさま趣味か」

「黙れ、縫うぞ」

「……縫われた後を想像してみたが軽くホラーだな」

「なんだろう？」

「……あっ」

「なによ、そのあっ、てのは」

そう言えば南パパへの電話をしていないことを思い出した。

ちなみにパパは久に、速やかに電話させるように言ったらしい。

速やかに、だ。

そこを悠希が強調していた。

「まあ、その、なんだ。多分大した用じゃないだろう。かけなおす必要はない」

ヤベエ……、せめて俺のいる前で電話すんじゃないぞ。

「なんでアンタが重要度を決めるのよ」

「うむ、重要な用件ならかけ直すだろう。こっちから無理にかける必要はないんじゃないか？」

「……なんか隠してる？」

「人間誰しも隠し事の一つや二つあるくらいが丁度いい」

ごまかしきるしかない！

「猛烈に怪しいんだけど」

「庄治慶介の半分は怪しさでできている」

無理なことも、男ならば時として通さねばならん！

「あんたはどっかの頭痛薬か……」

平静を装い軽口を叩くが、額から冷や汗が浮かんでくるのを日向は見逃さなかった。

「脂汗、ね……まっ、電話してみれば分かるか
まずい！」

アイツ、目が細くなった！
完璧に疑われている！

「待つんだジョニー！」

「誰よジョニーって」

「湘南一の波乗りだ！」

つまらないことを言う俺の手を交わし、悠々と日向は電話をかけ始める。

「今は止める、今は——！」

再び手を伸ばす。

「——ますます怪しい」

だが、再びかわされる。

それと同時に着信が繋がった。

「あっ、こんばんわ、日向です」

俺のひとりレジスタンスは失敗に終わった。

天を仰いだ。

「何回か電話があったんですが、どうしました？ えっ、慶介のこ
とですか？ はあ……」

日向の表情は徐々に険しくなっていく。

こうなれば最後の手段しかあるまい。

「……出席日数が足りない？ 後期が始まってまだ二ヶ月
なのに？」

携帯を持つ手がこころなしか震えている日向を背中に、ステルス
ダッシュをかました。

この技はかなりの技術を要する。

足音をたてずに瞬時に戦線離脱を図るジャパニーズニンジャの非
奥義だ。

詳しくは伊賀忍法帳を参照でござる。

多分載ってるんじゃないかな。

暗黙の了解 ―高辻日向

「・・・・・・・・分かりました。私がなんとかしましょう。では――」
携帯を畳む。

「慶介――、アンタどんだけサボって・・・・・・・・」
慶介の姿はいつの間にかフェイドアウトしていた。

「・・・・・・・・逃げ足だけは速い」

全くあの男だけはほんとうに・・・・・・・・。
……。

まあ、慶介らしい、か。

「まったく仕方のないヤツ・・・・・・・・」
そう言って、なぜか私は笑っていた。

他愛のないこと。

平穩という名の檻。

それは、とても幸せな時間だ。

だが、魔が差すのは得てしてこういう時だ。

――どうして・・・・・・・・笑っているんだろうと。

そんな疑問が、なぜ浮かんだんだろう。

暖かな空気が一瞬で拡散する。

日向よ――。

私はここで、何をしているんだろう・・・・・・・・と。
なぜそんなことを私は考えているの？

日向よ――。

お前は、無理をしているのではないか――。

世界。

目の前の針木市のセントラル街のスクランブル交差点。

道行く名前も知らぬ他人たち。

信号が青に変わる。

世界が一斉に動き始める。

それをまるで、時間の止まった世界から眺めているようで……

・。

そんなぼやけた風景が広がる。

世界の色はやがて反転し、黒くなる。

輪郭が白くなる。

その中で、少年だけが色を纏い立ちすくむ。

「……美月ちゃん」

「日向くん……」

震える声。

得体の知れない恐怖に後ずさる。

その度に少年は歩を進め、距離は縮まる。

「……になるんだね」

「えっ——」

距離は、縮まっていく。

「幸せに、なるんだね」

「止めて……」

「僕を殺して、君は……」

「止めて——！」

叫ぶ——。

周りにいた人々が驚いた表情で一様に私を見つめた。

「あっ……」

世界に色が戻っていた。

「……」

いぶかしむ視線に晒されて、バツが悪くなる。

俯いて、速やかにその場を去ろうとした。

だが——。

「高辻日向って、オマエ？」

声をかけられた。

対話 ―幕間―

「・・・・・・・・」

「どしたのヨーコ・ヨコスカ」

「アタシの名字変わっちゃってますがな佳織ちゃん」

「じゃあ、ヨーコ・ヨコハマ」

「違うってーのに」

陽子はエアギターを奏でる。

「オノ・ヨーコ」

「いや、それはジョンの方」

「レレイビー」

「イエー」

指を指し合う。

半世紀以上も前のバンドである。なのに、今でもファンは多い。

「んで、オノさんぼーっとしてどーしたの？」

「んー、さっきの汚物くんどっかで見たような気がする」

「あつ、それ忘れた方がいい。きっとトラウマになるから忘れたんだって」

「んー雰囲気かな、なんとなく」

「そっかぁ・・・・・・・・、オノさんにも汚物に絡まれた辛い時期あったんだ」

「酷い扱いだね」

「そういうキャラ」

「でも、庄治慶介くんってウチのクラスの女子に結構人気」

「ワルに憧れるお年頃なだけ」

「そっかなあ？　ワルな感じなのに結構三枚目なところが逆に好印象」

「なんだあ？　惚れたか？　濡れたか？」

「案外ビショビショかも」

「明日産婦人科に行け」

「sonだけで妊娠かい——ちよっぷ!」

朗らかに惜しみなく下ネタを炸裂させる女学生二人。

「でもダメダメ。アイツは先約あり」

「カノジョいるの?」

「いんや、カノジョ予定人」

「なにソレ?」

「日向姫のお気に入りだからね」

「・・・・・・日向?」

「そつ、高辻日向さん。慶介と同じく弄りがいある」

「・・・・・・高辻、日向? 女の子?」

「んっ、知ってんの?」

「・・・・・・」

「よーこちん?」

「・・・・・・」

「おーい、よーこちん。せーりかぁ?」

「・・・・・・たかつじ、ひなた?」

「マジ、どしたの?」

友達 ― 庄治慶介

「久、合コンがしたい」

普段の栄治からは考えられないほどのアグレッシブさ溢れる言葉が飛び出した。

「はっ――？」

「えっ――？」

久と顔を向け合う。

「・・・・・・・・なんだよ、俺がそういうこと言っちゃおかしいかよ」
「いや・・・・・・・・おかしいっちゃうか、明日の天気予報で隕石降るとか言ってたか？ 明日の天気は曇りところによりアルマゲドン」
「言ったらこんなになんて平和じゃないからね？」

「何、二人とも？ 俺がそんなこと言ったら世界滅びるの？」

「ちーす、ムサイ童貞三人組」

昼休みの教室に佳織の声が響く。

「オイ、コラ、詰まんねえ疑惑かけんじゃねえ。それ以前にせめて言葉をオブラートに包むことを覚えろ！ このファッキン・ガバガバ・バンク」

「いや・・・・・・・・慶介の言葉も相当酷いからね？ 倫理委員会もびっくりだからね？」

「んで、三人ガン首そろえてなんの話してたワケ？」

「ああ・・・・・・・・それは」

「け・慶介――」

大声で栄治が会話を割りろうとする。ああ、どうやら佳織には聞かれないらしい。

「オッケー、オッケー、伝わった。佳織、こいつはシークレットだ。国家重要機密により、貴様のようなアバズレマザファッカには伝えられん」

「なになに、テメ喧嘩売ってる野獣？ この花も恥らう純血処女捕まえて淫乱疑惑とかありえねえだろ、コラ」

「栄治がね、乱コンしたいってさ——」

「なっ、久——」

栄治が口をぱくぱくさせる。

「へえー、この矮小チ×ポがそんなことのたまいましたか」

「さすがだな、久。お前の容赦なさはお菓子を買ってもらえずにぐずる子供の前で、これ見よがしにキャンディーをペロペロするくらいに非情だ」

「だって、口止めされたのは慶介だけでしょう？」

「なっ、なっ、なっ——」

おうおう、金魚のようにパクパクさせてやがる。

「何？ 乱コンってアレ？ 乱交合同コンパの略？」

「強制乱暴コンパの略らしいよ」

「レイプ・パーティー！」

栄治はしゃちほこのように仰け反る。

「まあ、そういうわけで、突然この男は乱コンがしたいとのたまったわけだ」

「違う！ 乱コン違う！ 合コン！ もっとプラトニック！」

「んで、そのココロは？」

落語番組の司会のように佳織が尋ねる。

「あー………、えっと、それは………」

言いよどむ被告。

「なんだよ、カラダか、カラダしかねえよな？ その日の為に睡眠薬でも仕入れたか？」

「ち、違う——」

なぜそこで焦る？

「そんなお金で買える愛情じゃないらしいよ？」

久が楽しそうに、無邪気に笑っている。

この男の本性はナチュラルに邪気溢れた真性サディストだ。

のぞみと悠希以外は基本的に責めまくる。

「あー、なんて言うかー、そういう場で女性の皆様方と喋ることで場を暖めて楽しみたいと考えているだけでありー、けして疾しい気持ちなどは………」

なんとも歯切れの悪い、政治家のような応対。

「へえー、疾しいことは何もないんだー」

佳織の後ろから、最近よく見る新キャラ登場。

「あー、陽子ちゃん、どもー」

「久っち、ちわー」

「アレ。随分と打ち解けてるな？ カラダ許したのか？」

「黙れよ。汚物処理班に処理させるよ？」

笑顔で森野陽子は答える。

「だから、汚物処理班じゃねえつつてるだろうが！ あっ、いや、待て。それじゃあ俺が汚物つてことを認めたことになり、ヤツの言うことは正しいじゃないか。つまりは………」

「んじゃ、栄治さんに疾しさがないかチェックー！」

「どんだん、ばふばふー」

「いや、ちょい待ってー、何する気なの？」

佳織と陽子と栄治は勝手に盛り上がり始める。

「そうかー、けして俺は汚物系のキャラじゃない。むしろキレイ目系のファッションリーダーとしてこの針木を闊歩するミスター・カリスマ………」

「慶介、もう誰も聞いてないからね」

「って放置プレイかよー！」

「ちよっと待て！ 貶めるだけ貶めて放置か！ とんだクレイジーキャットだテメエらは」

「うるせー野獣、話の腰折んって、マジ下がる」

空気読めよくらいの白けた顔で俺を見やがった！

「くっ、佳織め……いつかアイツが皆に内緒で買った、多い日も安心の大量パックの存在をばらしてやるからな」

「それ、多分慶介が破滅するからね？ 日向あたりの手で」

「と、ゆーわけでー、栄治くんが合コンでしたいことはなんでしょうーかー」

テンションの高い陽子の声が教室に響く。

「・・・・・・・・・・昂が合コンですること？」

「・・・・・・・・・・やべえアイツのことだろ？ エルとかさせて強制輪姦とか・・・・・・・・・・」

周りも興味津々だぜ。

だが、昂栄治の名誉の為に、とりあえずそいつらを視線で恫喝し、そそくさと帰らせた。

「だから、さっき言ったように、お喋りして、楽しい時間を過ごせれば、ですね・・・・・・・・・・」

「へー」

「へーー」

陽子と佳織の棒読み。

「あら、まだ帰ってなかったの？」

さらに真打登場、沙耶悠希――！。

この手の話題にはファイナルウェポン彼女な存在だ。

「どーも、大奥」

「陽子、大奥は止めて」

「実はさー悠希ー」

「ちょ――」

栄治の制止を聞かずに、佳織が事のあらすじを耳打ちする。

悠希の眉が、ぴくりと一瞬上がるのを俺は見逃さなかった。

久のヤツも見逃さなかったらしい。

ヤツは被害にあう前に撤退しようとしてに鞆を手になっている。

「栄治――」

悠希は栄治の前に腰を下ろした。どうやら取調べが始まるらしい。
「な、なんでしょうか・・・・・・・・・・」

可哀相に、ヤツの声は震えている。

悠希の目はヤバイ。

メデューサを石にしたという都市伝説まで残るほどだ。

「古今東西ゲーム」

ぴくりっ――。

「クロ、ね」

とても嫌な取調べの仕方だった。

「王様ゲーム」

ぴくりぴくりっ――。

「これも、クロ」

悠希は何かをメモしている。

「テイクアウト」

びくびくびくっ――。

「激しく、クロ」

「あわわ……いと恐ろし」

陽子はこの悠希を見るのが初めてからか、若干引き気味。

「アフター」

がたがたがたがたっ――。

栄治くん、動揺マックス状態だ。

「ふふふっ、クロ……」

その笑顔はマジでヤバかった。

佳織だけは終始楽しそうだった。

そうして緊張感溢れる取調べは終わり、悠希は立ち上がる。

「あれ、もう終わり？ 帰んの？」

「ええ、今日は実家に呼ばれてるから。あと、佳織――はい」

先程のメモを差し出す。

「何コレ？」

「その下衆が合コンでやりたかったことリスト」

そう言って悠希は教室を後にした。

「……………」

無言で佳織がメモを開く。

「・・・・・・・・ぷっ」

一読して。

「だはははははっ、ありえねー！ こいつぁ、今世紀最大の問題作だ！」

大爆笑だった。

「なんだなんだ佳織、ちょっと見せてみる」

「あー、腹痛え、野獣見てみるよ、ここの四つ目」

「えーっと、何々、『ポツキーを端から食べあう』・・・・・・・・ほほう、コイツはクレイジーだぜ！」

「ちょっとその後ポツキーがじゃがりこにレベルアップしてる、マジやばいよ」

陽子も大爆笑だった。

「仕方ないじゃないかー！ ポツキーはその為に生まれてきたお菓子じゃないか！ じゃかりこだって、そうじゃないとあの形の意味が分からないだろ！ なあ、そうだろ？ 久もそう思うよな、マイ、心のフレンズー！」

「ーっっっ・・・・・・・・」

口元を押さえて、必死で笑いを堪えていた。

さすが心のフレンズ、せめてもの情けだ。

「なに、えーじ。そういうことしたかったんか？」

「仕方ないじゃないか！ そういう青臭いことしたいお年頃だったんだよ！ 直接やりたいとかそういうことじゃなくてさ、そういうチラリズム的な感覚というか、そういうパーティー・エロスのことがしたかったんだよ」

「昂栄治、真珠の新語をいただきました。『パーティー・エロス』久が黒板にでかでかと、『パーティー・エロス』と書いた。」

「あー、ここ次のテストに出るからなー」

「ああ、久だけは友達だと思ってたのに・・・・・・・・」

「バカか貴様は。この男こそが最も危険人物じゃないか。アンドロ

メダ星雲の腹黒星からやってきた星の王子様だぞコイツは」

「あははっ、人聞きが悪いよ慶介」

「この笑顔が恐ろしいと感じれば、お前の久に対する認識は正しい」

「ああ……、なんとなく分かるよ」

「あれー？」

今日は千客万来、続いてのゲストは春賀のぞみさん。

「どうしたのみんな？ 何楽しそうなの？」

「あーあーのぞみんいいトコ来た。君に玉稿をあげよう」

「らめめええええー」

今日はいい日になりそうだった。

そう言えば……今日は日向を見てねえな。

復讐者 ―高辻日向

喫茶店に入るのは珍しいことだ。

学生の身分では、一杯三百円するコーヒーを飲む気にはなれない。紫煙の燻る店内も、女子校生にとってはあまり好きにはなれない環境だろう。

そんな薄暗い店内の奥の座席で男と向かい合って座っていた。

私は俯いて、テーブルを虚ろに眺めている。

男は窓の外を眺めていた。

逆光の影となった、その表情は分かりづらい。

「……平和だな」

男はぽつりと呟く。

私も視線を窓へと向けて、

「ええ……」

と応えた。

「脆いものなんだよ」

「？」

「平和ってヤツは、薄皮一枚、張りぼてでできているからな」

「それは、本当に平和と呼べるものですか？」

男は視線を私へと向ける。

「この平和な日常は嘘でできているとでも？」

「そうですね」

自信を持って答える。

偽りの土壌で育った種では、けして真実の花は咲かない。

「世界の綺麗な部分で躍らされるのは、もう沢山です。その下に沢山の死体が埋まっていると知ってしまえば、片時もそこには居たくないでしょう？」

「何も知らなければ、幸せかもしれない」

「真実を知るものの傲慢です」

「蒙昧に振る舞い、真実を知ろうとしなければ責任を取ることはいない」

「思考の放棄ですか……文化人が聞いて呆れます」

「だが、それは日向にも当てはまるんじゃないか？」

「私は違う」

凜として答える。

「君たちは、偽りで出来ている」

「君たち？」

「教会に住む七人のことだ」

「……私たちのどこが嘘なんですか？」

静かな口調だが、怒りを帯びていた。

「日向は七人の世界の綺麗な部分しか知らない」

「彼らの苦悩は、大なり小なり、分かるつもりです」

「だが、君の苦悩は、七人の誰も知らない」

「……」

その通りだ。

悔しいが、日向に言い返す言葉はなかった。

「だとしたら……どうなんですか？」

開き直る。

「知ったとしても、幸せになればいい。いつか、話せるときがくるはずだから」

「……」

「私達の秘密は、ブラック・マンデーのような嫌悪すべきものじゃないわ」

「知らないことをそうやってめ付けるのは危険だな」

「彼らを知れば、解るわ」

「……高辻日向、か——」

「何？」

怪訝な顔でストローを加える日向に、男は告げた。

「・・・・・・・・俺は、『彼』をよく知っている」

「・・・・・・・・えっ」

からり、と氷がグラスを鳴らす。

「よく知っていた、と言うほうが正しいか・・・・・・・・」
時間が止まる。

それを見た男は僅かに唇を歪めた。

「あ・・・・・・・・」

ようやく紡ぎだした言葉。

「アナタは・・・・・・・・誰？」

「代わりになどならない・・・・・・・・」

男は質問に答えなかった。

「アイツらは・・・・・・・・高辻日向の代わりになどならない」
「・・・・・・・・」

何も言い返すことが出来なかった。

正鵠を射ていたから。

『高辻日向』の抱える問題の焦点だから・・・・・・・・。

「さて、いつまで君はそこにいるつもりだろうな？」

男は立ち上がる。

そこ、とは、どこを指す言葉だったのだろうか。

「・・・・・・・・」

日向が答えることはなかった。

「そうそう」

思い出したように、わざとらしい素振りで名刺を差し出す。

「俺ならば、君の力になれるかもしれない」

胡散臭いの一言に尽きた。

視線を煩わしそうに名刺へと向ける。

だが――。

そこに書かれた役職を見たときに、驚愕を隠せなかった。

「――塚本、研究所・・・・・・・・」

塚本研究所原子力発電システム開発室室長——黒瀬智也。
その肩書きが意味するもの。

「ブラック、マンデー……」

「そう、昔の名刺さ。今の名前はこちらを使っている」
春賀建設、不動産部企業営業課主任——加藤恭介。

男は表情は歪んでいる。

薄暗い瘴気を纏うように、その顔は影が落ちている。

「……」

言葉を選び——。

「何が目的ですか？」

解っていないながら問う。

「復讐さ」

予想したとおりの答え。

恭介の手がゆっくりと伸びる。

そして——その手はテーブルの上の伝票を掴んだ。

「君も同じだろう？」 『高辻日向』——」

「……ええ」

「だから…… 『高辻日向』 なんだろう？」

「調べたのですか？」

「ああ、どうやって復讐してやろうか考えてるうちに、ね」

楽しそうに彼は笑う。

「だから、期待させてもらうさ」

彼は、私の肩を叩き。

「君と俺、利害は一致しているはずだ」

そして場を去った。

彼の後姿に振り返らず、その場で俯いた。

「復讐、ね……」

ねえ、日向。

アナタを何度夢に見ただろうか。

この暖かなうたた寝のような世界の中で、何度幻視しただろうか。小さな手で、ブラックマンデーに消えた破片を握りしめた時からか。

何かを伝えようとして、伝えられないままに終わってしまった過去の破片。

私は、顔を上げる。

すうっと、少年の幻影がうつすらと浮かび上がり、そして消えた。それはどこを指していたのか。

そことは、どこを指す言葉だったのだろうか――。

サン2 ―幕間

さて、サンの話をしよう。

背景は深窓から眺める陽だまりの庭から、彼女の部屋へと代わる。サンの部屋に、男の子はやってきた。

落ち着いた雰囲気の子だった。

自由奔放な姉とは対照的で、すぐに悪ふざけをして暴走する姉を止める、理知的な男の子である。

彼がサンの部屋へとやってきたのは姉の仕業だった。

庭で彼とボール遊びをしていた姉は、わざとボールをサンの部屋へと蹴り入れて、取りに行くと男の子に命令したのだ。

姉はある日気がついたから。

サンはいつも窓から自分が遊ぶ風景を眺めていたことに。

その表情は、自分の前ではけして見せない寂しげなものだったことに。

サンは我が儘を言わない。

取り分け姉を困らせないよう振舞う思慮深い子供だった。

姉妹は性格こそ違えども、その根本にある互いを思いやるころはよく似ていた。

姉はずっとサンの気持ちに気づいていたのだ。

彼女は、友達が欲しい、と――。

そうして彼らはサンの部屋で遊ぶようになった。

男の子は優しい子供だった。

外に出られないサンのために男の子は色々な話をしてくれた。

例えば、春。

暗い公園に咲く夜桜は、わずかな光をすべて吸い取っているかのようその色を際立たせる。

それを見上げながら、大人たちは酒を嗜む。

例えば、夏。

人々はよく海へと赴く。

図鑑を広げながらクラゲを指差して、海中で沢山見れることを告げる。

そのグロテスクな外見にサンは眉をひそめた。

姉は、クラゲは人を襲い刺すのだと告げた。

サンは絶対海になんか行かないと言った。

男の子は苦笑しながら、間違った姉の説明を訂正する。

例えば、秋。

秋は、世界の色が変わる。

緑から紅へ変化する季節。

そうして葉は落ちていく。

寂しくも美しい景色だ。

例えば、冬。

昔に比べると、雪はあまり見なくなった。

それでも、一年に一度は景色を白く染め上げる氷点下の彩りを見せる。

雪の上は滑ることが出来ると言った。

部屋の中には分からないことだった。

普通の子供にとっては当たり前のことが、外に出られないサンにとっては目新しいことばかりだった。

興味津々に耳を傾けるサンに、男の子はいつも穏やかな声で外の世界のことを聞かせてくれた。

そして最後に、必ず励ましてくれるのだ。

いつか元気になって一緒に遊べる日が来たら、色んなところに行こう、と――。

サンは彼の優しさに心を惹かれていく。

子供たちは純粹だった。

純粹すぎて、世界を疑うことなど知りもしなかった。

お互いの口にした希望の未来が、必ず訪れると信じて疑わない。

だが、男の子との仲が深まるたびに、父と母は寂しい目でサンを見つめていた。

それに気づいていたのは、姉だけだった。

そう――。

何も知らなかったのは、サンだけだったのだ。

男の子は、いつしかサンの家を訪れなくなった。

知らなかったのは、サンだけ。

彼女の余命は、もう幾許もないと診断されていた。

彼らの口にした希望の未来は、彼女の知らぬところで永遠に閉ざされていた――。

教会 ― 庄治慶介

珍しく、昔の夢を見た。

「ねえ……お母さん、どこか行っちゃうの？」

不安そうに、子供だった俺は母親を見上げていた。

「お父さんのところに、ね」

そう言って母親は笑った。

「お父さんは……」

「お父さんは、何も悪いことはしてないから」

人々に囁かれている噂は知っている。

父親は、御座市の市会議員だった。

御座市に、新理論の原発の設立を推進していたグループの中心人物。

彼は、市民団体に追われる身だった。

「でも……みんな、お父さんが悪いって……」

「お父さんは悪くないわ」

「……」

「お母さんが嘘ついたことある？」

「……ない」

「でしょ？ だから、みんなに「お父さんは悪くない」って言いにくいよね」

「じゃあ……」

「だから、ここでいい子にして待っていて欲しいの」
「……」

子供ながらに分かっていた。
きっと自分は邪魔なんだと。

こういうとき母親は、俺が何かを言う前に先手を打つ。
そして、俺は何も言えなくなる。

「大丈夫、そんな顔しないで」

安心させるように、母親は笑った。

「すぐにお父さんと戻るから、ね？」

「約束・・・・・・・・」

子供は右手の小指を差し出す。

「あらあら・・・信用ないわね」

苦笑いしながらも母親は小指を差し出した。

「泣かないで待ってるのよ？ 男の子なんだからね」

「うん、約束する。お母さんも早く帰ってきてね」
指きり――。

ああ、そう言えば・・・・・・・・これが最初で最後だったな。

母親が、嘘をついたのは――。

嘘を、飲み込む。

嘘を飲み込んで、感情が破裂する。

破裂したのは憎悪だ。

だが、これでもまだ足りない。

ヤツに火を投げつけるには――。

――森野、勇次。

俺は、お前を何度も殺してやりたいと夢想した。

・・・・・・・・。

・・・・・・・・見慣れた景色だ。

天井のステンドグラスはやけに高かった。

「寒い――」

小さな教会の講堂でうたた寝をしていたようだ。

昨日は飲み屋で午前二時まで焼き鳥を焼いて、そのままねぐらに

この教会を使わせてもらった。

こつん、と硬い床を叩く音が聞こえる。

「――慶介？」

我らがパトロン、南様だ。

「どうしたのですか？」

「終電がなくなっただんで使わせてもらった」

「・・・・・・そうですか、言ってくれば家の方を開けたのに」

「夜中の四時前にたたき起こすのは忍びなかった」

「変なところで氣を使いますね」

そう言っただけ南さんは穏やかな微笑を浮かべる。

だが油断するな。

優しくそうに見えて、南神父の仏の顔は時に明王へと変わる。

「時に慶介――」

淡々とした声。

背筋が凍った。

「あっ・・・・・・」

それと同時に思い出す。

速やかに、電話を、とのことだった、と。

「出席日数のことで学校より電話がありました」

「まあ、なんだ、学校側のカウントミスだろう」

「昨日私の電話に出なかったということは、自分でも分かっていますね？」

「ですので、カウントミスかと・・・・・・」

敬語になった。

「教師の出席表を見せてもらいました、間違いありません」

「嘘だ――！ 電話だろうが！」

「電話で、学校に呼び出された、です」

「・・・・・・」

オーマイガー。

「さて、前期の時と同じく始めましょうか」

「・・・・・・・・いや、そろそろ学校が」

「祝日です」

「・・・・・・・・そうか」

「九月二日、午後の授業を欠席。理由は――？」

「・・・・・・・・」

「理由は？」

「だるかったんでふけました・・・・・・・・」

「だるかった？ 体調不良ですか？」

「いえ・・・・・・・・睡眠不足です」

「睡眠不足？ 九月一日の就寝時刻とその時間まで起きていた理由を明確かつ簡潔に」

「・・・・・・・・あああ」

きつい。

「どうしましたか？ 理由が思い出せなければ前後関係を整理しなさい。理由が分からなければ改善のしようもありませんよ？」

この後みっちり、さぼった一日ごとの理由を全て問い詰められた。

分からなければバイト先にシフトの確認を行わせられ、遊びなら久や栄治に確認させられる。

分からないでは許してもらえないのだ。

「で、それで授業に出る為にはどうするのですか？」

「・・・・・・・・気を付けます」

「気をつける、ではなく慶介はいつ、どこで、何を、なぜ、どうするのですか？ 具体的な行動を示してください」

オウ・・・・・・・・5W1H、慶介が、なのでWHOはなし。

ニュースか、この野郎・・・・・・・・。

「ではそれをここに書面にしてください」

「・・・・・・・・はい」

誓約書だった・・・・・・・・。

私庄治慶介は、学校に登校することを誓わされました・・・・・・・・。

。

職業神父でありながら、どうしてここまでビジネスライクな発言なのかたまたまに疑問に思う。

こんな風に南さんの拷問は昼食をはさみ、朝の七時から昼の三時まで続いた。

七時間、だ・・・・・・・・。

教会を出る足取りはふらふらだった。

太陽の名を模した子供 ―高辻日向

「日向？ 聞いていますか？」

「……えっ？」

間拔けな声を上げる。

「あっ……ごめんなさい。なんの話でしたっけ？」

「……今月の仕送りの話です。日向は学費と家賃代しか要求しないですが、生活の方は本当に大丈夫ですか？」

電話の相手が南さんであることを、今さらながら思い出す。

身寄りのない、私たち七人の子供を引き取った足長おじさん。

南悦史。

災害孤児を養うこともまた、神の教えによるものだろうか。

「大丈夫ですよ……いつまでも父親の脛をかじるわけにも
いかないですから」

「子供は、父親に甘えるものです」

そう言いながら笑う南さんの顔が思い浮かんだ。

「そういう甘い親が息子達をダメにするんです」

「……そういうものですか？」

「子供を叱らない大人のそれは優しさではありませんので」

「……なるほど」

少し心配そうな声だ。

思わず噴出しそうになる。

「そういうものですよ。苦勞を知らずに大人になっちゃった子供は、
傲慢でプライドばかり高いもんです」

「そうですか」

「自分の生活費は自分で稼いだりして若いうちに苦勞しておくど、
お金は自分の力で稼ぐものって分かるんですよ。他の皆にもしっか
りそれを覚えさせないとダメですよ？」

「……耳の痛い話です」

「でもお心遣いは感謝します」

冗談めかして言う。

真面目ぶってるようで、その中に一つだけ混ざるユーモアが潤滑剤となり気さくな優等生を演出する。

そんな風に、演じるのだ。

高辻日向を演じる。

「でも、声も疲れています。無理をする前にきちんと言うんですよ？ いいですか？」

「心配性」

「娘を心配しない父親にはなりたくないですよ」

「そのうち彼氏が出来て紹介しに行った時、「お前のような男に娘は渡さん」って言うんじゃないんですか？」

「それは大丈夫でしょう。慶介なら安心して日向を任せられます」しれっと反撃してきた。

「………」

「どうしましたか、日向？」

「………久みたいに爽やかに苛めてきますね………」恨みがましく。

「さて、なんのことでしょうか」

すっ呆ける、我が義理の父。

落ち着け………。

ここで取り乱しては相手の思う壺だ。

ここは平静を装い大人な対応を。

大人な対応を心がける。

「言っておきますが、南さんの想像するような事実は何ひとつありません——」

「言っておきますが、南さんの想像するような事実は何ひとつありません——」

大人な対応をしようと発した言葉は、一字一句違うことなく先読みされた。

「・・・・・・・・」

「まあ、父親ですの」

淡々としながらも、どこか勝ち誇った声。

「明日の予習もあるので・・・・・・・・もう寝ます」

これ以上敗戦の傷を広げる前に逃げることになった。

すごく悔しい・・・・・・・・。

そして勝てたためしもない。

「日向――」

南の口調が真面目なものになる。

「・・・・・・・・どうしました？」

突然の変調に怪訝な声で尋ねる。

「無理は、してないですか？」

「……えっ？」

心臓を鷲掴みされたような錯覚に陥る。

心を、読まれたかのように。

「ははは・・・・・・・・どうしたんですか？」

白々しく笑う。

見透かされたような言葉に、心が平静を保てなくなった。

「いや・・・・・・・・無理をしてなければいいのですが」

取り繕う。

高辻日向を、取り繕う。

「ご心配なく、高辻日向は元気ですの」

そう、高辻日向はその名のように、太陽のように明るい子だ。

「・・・・・・・・そうですか」

「では、明日も早いので、おやすみなさい」

「ああ・・・・・・・・おやすみなさい」

電話を切る。

胸に少しのしこりを残したまま。

それを忘れるように、頭を振る。

大丈夫、高辻日向は太陽のように明るい子なんだから。

高辻日向は・・・そうでなければならぬんだから。

——おやすみなさい、また明日。

ある朝 ―高辻日向

・ ・ ・ ・ ・
・ ・ ・ ・ ・

ピピピピッ、ピピピピッ ・ ・ ・ ・ ・

カチャッ―。

・ ・ ・ ・ ・
・ ・ ・ ・ ・

むくつ。

目覚める。

まだ冬の太陽が顔を出してから間もない時間帯。

冷える朝の空気に布団の暖かさの誘惑が私を縛る。

だが、その誘惑を易々と撥ね退けて洗面台へと向かう。

冷たい水で顔を洗い、意識を覚醒させて。

「おしっ―」

男前な声を上げる。

起きたらまず着替える。

起きたならばいつまでもパジャマでいるのはだらしない、という

のが私の考えだ。

さっと着替えて身だしなみを整える。

寝癖なし。

制服によれはなし。

ならば必要以上に鏡を見る必要はなし。

すぐに洗面所から部屋へと戻り、窓を開ける。

途端に冷たい空気が室内に充滿する。

ここまですが毎朝のルーチンだ。

今日も冬晴れの爽やかな朝だった。

昔は低血圧で朝は苦手だった。

だが、あの重苦しい倦怠感こそが、人間を墮落へと誘う蛇の甘言だと思う。

二度寝は負け――。

この徹底された潔癖さは、私の資質であると自負する。

朝食は必ず食べる。

朝食こそ食べなければならぬ。

一日の活力を得る大切な儀式である。

「いただきます――」

そしてその他もろもろの準備をてきぱきと終えて――。

「行ってきます」

登校する。

ちなみに佳織が起きるくらいの時間である。

通学途中。

道行く人は制服よりもスーツに身を包んだサラリーマンが圧倒的に多い。

部活は陸上部。

強豪校ではないが、そこそこにやる気がある部活なので朝練がある。

なので、私の登校時間は皆よりも一時間ほど早い。

普段ならば、知り合いに出会うことなど滅多にないのだが。

「おはよう、日向」

「あれ、久？ おはよう、今日は早いわね」

「日直なんだ」

「優等生ね」

「日向は朝練？」

「うん」

「陸上って楽しい？」

「別に、楽しくはないかなあ。運動不足解消ってだけだし」

「それにしては真面目だね。朝練まで行くなんて」

「そういうルールだから守らないと。久こそ、日直で生真面目に早く登校なんてさすが仮面優等生ね？」

揶揄する。

「与えられたことをこなすだけで高評価が貰えるんだ。ボロいものだよ」

久は清清しく笑う。

「……………腹黒すぎる」

溜め息をついた。

「自己育成って言葉はないの？」

「育成結果に評価を下すのはいつだって他人だよ。だったらアピールとかなないと損でしょ？」

「……………」

慶介と違う意味合いでぶっとんだ人間である。

仮面優等生。

後ろめたい感じもなく、平気でそんなことを言う。

「あなたのお姉さんはそのことを言って怒らないの？」

「悠希？」

日向にとって、常識を分かち合えるのは悠希だけである。

「他人の顔色伺ってオドオド生きているのがあなたらしいってさ」

「……………痛烈ね」

「弟が可愛いから苛めなくなるんだよ」

「ポジティブ過ぎ」

並んで登校する。

「そう言えば、慶介、今日は来るのかしら……………。南さんが慶介の出席日数を心配してたけど……………」

「絶対来るよ」

「言い切ったわね……………」

「慶介は昨日、南さんに七時間絞られたらしいからね」

「うわぁ……………」

聞いただけでげんなりする。

「私は、一回しかないけど」

「天体観測？」

「そうそう」

わざとらしく眉を寄せて。

「久——、あなたはなぜ禁止された行為をわざわざ行っただのですか？
納得できる理由があるのならば述べてください」

南さんの口調を真似る。

「・・・・・・・・ありません」

「ならばあなたの軽率な行動でどのような事態が予測されますか？
考えられるケースを全て挙げて下さい」

「・・・・・・・・あの時は本当に胃が痛くなったよ・・・・・・・・」

「私もよ、スラスラと答えてた悠希がほんと羨ましかったわ」

「悠希の思考は客観的だからね」

「あれ？ 噂をすれば」

前を歩く慶介の姿があった。

慶介がこの時間に登校するのは滅多にない、というか初めてかも
しない。

「慶介、どしたの？ こんな朝早くに」

「・・・・・・・・久に日向か」

「アンタ声が死んでるわよ・・・・・・・・」

「・・・・・・・・眠すぎて頭が取れそうだ」

「新しい表現だね」

「新しすぎて理解できない感性ね・・・・・・・・」

高辻　―庄治慶介

その深窓には、少女がいた。

夕暮れでもないのにその瞳は赤く爛々と輝いていた。

透き通った銀色の髪、細く病的に白い肢体。

「あそびたくても、あそべないの――」

その大きな館の奥底には、美しい人形のような少女がいた。

美しく儂い、孤独にして空ろな存在。

だからだろうか。

美しいというよりも、寂しそうという印象が勝った。

「私の妹だよ――」

背中から、陽子に告げられた

＊

何年前になるかはよく覚えていない。

俺と久が教会に引き取られてからの話だ。

その後に悠希、そして栄治と佳織が引き取られた。

それからしばらく後の話だ。

南神父が、その少女の手を引いてやってきたのは。

第一印象は、綺麗な顔つきでありながら、どこか強い意思が見え隠れする少女だった。

ぱっちりとしていながら、きりっと釣り上がった気の強そうな目。

儂さなど無縁の、真っ直ぐとした印象だった。

「誰だソイツ――」

いぶかしむ五人の少年少女の視線を、俺が代表して口にした。

初めて会う人間だったら例えば子供でも敵意をもって接する。

俺たちは常にそうやってきた。

だから、栄治と佳織と打ち解けるのにも長い時間を要した。

だが敵意に晒されてその少女は怯むことはなかった。

「口の利き方がなってない。初めて会った女の子をソイツ呼ばわりするのも失礼極まりない！ 名前は自分から名乗った後に尋ねる！ アナタは全然礼儀がなってない！」

あろうことか、ズバズバと正論を突きつけてきた。

「はぁ……」

南神父の口からため息がもれた。

「空気読めよ。歓迎されてないことくらい分かるだろ？」

「佳織、止めなさい」

南さんにたしなめられても、佳織は敵意に満ちた視線を止めなかった。

「始めから歓迎する気がないって態度が気に入らない！ その仲間内でって感覚が矮小で卑屈！」

「貴方も止めなさい。正しいことを告げて怒るだけでは解決しないことだってあるのです」

「む……」

不肖不肖といった感じだ。

顔合わせは、最悪の一言に尽きた。

「今日からあなたたちの仲間になるのですから、そう邪険にはしてはいけません」

「……聞いてないよそんなの」

気の弱くか細い声で、栄治が声を上げる。

「何よナヨナヨして、言いたいことははっきりと言いなさいよ！」

「ひっ——」

栄治がそそくさと久の後ろに隠れる。

「だから止めなさい。強く言うだけでは、相手を萎縮させるだけで却って言いたいことが伝わらない時もあるのですよ？」

「……」

無言で少女は俺たちを睨む。

上等だった。

こちらとて、そんな正論を振り回すヤツと仲良くする気はない。
全面戦争だ。

そう思った瞬間、がたり、と椅子を引く音と共に悠希が立ち上がる。

「悠希？」

久が尋ねる。

「こうしていったって話が進まないでしょ？」

悠希はつかつかと少女の前に歩を進める。

いつもどおりの無愛想で無表情な顔で、でもどこことなく威圧感のある彼女に少女は少し気圧される。

「始めまして、沙耶悠希よ。あなたの名前は？」

優雅に、髪を少し上げながら。

「えっ………？」

少女ははっと顔を上げる。

どうやら、悠希に見とれていたようだ。

気持ちは分かる。

悠希は綺麗な少女だった。

だがその綺麗さは愛らしいというよりも、どこか神秘的な造形美のような美しさだった。

「名前………ないのかしら？」

「あっ、えっと」

慌てて名前を告げようとする。

「み………日向、高辻日向——」

——その名前を、口にした。

高辻という姓は、有名だった。

政令指定都市御座市の最後の市長。

名前を高辻洋平といった。

ここまで言えば分かるだろう？

原子力発電研究施設にゴーサインを出した男だ。

ブラック・マンデー第二の事件、御座市営地下鉄爆破事件。

それは彼、高辻洋平を殺害するために数百人の命を巻き込んで起こったテロだった。

それにより、高辻洋平とその妻、息子は死亡した。

死亡したと、発表された。

正確な調査は行えなかったということだ。

原子炉の融解、塚本一家の毒殺、治安の低下から相次ぐ犯罪に警察機関は麻痺状態であり、捜査に対して人員を割くことは出来なかったのだ。

だから、高辻洋平の息子が生きていたとしても何ら不思議はない。例えば、母親の横に身元不明で丸焦げの子供の死体が転がっていたら、暫定的に彼女の子供と判断するだろう。

高辻日向——享年七歳、その墓標はない。

ただ、南教会の裏にある墓地にてブラック・マンデーの被害者たちは眠っている。

「高辻日向——ね……」

誰にも聞こえないように呟いた。

高辻日向は、男だ。

では目の前にいる同姓同名の少女はただの偶然なのか、それとも――。

クロさん ― 庄治慶介

「よお」

かったるい授業もようやく終わり、今日は帰って寝ようと思っていたのに、思わぬ客だった。

「クロさん」

黒瀬智也、塚本研究所原子力発電システム開発室所属。

その仕事柄、幼い頃よく俺の家にも仕事で訪れていた。教会時代よりもさらに古い付き合いだ。

妙齢の男。

あの時で既に二十代半ばだったはずだから、今では下手すると四十台かもしれない。

しかし見方によれば、クロさんは今二十代半ばと言われても通用するかもしれない。

「今はクロさんじゃないがな」

「えーっと、加藤さんだったか？ どうせ本名じゃないしどっちでもいいんじゃないのか？」

「ほう、小僧。だったら俺もお前を本名で呼んでもいいのか？ お友達の前で」

そいつは困る。

「………加藤さま」

「様はいらん、余計だ」

「へいへい」

んで真っ黒なヴァーゲンで学校に乗り付けてなんの御用だ。

「なんか用なのか、ってツラだな？」

「そりゃあ、こんな柄の悪いオッサンに絡まれてたら悪い噂が飛ぶじゃねえか」

「だったらその金髪を黒く染めて来い。お坊ちゃまばかりのここじゃ目立ちすぎるだろ」

「ああ、俺のこたあいいんだよ、何か用なのかオッサン？　最近めつきり姿を見せなくなったクセによ」

そう言うのと、クロさん、改め加藤サマはにんまりと笑う。

ちよつと不気味じゃねえか、こんなに機嫌がいいのは。

下手すりゃこんな顔、ブラックマンデー後は見たことなかったんじゃないか？

「慶介……、憎しみは忘れてないか？」

「……ああ」

不意打ちだった。

単刀直入に俺の傷口を抉った。

「そろそろなあ、楽しいショーが始められそうなんだよ」

本当に、楽しそうに加藤サマは喋り続ける。

嬉々として、歪んだ笑み。

「慶介、お前は どうする？　これは最終確認だ。お前の意思が聞きたい」

「そんなん……決まってるじゃねえか」

即答だった。

自分でも驚きじゃねえか。

「わざわざ、聞くんじゃないよ」

「いいのか、と思ってな。お前は最近随分とぬるま湯がお気に入りみたいだったからな」

「……」

凶星だった。

仕方ないだろうが、誰だって怠惰なぬるま湯は大好きだからな。でもなあ。

「お、母さん……」

「止めろ……下手に喋るんじゃない」

ふらふらとした足取りの少年を抱き、その口に手を当ててふさぐクロさん。

「ああ、あ………」

クロさんの指の間から漏れる、少年の喘ぎ――。

少年の目の前に広がる、もこっと何かにかぶせられた白いシート。
床一面を覆うように、何枚も何枚も、たくさんのものを隠す為の
白いシート。

あちらこちらですすり泣く声と、上がる怒声。

ああ、母親は、あの中のどこにいたんだろうか？

どこかに居たはずだったんだがな。

ああ、父親は居なかったはずだ。

木っ端微塵で原型を失ったらしいからな。

「帰ろう………」

クロさんの声は、泣いていた。

俺を抱きながら、泣いてくれた。

「どこ、に………？」

俺は尋ねた。

だって、もうすでに俺の家は燃やされてしまったのだから。

「俺の部屋に來い」

行って、どうするのだろう。

それに約束した。

母親は帰ってくると。

待ってなくちゃ。

だけど、どこで待ってたらいいんだろう。

家はもうないのに。

「………母親は、もう帰ってこない」

母親は約束を破ったことがないんだ。

必ずって言った。

だから、必ず帰ってくる。

俺は必死にそれだけに縋り、泣きたいのを堪えた。

「………俺が、お前を育てる」

そうしてクロさんは再び涙を流した。

それを見ていると、我慢してたのに、認めまいとしてたのに、それが全部溢れてきて、滅茶苦茶になって、心臓が早くなって、涙が溢れた。

「……俺が、お前を守るから」

——ごめん、お母さん。

泣かないで待ってるって約束したのに、おれ、泣いてしまった。一度泣いてしまうと、色んな感情が決壊した。

幸せだった分が絶望になって、好きだった分が憎しみになった。母親に教わったコト。

人を憎んではいけません。

みんなと仲良くしましょう。

相手の気持ちを考えてあげましょう。

そうやってみんな、優しい大人になっていくんです。

ああ、お母さん、ごめん……。もうよく思い出せないんだ。

あなたの言うことは全部間違いだったから。

だって、そうじゃないか。

クロさん以外の大人たちは、そうした全てを裏切って、俺たち家族を踏みにじった。

食い物にしたじゃないか。

そうして俺は、その日から母親を待つことを止めた。

残ったのは、憎悪と絶望だけだった。

クロさんも結局約束を守ることはなかった。

ブラック・マンデー最期の事件——通称『審判』と呼ばれる事件だ。

その鉄槌を受けたのは、井端紫音という女性——クロさんの婚約者だった。

クロさんも帰らなくなり、俺は結局クロさんの部屋にやってきた南神父に引き取られた。

なあ、憎しみが簡単に癒えるワケはないよなあ……。

それが過失ではなく故意だしたら、許せるはずがねえんだよ。

『慶介は、話に乗るんだね?』

久の言葉が、聞こえた。

——ああ、わりい久、その約束は上辺だっただろう?

「——慶介?」

冷や水を浴びせられたように、憎しみが冷める。

振り返ると、そこに日向がいた——。

「・・・・・・・・慶介、何やってるの?」

「何って・・・・・・・・」

咎めるような口調だった。

「じゃあな、慶介。俺はもう行く」

恭介は去り際に、俺に耳打ちした。

「くれぐれも喋るなよ慶介。喋った相手も巻き込むことになるぞ」

ああ、分かってる。

これはそういうことだよな。

そのまま恭介は車に乗り、学園を去った。

それと入れ替わるように、日向が追いついてくる。

「慶介、あの男に何言われたの?」

「なんだお前、知り合いなのか?」

「質問してるのはこっち」

——喋った相手も巻き込むことになるぞ。

あのオッサン、コイツとも何か事情があるのか?

日向はクロさんを知ってるみたいじゃねえか。

「別になんでもねえよ、道聞かれただけだ。テメエこそあんな怪しいオッサンなんで知り合いなんだよ?」

日向には、聞こうとして聞けないことがあった。

それは暗黙の了解にかかることだったから。

——俺の名前を語るお前は、一体何者なんだよ?

俺に分かるのは、高辻日向という名前だった過去の俺と密接に係しているということだけだった。

だが、俺はお前のことなんて知らない。

「こっちだって、道を聞かれただけよ！」

すげえ偶然だな、オイ。

「んなワケあるかよテメエ、ナメてんのか。奥歯グダグダ言わすぞ！」

「煩いわね、そっちこそ答えなさいよ！それに、それを言うなら奥歯ガタガタ言わす、でしょうが！」

「ウッセ。テメエ白状しろ」

「アンタが先でしょ」

正門の真ん中でいがみ合う。

迷惑極まりない。

三十センチの距離でメンチを切りあう。

「・・・・・・なにしてるの？」

いつの間にか、のぞみが不思議そうに眺めていた。

「多分キスしようとしてる」

その後ろには、腹黒王子様の久がいた。

「違う——」

「違うわよ——」

「あっ、ハモった」

のぞみはいつも通り楽しそうに笑っていた。

「ね？ 仲いいでしょ？」

「うんうん、そうだね。喧嘩するほど仲がいい恥ずかしいバカップルって感じだね」

「のぞみ・・・・・・もしかして喧嘩売ってる？」

日向の声が低くなる。

「えー、そんなことないよー」

やましいことなど何もない、と言わんばかりに曇りなき笑顔だ。久の調教の賜物だ。

腹黒王女様が誕生したのだ。

「・・・・・・・・慶介、平和だね」

久がぼつりと耳打ちする。

確かに、平和だった。

目の前には日向がのぞみを追い掛け回す光景。

これが、いつまでも続けば、とたまに思う。

続けたい、とも思う。

「何があったか知らないけど、顔色悪いよ？」

この男は鋭い。

鋭いというよりは、目ざといと表現したほうが妥当かもしれない。

でも、心配させてしまうほど酷い顔してたんだろうな。

怖いんだよ。

たまに自分が恐ろしくなることがないか、久？

「・・・・・・・・気のせいだ」

もしかすると、自分のせいで目の前の光景が失われてしまうかもしれない。

お前は、そう思ったことはないか？

放課後の光景 ― 庄治慶介

「というわけで、三対三、トリプルデート!」

「どんだん、どんだん」

「ばふばふ、ばふばふ」

女性陣のテンションは鰻上りだ。

佳織、陽子、のぞみ、ノリの高い三人が集まった。

あの後、日向はバイトへと向かい、久とのぞみと街に繰り出した
際にこのビッチコンビと出会ったわけだ。

「いつもの遊びと変わらない気もするけどね」
と久。

んで、変態栄治も呼びつけてやった。

合コンしたいと言ってたからな。

「バカ、ヒッサー。気の持ちようだっちゅーの。これはコンパ、合
同コンパ略して合コン、合コン、合コン、合コン――」

「いや、洗脳とかしなくていいからね?」

「たはー、ノリ悪いなオイ。今日の合コンを盛り上げる麗しきご令
嬢三人の登場だチエケラ!」

佳織のテンションはいつも通りハイだ。

「ビッチ・ワン、ビッチ・ツー、ビッチ・スリー」

中指を立てて数えてやった。

「おい、黙れ野獣」

「慶介くん、私まで数に入れないでね」

……おい、笑顔でさりとデイスったぞ?

春賀のぞみ、恐るべし、だ。

「それで何するの?」

久が俺に問いかける。

「さあな」

めんどくせえ。

久よ、頑張ってくれ。

「うっ、いざ合コンとなるとどうすりゃいいのか分からない。ウィキらないと……」

栄治、お前には何も期待していない。

あとコレは合コンじゃねえ。

「のぞみは何かある？」

「んー」

久に尋ねられ、何かを考えるそぶりののぞみ。

アイツもたまに考えてることがよく分からん。危険人物の一人だ。
「何かしようって言っても遊ぶことって案外限られてるよね？」

「そだね、ボーリングにカラオケ、ビリヤードにダーツ。後は鍋とか？ 案外することって限られてるよね？」

いつの間にかのぞみと陽子が仲良しだ。

森野陽子恐るべし、順応能力が高い。

……恐ろしいヤツばかりじゃねえか。

「映画って選択肢もあるぞ」

口を挟んでみた。

「映画かー、今何やってるん？」

と佳織が尋ねる。

「特に映画に興味はないからよく分からん」

「じゃあ何で提案すんだよ」

佳織にチョップを入れられる。

「ふたりはプリーー」

「おい野獣、変態の口を塞げ」

「サー、イエッサー」

変態栄治が何か言い終わる前にとりあえずポケットに入ってたものを栄治の口に突っ込んだ。

「ぐぶっ——」

苦しそうだが自業自得ってヤツだ。

「ふう、危機は去った。んで何しよっか？」

「佳織ちゃん、いつも彼酷い扱いだよね？」

「こうされると喜ぶんだよ。マゾだから」

「んーんー！」

否定したそうだが、上手く喋れない様子の栄治。

「ところで慶介くん、何突っ込んだの？」

のぞみが問いかけてくる。

「ああ、とっさにポケットにあるもん突っ込んだからな。知らん」

「げほっげほっ……、慶介……、何すんだよ……」

・・」

とりあえず栄治の手の中に握られているブツを確認しようとして、時間が止まった。

「慶介くん？」

のぞみはいつも通りの笑顔だが、なぜかその視線に軽蔑の色が見える気がする。

そりゃ当然か。あれ、コンドームだからな。

「慶介、せめて財布にいれるとか……」

「んー、何々？ おもしろいこと？」

佳織と陽子も騒ぎに気づいて覗き見ようとする。

「栄治、隠せ！」

「えっ……？」

慌てつつ、栄治はブツを自分のポケットにしまいこんだ。

ってアレ唾液塗れじゃなかったのか？

「なんだ、何隠した野獣？」

「知らん、たった今記憶喪失になった」

「なんて都合のいい脳ミソ……」

「突っ込みはいいんだ陽子ちゃん、ヒッサーは見たんか？ 見たんだな？ 教えろ」

「ああ、えっとね」

——しまった！

久は別に暴露したところでヤツの地位が危うくなることはない！

俺だけが一週間ほどいじられるハメになる！

そして話は日向へと伝わり、アイツの機嫌が意味不明に悪くなるじゃないか。

そして俺は意味もなく蹴られるハメになる――。

よく見ると、久はこちらに目配せをして笑っている。

仕方ない、背に腹は変えられん。

携帯電話からチャットルームに飛んだ。

携帯電話でのチャット機能は男同士の密会にてよく利用されている。

チャットルームのページに飛ぶと、既に久がログインしていた。
なんと仕事が速いヤツだ。

『学食のランチ』

送信――。

佳織から見えない位置で器用に久の左手が動いている。

見事なブラインドタッチだ。

『三食分？』

くっ、足元を見やがる！

一食、と打とうとしたところ――。

「えーつとね、お腹がすくと思ひ出すと思うんだ。学食の一食や二食じゃやっぱりお腹減るよね」

「えっ、ヒッサー何言ってるの？」

コイツ、エスパーか！

「.....」

のぞみが、ニコニコしながら携帯を取り出す。

ああ、嫌な予感がプンプンだ。

――のぞみ、ログイン。

『私は学校前のファミレスのデザートがいいなあ』

ファック――！

恐るべし春賀のぞみ、あの一言で全てを悟りやがった！

『隠してたけど、実は私エスパーなのだー』バイ、春賀のぞみ。

エスパ―だらけ――！

『……二食、デザート二種』

せめて妥協案を吞んでくれ――。

送信。

「ああ、お腹がすいたな―。あつ、何か思い出すかもしれない！」
「私もなんか糖分が足りないんだよね―、あ、何か宇宙からの意思が――」

おのれえええええ――！

コイツらは悪魔か？

天使のような悪魔の笑顔を久とのぞみは浮かべている。

『三食、デザートはお気に召すがままに……』

完全敗戦だった。

ポーツマス条約並みの降伏条件を飲む羽目になった。

敗戦国の結末はいつの時代だって悲惨なものだ。

「アンタらさっきから何を言ってるの？」

怪訝そうに佳織と陽子は眉を顰めた。

クソ、栄治のせいで思わぬ出費だ、アイツに半額出させてやる。

というわけで、やってきたのはビリヤードだった。

「ビリヤードというのは大勢で出来るものなのか？」

素朴な疑問だった。実はビリヤードは初めてだったりする。

「あれ、慶介はビリヤードしたことなかったっけ？」

久が尋ねる。

「ああ、上流階級の遊びには興味がない」

「別に上流階級ってワケじゃないけど」

俺の中の勝手なイメージだ。気にするな。

「なんか意外。汚物クン遊びなれてるイメージなのにね」

もはやそのあだ名に突っ込む気にもなれん。

好きに呼べ。

「あれだ、汚れ野獣は放課後の付き合いは悪いからな。バイトバイ

トって年中いかかわしいことしてんだ」

クククッ……お前らは本当に俺を退屈させないなあ！

「でも慶介くん年中金欠のイメージがあるよね？」

「のぞみよ、お前だけだ、俺を名前で呼んでくれるのは――この汚れた現代に汚されていないのは。あと金がないのは月末だけだ。大体バイト代が底をつきる」

「へえ……」

なぜか久が頷いた。

「慶介は單車買ったからね。そのローンもあるんだよ。いいよね單車。あこがれるけど慶介みたいに背が高くないから似合わないんだよね」

久の会話にのぞみが乗っかる。

「分かる分かる、なんかカッコいいよね、アウトローって感じ」

ふっ、さすがだぜ。

違いの分かるカップルだ。

「ふっ、お前らはモノを見る目があるぜ。そのビッチ共とは大違いだ。俺は今とても気分がいい。お前ら好きな飲物を頼め」

「わーい」

「よしよし」

ヨイシヨされて気づかなかったが、コイツらが俺を突然褒めたのは今日がちょうど月頭だったからだ。

さっきの会話から俺の懐が暖かいことに気づいたのだろう。

ちなみに俺がヨイシヨだと気づいたのは今月末のいつも以上の金欠地獄に陥ってからだった。

「んじゃあ何するかね」

佳織が立ち上がり、ボールを三角形の淵に入れながら尋ねる。

「ビリヤードじゃないのか？」

「だからー」

「？」

ちなみに俺のビリヤードの知識は、棒で玉をつく、以上だ。

「トランプでもババ抜きとかポーカーとかあるだろ？」

栄治が説明してくれる。

「なるほど、お前実は教えるの上手いな。将来学校の先生になって生徒達に『ジャパニーズ萌え』でも教えたらどうだ？」

「ふっ……文部省が許したらね」

「なんかカッコいいじゃねえか。大物っぽいぞ今のお前」

「だー、話進まねえよお前ら」

佳織に呆れられてしまった。心外だぜ。

「ねえねえ、汚物クン初めてなんだよね？　じゃあ突き方とか教えるところじゃない？」

とまあ陽子が提案してくれるわけだが、その前にスゲェ気になることがある。

「なあ、お前俺の名前覚えてるよな？」

「……てへっ」

「可愛い子ぶろうとしてもダメだ。むしろ無駄だ。ブリブリ下痢のブリっ子だ」

「最低だよ、アンタ！」

「そんな穢れきったビッチに真のブリっ子というものを見せてやろう、のぞみ！」

「はーい！　春賀のぞみ、ブリっ子いきまーす」

「テンション高！」

佳織はこの突っ込みが多いな。まあいい。

のぞみは俺の隣の椅子に座り上目遣いに潤んだ目を向ける。

「早速伝家の宝刀が抜かれた、斜め四十五度の視線攻撃。大抵の男はこれで自分に気があるんじゃないか？　とイタい勘違いをしてしまう恐怖の奥義だ！」

久もアゲアゲで解説していた。

そう、斜め四十五度の角度は神の角度だ。

角膜にライトが反射して映り、キラキラと輝く瞳を演出する。

そして男の下半身のエイトビートをペースアップさせる寸法だ。

……くっ、可愛いじゃねえか。
いかん、いかん——！

俺とてこの針木砂漠の虎と呼ばれたハードボイルディーだ。
俺のプライドにかけて貴様を撃退してくれよう。
斜め四十五度いかなるものぞ。

日本を背負う真の益荒男には通用しないことを教えてやろう。
こい、春賀のぞみ！

「けーくん」

——ぬおおおおお。

ちよ、ドキつとしたドキつとした。

まずい、ちよ、タンマ！
なに？

けーくんって俺のこと？

それってチョコー甘酸っぱい響きなんですけど！

「ねえ……」

タンマは聞き入れられず、のぞみは俺の胸板に一指し指でのの字
を書き出した。

ふおおおおお——！

な・ん・だ・コ・レ・は——！

魂の雄たけびが聞こえる！

益荒男よ！

明日の日本を背負うはずの俺の益荒男魂よ！

お前は既に折れてしまったのか？

なんだかもやもやとする甘酸っぱい『ブリっ子・ストロベリー・
テク』に、お前の精神はすでに海綿体と化してしまったのか？

この国に未来はないのか？

首相よ、まずは景気だろうが！

「ねえー、のぞみー、ストロベリー・サンデーが食べたいのー」

「オーダー、ストロベリー・サンデー！」

思わず立ち上がり、指を鳴らしていた。

「かしこまりました。ストロベリー・サンデー。以上でよろしいです
ね？」

……オーダーされてしまった。

「ごほんっ、とまあ、コレが本当のブリっ子というわけだ……」

「……随分と軽く騙されたことで」

陽子は軽蔑の眼差しだった。

「久くん久くん、デザートまでゲットしちゃったよ！」

「よくやったよ、さすがのぞみ！　ねえ、僕ももらっていい？」

「うん、いーよ。一緒食べよ」

のぞみはいつの間にか久の隣に移動していた。

「……」

なんだろうか、この一縷の寂しさは。

栄治がポンつと肩に手を置く。

「……これが寝取られ属性ってヤツさ」

「ウルセエ……」

俺の中で三分の一の純情な何かが深く傷ついた気がした。

恐るべし、春賀のぞみ。

「んじゃまあ教えてあげますか。えっとー……？」

「慶介だ。二度と忘れぬよう脳髓に叩き込むがいい」

「ブーブー、教えてもらう立場じゃない。ひざまづいて私の足を舐めて、教えてください、って言わないと教えてあげない」

「やつてもいいがそのままスカートの中までべろんべろんに舐めま
わすぞ？　それでもいいか？」

「あー……、そんなに面前と性犯罪宣言されると却ってすがすがし
いなあ……」

「思わない、絶対思わない！　アンビリーバボー！」

栄治が髪を掻き毟っていた。おお、新しいリアクションだ。

「ああ、オメエそれ寒みいよ」

「シヨックー」

海老のように仰け反った。

あれだ、栄治の動きはカクカクしてて、エガちゃんみたいだ。
面白れえじゃねえか、体張りやがって。

んで端っこの机で久とのぞみがパフェ食ってやがる。
なんだこのカオス空間は？

「んじゃまあ、面白いコトになってるけど教えるね」

「ああ」

というわけで陽子先生のビリヤード講座が始まった。

「キューを真っ直ぐ突くためには左手で軌道を固定しないとダメな
ワケ」

そう言って陽子は左手の人差し指の背中に中指を置いて輪っかを
作る。

「そこにこの棒を通すのか？」

「正解」

「よし、ではインサートしてやろう」

「その言い方やめい」

キューで脳天をかち割られた。

「貴様……、俺の明晰な頭脳が馬鹿になったらどうしてく
れる？」

「はいはい、分かったから次行くよ」

ボケを殺しやがったぞこの女！

……よかろう、そっちがそのつもりならば本気を出してやろう。

「そんで玉の前に左手を置くわけ。そこにこうやってキューを通し
て狙いを定めるわけ。白い玉を動かして狙った数字をポケットに落
としていくの。ここまではオッケー？」

「棒で玉を突くわけか、ホモ・セクシャルな遊戯だ」

「あー、この人もしかしてビリヤードの時間ずっと下で走るつもり
ですかねー」

「玉と棒が出てきたらそういうフリだろうが」

「はいはい、遊び終わったらすぐに脳外科に行ってロボットミイして
下さいね」

中々痛烈なジョークじゃないか。

「こうか」

左手を台に置いて輪っかを作り、そこに棒を通して上半身を低く構える。

「そうそう、結構サマになってるよ」

「ふっ、そうだろう？ これからはハッスラー慶介と呼べ」

「ハスラーね」

「いいんだ、気分はハッスルしている。問題はない」

「……何をハッスルするつもりだよ」

ふっ、ようやくフリを返したな？

「帰ったらワイフに射精するつもりさ、ハッハッハッ——」

「だから、そろそろお上品な感じでよろしく」

再びキューで脳天をかち割られた。

ハッスル、発する、射精する、とかけたわけだが俺のライムは高度過ぎたようだ。

「とりあえず、あの二番をポケットに落としてみよっか。二番のボールのちよつと右寄りに白い玉を当てて方向を左寄りにするわけ。やってみて？」

「よしきた、まかせておけ、落として濡れ濡れにしてやるぜ、メス犬二番」

無言でキューでかち割られた。

俺も成長しないな。

……まあいい、おふざけはここまでだ。

ここから俺の華麗なるビリヤードレジェンドのスタートだ。

第一章、活目せよ！

「ふっ——！」

掛け声一閃、キューを突き出す——！

全力で突き出されたキューは玉の僅か手前で上昇し——！

……。

……上っ面をかすっただけだった。

「・・・・・・・・」

白い玉は情けなくコロコロと転がり、二番に当たる前に動きを止めてしまった。

なんだこの結末は？

レジェンドが始まるはずじゃなかったのか？

まるでダサイヤツじゃないか今の俺！

「ぷっ——」

佳織たちが腹を抱えて笑ってやがる。

クソッ、なんなんだこの屈辱は！

ダサイを通り越してイタイじゃないか！

「おい野獣、ギャグか？」

クソ！ 佳織め、ここぞとばかりに。

「かおりん止めなって、始めはみんな力んでこんな感じでしょ？

始めっから野次られたら楽しめないよ」

——なんかちょっとだけ感動した。

「・・・・・・・・お前って結構いいヤツなのか？」

「今までどういう目で見てたのよー」

ふむ、佳織と違って騒ぐだけのヤツじゃないようだ。

心の機微を敏感に察知して相手を思いやる事が出来るヤツじゃないか。

少しだけ見直した。

「力はね、全然入れなくていいんだよ」

そう言って陽子は俺の後ろに回り左手とキューにそれぞれ手を添える。

後ろから覆い被さるように手取り足取りだった。

「玉の真ん中を正確に確実に突くようにするといいよ？　こんな感じで」

彼女がキューを緩やかに動かす瞬間、背中に柔らかな膨らみが当たる。

着やせするタイプなのか？

中々の上玉をお持ちじゃないか、C、いや、Dか。

打ち出された球は真っ直ぐ進み、二番の玉に当たった後、そのまま二番の玉はポケットへと落ちた。

「うん、いい感じ」

「・・・・・・」

「とまあこんな具合にやるんだよ、オッケー分かった？」

「・・・・・・オッケー、Dだな」

「D？　なにそれ？」

「お前の胸の大きさだ」

「・・・・・・」

そうして四発目の脳天がち割りだった。

うむ、正直なのは時として罪になるのだ。

まあ、それはそれとしてだ、時に――。

「貴様ら、なんでそんなに静かなんだ？」

壁際でこっちを観察している四人に問いかける。

静か過ぎて気持ち悪いじゃねえか。

「いい雰囲気だ。ベタに純愛すぎて慶介に似合わない」

久よ、貴様何を言ってるやがる？

「グレイプフルーツジュース」

のぞみよ、甘酸っぱい飲み物に例えるんじゃない。

「だがそれも今晚にはパイヤ、マンゴー、肉棒のラブミックスジュース」

あからさま過ぎだ、佳織。

「ラ、ラブコメ・・・・・・、リアルラブコメ・・・・・・」

栄治は栄治で血の涙を流していた。

そこまで羨ましかったのか？

「おい、お前がくつつき過ぎるから俺は動物園のパンダ状態じゃねえか」

「ふーん・・・・・・」

陽子は悪戯な笑顔を浮かべる。

「まあ、それでもいいんじゃない？」

「なっ——」

そう言って陽子は俺の腕に抱きついてきた。

「爆弾発言！」

「ベリーベリーサンダー！」

「あらやだ、最近の若い子のはしたない！」

「死を！ 羨ましき男に死の鉄槌をおおお！ 聖なる審判をおおお——！ アレキサンダーを召喚せよおおおお——！」
うるせえ、コイツら。

陽子はしばらく俺の腕に抱きついたまま笑っていた。

ああ、ハードボイルドで通している俺の印象がズタズタじゃねえか。

こんな青春グラフィティーを展開しやがって。

「……まあ、でも」

誰にも聞こえないように呟いた。

「楽しけりゃいいか」

そう、こんな毎日が今ここにある。

『慶介……、憎しみは忘れてないか？』

クロさん、俺は忘れてないよ。

でもなあ、本当は忘れたくて仕方がないんだ。

過去と未来の二者択一の問い——。

叶うならば、全ての憎しみを忘れ、未来を選べますように——。

放課後の光景 ―高辻日向

「・・・・・・・・ねえ、美月」

「何？」

「日向のこと、好き？」

「な、なな何を――？」

「あらあら、沸点到達」

「お、お姉ちゃんが変なこと言うから――！」

「別に変なことじゃない、これ人の摂理なり」

「・・・・・・・・そうかもしれないけど」

「愛はけして、変なことじゃない」

「聞いてて恥ずかしいよ」

「だから、けして恥ずかしいことじゃないの」

「・・・・・・・・」

「美月は、私のこと嫌い？」

「・・・・・・・・そんなことは、ない」

「じゃあ、好き？」

「・・・・・・・・うん」

「では胸に手を当ててください」

「？」

「は・や・く――！」

「う、うん――！」

「どう？」

「どうって・・・・・・・・何がよ・・・・・・・・」

「それは、恥ずかしいことかな？」

「・・・・・・・・」

「私も、美月のことが好き――」

「・・・・・・・・うん」

「これはけして、恥ずかしいことじゃないよ」

「・・・・・・・・うん」

「愛はとても素晴らしいことなのだ――！」

「ねえ、高辻さん」

クラスメイトに声をかけられるのは珍しかった。

「何？」

けして仲がいいというわけではなかったが、邪険に扱う理由もない。

「ちょっとした親睦会すんだけどさー、高辻さんも行かない？」

「親睦会？」

彼女の後ろに集まる一面を見渡してみる。

二つのグループが一つの大きなグループになっていた。

時々思う、教室は世界の縮図のようでもある。

手を組んで幅を利かせ、弱い者を叩く。

誰もが優位であろうとするために強いものを仲間に取り入れようとする。

あるいは、平穏を得たいがために強い集団に帰属する。

そうやって友達を選ぶ。

どこにも属さず中立を保ち、だが、慶介や佳織といったある種の強さに溢れた人間と徒党を組む私を勧誘し、その恩恵に預かりたいのだろう。

笑いそうになる、これが彼女たちの言う友情ってヤツだ。

「・・・・・・・・」

昔の私ならば、反論したかもしれない。

アンタたち、本当に私と遊びたいって思ってるの、と。

でも、それは言うてはならない言葉だ。

私には、けして言う資格のない言葉――それが、友達の在り方について。

正論ばかりを盾にする昔の私に、悠希は冷たく告げたのを覚えて

いる。

『アナタの正しいお友達論を私たちに強要しないで。それは侵略よ』深く踏み込まず、お互いの上っ面だけでヘラヘラとする教会の子供たちが最初は許せなかった。

南さんには正しいことを常に指摘するのが正しいとは限らないと言われたが、幼い私にはその言葉が理解できなかった。

だって、そんな友情嘘っぱちじゃない、って。

私にとっての友情は、姉さんと彼、日向くんとの思い出が全てだったから。

いつでも私を気遣ってくれた姉さん。

身体の弱かった私をいつも励まし、親身になって悩んでくれた日向くん。

そんな苦しみを共有できる関係こそが友情だと信じて疑わなかったから。

きつと高辻日向ならば、そうやって踏み込んで、一緒になって苦しみ、そして喜んであげられるはずだから。

でも、それが揺らいだのはいつだっただろうか。

そう、慶介。適当で、傲慢で、いつも私と衝突していた男の子が突然泣き出した時だった。

ブラックマンデーから五年が過ぎ、閉ざされた死の街が事件後初めてテレビ越しに姿を見せた。

雪のような白い灰と埃に覆われて、それに光が反射してキラキラと舞い上がっていた。

日が落ちかけた廃墟だらけの街から天へと昇る輝く埃たちは、全ての魂を浄化していくようでもあった。

慶介は短く嗚咽を上げて蹲り、震え始めた。

友達だったら駆け寄って、背中を撫でたり、慰めたりするべきだと思う。

でも、誰もそうしなかった。

久も悠希も栄治も佳織も、みんなテレビに釘付けで、それぞれが

震えていた。

——だって仕方ないじゃない。そうすることでしか美月を救えなかったのよ。

重かった。

暗黙の了解は、私にとってあまりにも重過ぎた。

そこには失われた沢山のものがある。

八十万人の大切な何かがあるから。

その日から、私は友達の在り方に口を挟まなくなった。

慶介の横暴さや佳織の無法さを野放しにすることは出来なかったが、私の中に生まれた負い目は、彼らの弱さを責めるのではなく包括するようになった。

「いいわよ、今日はバイトもないから。何するの？」

「おっ、久々にオッケーもらえた。皆で駅前の複合喫茶でカラオケと洒落込もうって話なの」

だからこうして、彼女たちの友達ルールにも差しさわりのない程度には付き合っている。

本当はつまらないけどそこそこ楽しんでいるように見せて、かと言って中立を崩さないように気をつけて。

こんな蝙蝠みたいなことをしている自分に自己嫌悪を覚えることもたまにある。

——蝙蝠、ね。

その言葉が一人の幼い少女を連想させる。

森野陽子、姉と呼んでいた。

高辻日向の友達でありながら、愛は素晴らしいなどとほざいておきながら、日向くんを見殺しにした私の嫌悪の象徴。

自嘲したくなる。今の私は、彼女がしそうなことをしているんじゃないかって。

連れだって学園を出て、針木駅へと向かう。

クラスメイトに囲まれて、表面上はそここの笑顔を浮かべながら適当に会話を合わせて、楽しそうに演出する。何度も何度も心に言い聞かせるように、高辻日向はそうあるべきなんだって。なのに、そう思うほどに高辻日向は薄れて、森野陽子が私の中で姿を帯び始める。

——だって仕方ないじゃない。そうすることでしか美月を救えなかったのよ。

だから、アンタは日向くんが死ぬことも許容できたってこと？ 私の中でムクムクと姉に対する憎しみは膨らんでいく。それは、自分の命と引き換えに滅んだ八十万人に対する負い目に比例して膨らんでいく。

いつしか私は家族を憎悪していた。八十万人の犠牲を払った父、森野勇次。それを仕方がないと許容した母と姉——。彼らを憎むことで、心の平穏を保つようになっていた。

でも………本当は分かっている。結局は、私さえ居なければ八十万人の犠牲など払われることなどなかった。日向くんだって、死なずにすんだんだろう。

「どしたの高辻さん？ ついたよ？ 早く入ろうよ」

クラスメイトの声に我に返る。いけないいけない。今はそんなことを考えずに、とにかく皆の輪に合わせることを考えよう。

「………」

でもこんな時、本当は七人の輪に混ざってしまいたかった。嫌なことでも全て忘れて、楽しいことだけに溺れてしまいたい。自分の弱さを満たしてあげたかった。

「あれ？」

クラスメイトの一人が素っ頓狂な声を上げる。

「どうしたの？」

「いやいや。高辻さんアレって庄治くんじゃないの？ 今日はおっちに行かなくて良かったの？」

「えっ？」

クラスメイトが指差した方向、ビリヤードブースに確かに慶介や佳織の姿があった。その瞬間に、心は歓喜に塗り替えられていく。

——だが。

「おい、みんな……」

言いかけて止まる。

「まあ、それでもいいんじゃない——」

私の耳に入ってきたのは、忌々しいほどに弾んだ声だった。

そこに、森野陽子の姿があった。

楽しそうに、森野陽子が慶介の腕に抱きついて笑っていた——。

「……帰る」

「え……高辻さん？」

「ゴメン……今日は、気分が乗らない」

「ちょ、どうしたの？」

「ゴメン……」

私は、逃げるようにその場を後にした。

呪詛 ―高辻日向

これは、私の病気が治った日のことだった。

「ねえ、ところで、日向くんは？」

その一言を告げた瞬間、父さんと母さんの顔が青ざめたのを覚えている。

すぐに笑顔を取り繕い、残念だけど親御さんの都合で引っ越した、なんて言ってたけど、子供心に違和感を植えつけるには十分な変化だった。

だが、その変化の理由は分からない。

ただ私は漠然と首を傾げるだけだった。

ただ、それ以上に私は妙な違和感に囚われていた。

手を見してみる。

周りを見回してみる。

鏡を見してみる。

変わらないはずだ。

どれもこれもいつもと同じはずだ。

きよろきよろと周りを見渡す私に、姉さんは心配そうな顔でこう言った。

「ねえ……、美月、だよね……？」

「うん、そうだけど……どうしたの、お姉ちゃん」

「ううん、何でもないんだ」

そう言って姉も笑顔を取り繕う。

何かが気持ち悪かった。

目には見えないけど、日常がどこか捻れているような気がした。違和感だらけだった。

例えば食事時、我が家では必ずと言っていいほど七時のニュース

を見ようとする父とバラエティ番組を見たがる姉が衝突する。

チャネル権を毎日争うので、母が出した提案は、ニュースのトピックを見た後に姉に番組を譲る、という案だった。

両方ともしぶしぶ了承したのを覚えている。

でも、食事時にテレビが映ることはなかった。

「陽子、学校はどうだ？」

「うん、今度音楽会があってピアノの伴奏任されちゃったんだ」

「じゃあちゃんと練習しないとね、最近あなたさぼり気味でしょ？」
なぜか、いつも通りの会話が妙によそよそしく感じられた。

「美月、療養ももうすぐ終わるからみんなと一緒に歌わなくちゃいけないよ？」 美月思いつき歌ったことってないでしょ？ 後で練習しようよ」

姉さんは私に笑いかけてくれる。

父さんも母さんも私に笑いかけてくれる。

私の身体も良くなって、近いうちに学校にも復帰する。

今まではほとんど自宅で寝ていたけれど、これからは普通の子供と同じように学校に通い、友達と遊ぶことが出来る。

なんの不安もない。

なのに、何が一体おかしいんだろう？

夕食後、姉さんは私を部屋へとの連れて行き楽譜を渡してくれた。
そんな風に平穏で、どこかおかしい日常を私は続けていた。

明日からいよいよ学校に通うという夜、目が冴えた私はリビングで水を飲むとしていた。

その夜は普段よりも気候が乾燥していて、喉が渴いたのだ。

「・・・・・・・・」

居間から声が洩れていた。

こんな夜中に父さんと母さんはまだ起きているのだろうか？

「やはり・・・・・・・・あれは許されないのではないだろうか？」

震えるような、父さんの声だった。

「私が……高辻さんを殺したようなものだ。いや、高辻さんだけじゃない。ブラック・マンデーによる事故は全て……」

「仕方がなかったのよ」

「しかし……」

「だって、あの子の命は八十万人の暮らしと天秤にかけてもけして軽くはないもの……」

テレビがついていた。

手術後にテレビがついているのを見るのは初めてだったかもしれない。

テレビは、ずっと同じ景色を繰り返していた。

ピカッと眩く光り、そして砂嵐――。

そして暴徒のように叫び散らす人々の群れ。

「……」

眩しい光の洪水に沈んでいく世界――。

箱舟に乗れなかった人々。

そして、「被害者」と書かれたテロップが垂れ流されていく。

――高辻、日向。その映像が、フラッシュ・バックする。

「うっ――」

酷い頭痛に襲われる。

視界が歪み、立って居られなくなる。

あれ――？

ふと気づく。

どうして私の指は真っ白じゃないんだろう、と。

おかしい――、そういえば、どうして身体がこんなに軽いんだろう。

「……」

廊下の大きな鏡に映る見知らぬ少女――。

私、森野美月。

——森野美月？

だって目が赤くない。

髪だって白くない。

あれは、誰？

ウサギの少女は一体誰？

「——あなたは、誰ですか？」

「……美月」

私の後ろに姉さんが立っていた。

鏡越しで見える彼女は、普段からは程遠い、酷く沈んだ表情だった。

「ねえ、お姉ちゃん——ウサギの少女は誰なの？」

「そんな子、いないよ……」

寂しそうに呟く。

「でも……日向くと楽しそうに笑ってた子、どうして？
どうしてそんな子を私が知ってるの？」

「勘違いだよ、それは美月、あなただったでしょ？」

「そう、日向くん……被害者ってどういうこと？ どうして？ 一体なんの被害者なの？ 日向くんは無事なの？」

「美月……」

気づけば、父さんと母さんも居間から出てきていた。

「ねえ、お父さん、お母さん、何かおかしいよ？ 日向くんは？」

ウサギの少女は？ 私がないの！ いろんなこと思い出すのに、
その中に私がないの！

「美月、今日はもう寝なさい。明日は早いんだろう？ 待ちに待った学校じゃないか」

「話を逸らさないでよ！」

「美月——」

咎めるような姉さんの声。

だけどそれは、私を苛立たせるばかりだった。

「……何を」

初めて私は、家族に敵意を向けた。

「何を私に隠してるの？」

「そ、それは――」

言いよどむ父さんの後ろ、居間へと続く扉。

直感した。

テレビ――。

そこに、彼らの隠したいことがある、と。

「あっ――」

姉さんが叫ぶよりも早く私は居間へと飛び込んで、その文字を目にした。

ブラウン管の画面に大きく映し出されるニュースのテロップ。

『ブラック・マンデー』

「事件より半年が経ちましたが、事件は未だ収集の目処がついておりません。地下鉄爆破テロの犯人、塚本一族毒殺の犯人、そして井端紫音公開死刑の犯人も未だ捜査が続けられ――」

チャンネルを変える。

「事件は半年前、御座市の一大財閥の系列、塚本研究所の原子力発電所研究施設がメルト・ダウンを起こしました。放射性物質が当たりには散らばり、分かっているだけでも被害者五万人、行方不明十五万人の甚大な被害が発生――」

チャンネルを変える。

「地下鉄爆破テロはやはり市長の高辻洋平氏を狙った線が有効とされ――」

「……どうということ？」

問わずにはいらなかった。

「美月……これはね、ちょっとショッキングな事件だからまだ美月には見せたくないかったの」

姉さんが必死に説明しようとする。

だが――。

「私が……高辻さんを殺したようなものだ、って、どういうことなの？」

それが、言い訳である事はすぐに分かった。

「……美月、聞いて、いたのか？」

「あの子の命って、誰の命――？」

責めるように、蔑むように、実の両親を見た。

余りにも似つかない、実の両親。

かわいそうなくらいに二人とも蒼白な顔で、今にも泣きそうなほどに頼りなくて、だけど私は、彼らをそんな目で見続けた。

「美月、父さんと母さんをそんな目で見るのは止めて！ 父さんと母さんは――」

「陽子――止めなさい！」

母さんが制止するのも、姉さんは聞かなかった。

「――だって仕方ないじゃない。そうすることでしか美月を救えなかったのよ！」

もし家族もののドラマならば、私はここで泣くべきだったのかもしれない。

父さんと母さんを許すべきだったのかもしれない。

ああ、私のせいで日向くんが犠牲になってしまった。

ああ、私のせいで両親が手を汚してしまった。

一緒に泣きましょう。

泣いて罪を許しあいましょう。

だって、家族ですもの。

アーメン。

でも私は、聖人のような完璧な娘になんてなれなかった。

ただ、苛立ちだけが残った。

そう、私のせいにして、彼らはブラック・マンデーを許容した――

」。

「日向くんは……どうなったの？」

薄々、気づいていた。

気づいていながら尋ねた。

「ひ、日向は……」

姉さんは俯き、静かに涙を流した。

「日向は……もういない、の……」

「日向くんは、地下鉄のテロに……お父さんと一緒に巻き込まれたんだ……」

涙声で喋れない姉さんの代わりに、父さんが告げる。

頭が酷く熱かった。

ドロドロとしたマグマが脳から噴出して、血管に乗って体中を駆け巡る。

怒鳴ることも、泣くこともない。

人間は、本当に感情が溢れた時、全ての感情表現を忘れてしまうのだから。

「日向くん、しんじやったんだ」

無表情に発せられた言葉。

淡々としたその声には、私の憎悪と憤怒の全てが込められていた。

「ひとごろし——」

家族を、呪った。

「ひなたくんをかえせ、ひとごろし——」

冷たく、呪った——。

幻聴 ―高辻日向

「森野、陽子――」

眩く。

目覚めた世界は未だ暗く閉ざされた夜の中だった。
不快だと思った。

べっとり汗で張りついたパジャマも。

異常の程にペースの早い心臓も。

そして――夢の内容も。

慢性的な疲労が頭の中から瞬時に拡散する。

異常なまでの覚醒。

いつの頃からだろうかと考えてみた。

ある時期を境に、何をしても身体から倦怠感が消えなくなった。

頭に錘を付けられたみたいに思考は重く、泥の日常に埋没していくという漠然とした不安。

それを考えると、この覚醒も悪い物ではない。

毒性の薬物を摂取すると、こんな気分になるのだろうか。

ふと、のぞみの顔が浮かんだ。

「二時、か……」

再び横になるが、眠れる気がしなかった。

寝不足のまま授業を受けるのは、優等生を演じる私にとっては苦行であった。

明日のことを考えて、げんなりとした。

諦めて部屋の電気を付けてみる。

瞬間、目が眩み、細める。

「森野陽子……」

誰もいない部屋に向かってもう一度眩く。

そして長い溜め息を吐いた。

その名前は、長いぬるま湯の夢から目を覚ますのに十分な欠片だった。

それは、世界で一番の味方だった人の名前だったから。

彼女は変わってなかった。

人当たりが良く明るい、――反吐が出るほどの笑顔。

「なんで………変わらないのよ」

なんで今さらアンタが出てくるのよ。

なんで私の場所にズカズカと入り込んでくるのよ………。

「なんなのよ………アンタは」

布団に顔を埋める。

「………なんで、笑ってるのよ――」

ああ、本当に憎らしい――殺したいくらいに。

『それを………君が言うの？』

「………」

聞こえるのは幻聴。

幼い男の子の声。

『いつも君は………陽子のいた場所で笑っていたじゃないか』
私を絶えず責める声。

『へらへら、と。へらへら、と。――殺してやりたいくらいに、さ』
自分が逃避してきた現実には愕然とする。

『――幸せなことに、全てをなかったことにするつもりだったのか
い？』

顔を上げる。

部屋の片隅で、少年は立ち尽くす。

『できるはずがないじゃないか』
そう呟く。

『………誰が僕を殺したか、忘れたの？』

幻は問いかける。

背筋の神経を走る電流は恐怖だ。

答えを知らながら問う。

「・・・・・・それ、は」

『僕は、忘れない』

幻は応える。

『僕は決して、あの日を忘れない――』

「・・・・・・ごめん、なさ、い」

感情の渦がほんの少しの衝撃で溢れそうなのが分かった。

刺激しないように感覚を鈍らせようとした。

だが、意識は嫌というほど覚醒していた。

『誰が、僕を殺したの？』

「や・・・・・・め、て・・・・・・」

ごめんなさい――。

ごめんなさい――。

蹲り、何度も口走る謝罪。

『ねえ――、美月ちゃん？』

その名前を呼ぶ。

目を見開く。

感情の渦が猛威を奮い、一瞬にして心を飲み込んでいった。

「――うぷ」

床に吐瀉した――。

少年はその姿を冷たく見下ろし、そして薄れてなくなった。

私にとっては、森野美月と言う名前そのものが――。

「誰が、私を殺したの――？」

明確に私を責める単語となる。

――誰が、悪い？

答えは知っている。

誰が、高辻日向を殺したのかを。

知っているからこそ、罪意識は生まれた。

同時に、憎しみも――。

「森野・・・・勇次――」

父だった男の名を呼ぶ。

敵と決めた人の名前を、呼んだ――。

・・・・・

・・・・・ああ。

気がつけば夜が明けていた。

自分が起きていたのか、眠っていたのかもよく分からない。

ただ、どうしようもない疲労感で満たされる。

この日の朝日はどうしようもなく気だるかった。

「もう、動かないと・・・・」

そうだ、学校へ行かなければ。

学校――無意識の内に封じ込めていた名前が同時に思い出される。

「森野、陽子――」

彼女も、同じ学校だった。

昨日、彼女は私たちと同じ制服を着ていた。

それがどうしようもなく私を苛立たせる。

「・・・・・バカみたい」

何に苛立っているのだろう。

私は、彼女の何に苛立っているのだろうか？

当然だろう、彼女は・・・・私の敵なのだから。

「いけない」

ぼんやりしていると大分時間が経っていた。

さっと着替えて身だしなみを整える。

寝癖なし。

制服によれはなし。

ならば必要以上に鏡を見る必要はなし。

すぐに洗面所から部屋へと戻り、窓を開ける。

毎日のルーチンワークは終わる。

急いで朝食を摂る。

そして、出発。

だがこの日、私が学校に辿り着くことはなかった。

「・・・・・・加藤さん」

「やあ」

アパートを出たところで声をかけられる。

加藤恭介は車に背中を預けて待っていた。

ファミレスにて ― 庄治慶介

学校のすぐ目の前のファミレス――。

「へへへっ、ゴチです」

「・・・・・・納得いかん」

昨日のビリヤードの時の取引だ。

デザートを奢られてのぞみはご満悦だった。

逆に俺はしかめっ面だ。

この悪女め。

貴様は歴史に残るアバズレだ。

世が世なら「パンがなければケーキを食べればいいんですうー」
とか言うに違いない。

どうせなら「アイスがなければ×××を舐めればいいんですうー」
とか言ってみやがれてっんだ、ファック。

「仕方ないなーアレは。慶介の自業自得の結末」

「貴様は黙れ」

「いや、お前が俺の口にコンドームを Dank したからだろう？」

栄治は昨日のことを根に持っているようだ。

「・・・・・・しかし、本当にこれを全部平らげるのか？」

のぞみの前にはこの店のデザートが全て並んでいた。

「まさか『このページ』って注文するとは・・・・・・」

栄治も苦笑いだった。

「女の子は甘いもの別腹構造」

「・・・・・・二重螺旋構造の神秘だ」

そんな三人の席へ一人の女生徒が近づいてくる。

「ん？」

振り返ってみると、よく知った姿だった。

「んー？」

スプーンを加えながらのぞみも首を伸ばす。

「……壮々たる光景」

陽子が苦笑いしながらテーブルを眺める。

「んー、えーっと」

「陽子だ、んでもの食いながら喋んな」

「よーこちん」

「どもー」

明るく笑う。

「慶介くんといちゃいちゃしにきた？」

のぞみは今日も笑顔で腹黒いことを言いやる。

「そうそう、そんな感じー」

「お前な……」

この女には呆れてものが言えない。

「なんかフラグ立って本格的に個別ルートって感じで詰まんない。からかいがない」

のぞみはのぞみでズケズケとブーイングする。

最近態度がでか過ぎるんじゃないか？

保護者は何してんだ。これは久の責任問題だ。

「フラグが立つのが早すぎる！ 愛はそんなすぐおいしい、すごくおいしいものじゃない！」

栄治、お前が言うとなぜか僻みにしか聞こえんのが不思議だ。

「じゃあ愛って何？」

陽子は首を傾げる。

「ソレは二次元にしか存在しない。三次元の間には不可能な尊い行為だー！」

栄治は両手を広げて、世に二次元を布教しようとする。

そんなお前を見て俺はこう思うんだ。

「……モテねえ」

「……重々承知であります」

栄治は深々とテーブルに額を擦り付けて謝罪した。

「ごめん、なんか邪魔だった？」

「気にしないでいいよー。栄治くんがモテないのはいつものことー」
明らかに天然を装った腹黒い言葉だった。

「のぞみいいいいー」

仰け反ってそのままブリッジに持っていった。

今日の栄治は展開が早い。

「……その調子で他の女とも喋れりゃいいのにな。知らない女だといつもどもりやがる」

大きな溜め息をついて栄治は肩を落とす。

「……どうして、人は二次元しか愛することができなかったんだろうか」

ブリッジをしながら栄治は呟いた。

「そりゃお前だけだ」

「それは栄治くんだけだよ」
ハモった。

「んー、コント最中悪いんだけどさー」

「俺の人生がコントだとー！」

ブリッジから器用に立ち上がる二次元愛好者。

「……お前は少し黙れ」

どうどう、とのぞみに宥められて栄治は着席する。

「んで、何か用か？」

「あつ、んーと今日って高辻さんは一緒じゃない？」

「日向ちゃん？」

「……」

やっぱり、高辻日向が目的か。

「いや、クラスに行ったんだけどいなくてさあ……聞いた
ら欠席だって」

「……欠席？」

のぞみは陽子の言葉を繰り返す。

コイツは、高辻日向の正体を知ってるのだろうか？

「うん……、なんか知らないかなって」

「わたしは聞いてないかな・・・」

「俺も何も・・・」

のぞみと栄治は答える。

こそつと暗黙の了解に踏み込むようで気後れするが、もしかするとコイツは何か重要なことを知っているかもしれない。

「・・・」

「慶介は？」

「・・・」

「慶介ー？」

はっ、と顔を上げる。いかん、どうやら考えすぎてたようだ。

「ああ、なんだ？」

「だから、日向どうしたか知らない？」

「教室じゃないのか？」

「だから・・・欠席だってー」

「そうなのか？」

「聞いてなかったんだ・・・」

のぞみが苦笑する。

「すまん、考え事してた」

「二次元に飛んでたのか？」

「頼むから俺をお前と同種に考えるのだけは止めてくれ」

それだけは本気でゴメンこうむる。

「どんぐりの背比べだよー」

そしてのぞみは俺が本気で嫌がっていることを分かったの発言だ。いつか犯してやるからな。

「・・・そっか、ならいいんだ」

「そうか？」

やけに引き際がいい。

「ん、昨日は一緒に遊べなかったからさあ・・・」

「んー、日向ちゃんいい子だからきつと仲良くなれるよ」

「・・・そうだね」

曖昧に笑う。

「じゃ」

陽子は踵を返そうとした。

「・・・・・・・・なあ」

それを呼び止める。

「ん？」

「日向と・・・・・・・・仲良くしたいのか？」

「ん・・・・・・・・」

一瞬答えあぐねて。

「そうだね・・・・・・・・、トモダちになりたい、かな」

「・・・・・・・・そっか。なら・・・・・・・・」

俺も、お前に聞きたいことがあるんだ。

「場所、変えねえか？」

「えっ――」

そこで驚いた顔すんじゃねえ。デートに誘ったみたいじゃねえか。まあデートでもレイプでもなんでもいいが。・・・・・・・・いや、レイプは良くないな。あれは犯罪だ。

「ミルクシェーキ」

だからのぞみよ、甘いもんに例えるんじゃねえ。

「な・・・・・・・・神よ・・・・・・・・この男は今ナチュラルに何を言ったのだ？　これがモテ期に入った男の勢いというヤツなのか？　眩しすぎて慶介を直視できない！　アガペー！」

そして栄治よ、俺を拝むのを止める。

陽だまりの妄想 ― 庄治慶介

「だりい……」

「じゃああのままの場所でよかったんじゃない？」

「こっちにも色々と事情があんだよ、暗黙の了解だ」

「暗黙の了解？」

「ああ、なんでもねえ。気にすんな」

暦では冬になったというのに寒さは未だに感じない。針木の街を陽子と連れ立って歩いていた。駅前のスクランブル交差点にて、群集に混ざり足を止める。

「人、多いね」

「そうだな、二百万を抱える大都市だからな」

雑然とした印象を受ける街並み。御座市とは違い、古くからの街並みが並ぶ針木市は街の区画も揃っていない。

「ねえ、何か聞きたいことあるんじゃないの？」

「……」

陽子の表情は明るく見えるのに、その声はどこか沈んでいるようにも聞こえる。

「日向に何の用だ？」

考えた結果、単刀直入に聞いてみることにした。

だが、返ってきた言葉は少しだけ予想を反したものだだった。

「……キミたちって仲いいよね」

「あん？」

顔を上げると、陽子は先程までの明るい表情にほんの少しだけ翳りが見えた。

「どした？」

「いや、珍しいなって思ってたね」

「珍しいって、何が？」

「クラスも部活も全然違うし、学校ではそんなに皆集まって何かし

てるとこなんて見ないのに放課後になるとみんなで集まって屯ってるじゃん？ パパラッチ陽子としてはその辺のみんなの関係が気になるってわけ」

「すげえ二つ名だな・・・」

「伊達にいつもデジカメ持ち歩いてるわけじゃないよ。スクープは突然に」

「出刃亀根性丸出しなだけだろ」

「まあ、失礼な」

翳りはすぐに成りを顰める。見間違いだと思うことにしたが――。
「アイツらとは、ただの腐れ縁だよ」

「腐れ縁？」

興味津々、というよりは真剣に聞き漏らさないといった態度に違和感が拭えない。

「そつ、あいつ等とはガキの頃施設にいた時からの付き合い。俺ら、みんな孤児だったから」

「・・・・・・孤児」

陽子が目を伏せる。

「まあ、そういうわけで現在まで腐れ縁は続行中」

「・・・・・・も？」

「あん？」

ぼそぼそと箆もる声が聞き取り辛くて、もう一度と促す。

「ああ・・・・・・、ごめんごめん。あの七人全員が？」

「ああ、そうだけど？」

首を傾げてみせる。蒙昧に装うように。

だが、気にかかることがある。軽薄に振舞う仮面の下で冷静に働く思考が、それを無視することを許さなかった。

「何か、気になることでもあるのか？」

「えっ――、いや、なんでもないよ・・・」

「いきなり動揺しすぎだっつーの」

「やだな、動揺なんてしてないよ」

バレバレだろうが、と心の中で呟く。

「しかもいきなりテンション下がりがすぎだ。なんでもないわけねえだろ」

「・・・・・・」

陽子は口を噤む。喋らない、という意志ではなく、喋ってよいものかどうかと悩むようでもある。

「俺で答えられることなら答えてやる」

「あつ、いや・・・・・・」

頬を染めてバツが悪そうに目を逸らす。そして、陽子は諦めたようにため息をついた。

「ふう・・・・・・、噂通りいい男だね、キミは」

「知れば知るほど抱かれたくなるだろう？」

無言で脳天にチョップされた。佳織とよくつるんでいるようだが、本当は下ネタはお嫌いなものかもしれない。

「あたしにはね、妹がいたの」

陽子は語り始める。

「あたしなんかにはもったいないくらいによく出来た妹。門限とか、言いつけとかをよく破ってたあたしをいつも怒って、それで父さんと母さんから叱られる時は必ずかばってくれたの」

「ダメ姉貴と優等生の妹？」

「はは、そう言われると耳が痛いな」

笑いながら髪をかく仕草が記憶の少女と重なる。

赤い目の、白い髪の子。アイツはいつもおどおどしながらの仕草だけ――。

そっくりだ、と思った。

「でも、あの子ずっと昔に家出しちゃったの」

遠い昔を懐かしむように目を細める。泣きそうな顔で、懐かしさの中にどうあっても拭うことの出来ない後悔が見え隠れする。

「あたしってさ二年で転校して来たの。それってね、この学校に妹がいるっていう興信所的なところからの調査結果を見たからなんだ

よ」

「妹に会いに来たってこと？」

「ははは」

誤魔化すように苦笑した。

「そのはず、だったんだけどね……」

陽子は言いよどむ。

「……どんな顔して会えばいいか分からない、ってか？」

「肝心なところでいつもヘタレでして」

普段は感情のままに行動するくせに、ここ一番で臆病になる。そんなところも、そっくりだ。

「あの子、元気でやってるかなーとか、トモダチいるかなとか、そろそろ彼氏ができてもおかしくないかなとか、そんなことばかり気にして遠巻きに眺めていることしかできないわけで」

過度に身近の人間を気にかける心配性なところとかも――。

「てことは、歳は近いのか？」

「同じだよ」

「双子か？」

「いんや」

陽子は横に首を振る。俺も分かっていながら尋ねる。

「じゃあ、複雑の家庭環境か？」

「そこまでもない」

「それが、高辻日向なのか？」

直球を投げつける。

「……」

陽子は答えなかった。俯いて、口をつぐむだけだ。

「その割には、顔とかそんなに似てないよな。アイツは髪型いつもショートカットだから余計にそう見えるのか？」

そう、疑問だった。あれは、俺の記憶にあるお前の妹とは姿が全然違うじゃないか。

「高辻日向さんは、元気……」

「ああ、元気だな」

じゃあ、と陽子は続ける。

「高辻日向さんは、幸せそうにしてる？」

ぽつりと呟いた言葉が、ふわりと宙に浮かぶ。自然と俺たちの足は、群衆の波に逆らうように止まった。

「……………どうして」

余りにも、お前らしくない質問じゃないか。

「どうして、自分で確かめない？」

陽子は、寂しそうに笑った。それが見えない空気の膜を作り、高辻日向だった俺を阻んでいるようだった。近くとも分らない。届かない。それは決して物質的な距離感では計れない。高辻日向ではない。今は、庄治慶介と森野陽子だ。その距離は、名前の違い以上に遠いものだった。

「私はね……………彼女に憎まれてるの」

だから、その言葉はすぐに理解できなかった。記憶の中でその姉妹は、いつも手を繋いでいた。時には姉が引っ張っていくように。時には妹が寄り添うように――。

想像も出来ない。どうしてお前が、妹に憎まれなければならないか
った？

「高辻、日向……………」

そういうことなのだろうか。

「そうだよ？　日向くん」

はっ、と顔を上げる。責めるような、哀れむような、そんな色々な感情の混ざった声だったから。

「君が生きてたら良かったって、私は何度も思ったんだよ」

「お前……………、なぜそれを？」

それは、南さんとクロさんしか知らないはずのことだった。

「仲介屋――、加藤恭介さん」

今度こそ衝撃だった。

「そう、美月と会うためにね、仲介屋と呼ばれる彼に調査を依頼し

たのよ」

クロさんの副業のほうだろうか。探偵じみたことやエージェントのような仕事をする何でも屋みたいなことをあの人はしている。曰く、ウラのツテや情報なんかが入って来やすいということだったが。「だから、アイツにクロさんが接触していたのか？」

「・・・・・・知ってたんだ。でも心配ないよ？ それはただの私の依頼だから、ヤクザとかが関わってることじゃないよ？」

「そうか・・・・・・」

ひとまず安心した。納得と言うわけではないが、一応理由付けが出来たことにほっとした瞬間だった。

「えっ――」

突然、柔らかな感触を押し付けられる。

「私は・・・・・・、ほんとに君が生きてたらって思ってた・・・・・・」

道行く人々が怪訝な、にやけた顔で俺たちを眺めていた。だが、それも気にならない程の衝撃だった。

陽子は、俺を抱きしめて泣いていたのだ。

「お前・・・・・・」

「顔が変わってても、性格も変わっててもすぐに分かった・・・・・・。君がかおりんとかのぞみんなに向ける優しい目は、あの頃の君が私と美月に向けてくれたものだったから・・・・・・」

「・・・・・・そうか」

「生きててくれて、ありがとう」

「ああ、馬鹿ヤロウ。聞いてて、恥ずかしくなるじゃねえか・・・・・・」

心が、満たされていくのが分かった。忌むべき過去だけではなかった。高辻日向は、忘れたことばかりではなかった。俺も、陽子を抱いた。嬉しくて泣きそうだった。あの事件で失われたものの一つが、こうして戻ってくるなんて思ってもみなかったから。

「すまん、生きてると公表するわけにはいかなかった・・・・・・」

「仕方ないよ……、高辻って名前を出せば、こうして会えることもなかったじゃない」

「今はあの馬鹿が勝手に名乗ってるしな」

「あの子は頑固だから……、きっと私のこと、許さないだろうね」

「ああ、そっくりだからな」

「そんなに似てない、って言ったじゃん」

「だから、顔のことじゃなくてだな。髪を梳くクセとか、ここ一番のヘタレなことか。後はなんだ、……お節介なくらいに面倒見がいいとかか」

似ている、という言葉に陽子は喜ぶように思えたが――。

「いや……ワタシは、あの子と違って自分勝手だよ」
そう言って、寂しそうに笑った。

「ごめん、テンション下がるよね。不景気な顔しちゃってさ」

無理に笑おうとする姿が、痛々しく感じる。

「まあ、なんだ。余計なお節介かもしれないが――」

柄じゃないと分かっていながら、恥ずかしいから顔を背けながらも言った。出血大サービスだ。

「日向は、優等生面しながら実はすげえ俺並に捻くれてて、全然素直じゃねえから、まあ何があったか知らねえし、大変だとは思うけどよ……まあ、大丈夫なんじゃねえか」

陽子の目が一驚に開かれる。

「日向は……いいヤツだから」

「……当たり前前、あたしの……妹なんだから」

陽子は目じりに涙を溜めて笑う。

「まあ、うぜえくらいに五月蠅いけどな」

「仕方ないよ、あたしの妹だから――」

嬉しそうに声を上げて、涙を堪えながら笑う。
妹を思う姉の姿――。

その光景が、懐かしくも切ない、一言で表せない感情が入り混じ

って心を支配する。

その日は陽子と街中で別れ、そのままバイト先へと向かった。
繁華街にある中華料理屋。

その道中もずっと、先程の陽子との会話を思い出していた。

考えまいとしても、ふとした折にどうしても心を支配する数々の感情。

思い出すまいとしてた幼き日に、戻れたと仮定して紡ぐどうしようもない妄想。

このまま、暖かな時間の中に埋もれてしまいたいという願望。

そして、真実を闇に葬ってしまいたいという欲望。

トモダチと偽りの土壌の上で未来を育むという、あの日の決意からの逃避。

何の足枷もなく目の前の現実だけを受け入れさせてくれたらという想いが、庄治慶介をどうしようもなく鈍らせる

それが出来たとしたら、どんなに幸せだろうな――。

全てのことをなかったことにして、みんなでこのまま過ごし続ける。

これから起こる全てのことも気に止めずに。

美術館に飾られた、見るものが退屈するような平穏な日々の中で。
神の庭。

陽だまりの妄想。

「はははっ」

滑稽さと愛おしさで笑う。

胸が温かさで満たされていくのが分かる。

「――楽しそうだな」

その声を聞いて、心から温度が急速に失われていった。

先程までの妄想が簡単に拡散して、現実から逃れられないことを悟った。

「クロさん――」

振り返ると、クロさんが笑っていた。

罪の定義 ―高辻日向

恭介に連れてこられたのは、やはり前と同じ喫茶店だった。

「・・・・・・・・」

「浮かないを顔している」

「えっ・・・・・・・・？」

頬杖を付きながら。

「・・・・・・・・欠席なんて初めてなので」

「『高辻日向』的にはNGか？」

「今日は、単刀直入なんですね」

「今さら取り繕っても意味はない」

その通りだ。彼の目的はすでに明確である。

「で・・・・・・・・、浮かない顔をしているのは？」

「なんでもないです」

取り付く暇もない。

「そうかい」

深くは追求しなかった。

「・・・・・・・・私も、あなたに聞きたいことがありました」

「へえ・・・・・・・・」

「ブラック・マンデー」

「興味深い」

薄らと笑う。

「君をどうやって説得しようと思っていたところだ」

「今日は本当に単刀直入ですね」

「いいじゃないか、利害を一致させたいなら嘘はつくべきじゃない」
だからといって信用できる人間ではない。現に、彼が私に望むことは常軌を逸した依頼だ。

「で、聞きたいことは？」

「誰が、悪かったと思いますか――？」

事件の本質とも言えるかもしれない。

「・・・・・・・・罪の定義か？」

「大それたものではありません」

「だが、それを質問したということは・・・・・・・・」
薄っぺらな笑みは消える。

「迷っている、ということかな？」

「・・・・・・・・ええ」

「そうだな・・・・・・・・」

窓の外に目を向けて、頬杖をつく。

「ブラック・マンデーとはあの時起こった罪深い行為の総称だ」
思いを馳せるような遠い目で告げる。

「事件を画策した者、画策させる隙を見せたもの、隙だらけのシステムを構築した物、縄張り意識から対応の遅れた治安組織、情報に踊らされた市民団体、その全てに罪がある」

だが、と彼は続ける。

「食い物にされた無力さも、自分には関係がない、とブラウン管の向こうの世界を見殺しにしたレンガの家の豚にも、同じく罪がある」
原因となる行為を客観的に挙げていけばきりがない。

「果ては生まれてきたことが罪、と宗教的な思考にまで行き着くかな」

彼は間違ったことは言っていない。だが、求める正解からも遠かった。

「まあ要は――、何が許せなかったか、ということ」

「何が、許せなかったか・・・・・・・・」

「高辻日向――、ブラックマンデー第二の事件、地下鉄爆破テロの犠牲者、だったかな？」

――地下鉄爆弾テロ。

「高辻日向は――、一体何を恨んだのか」

ああ――その単語は、耳にするだけで血が冷たくなるのが解る。
体中の温度を奪い、皮膚の下を這い回っていく。

ぐるぐると。

どくどくと。

ざああああ——、と。

放送を終えた後の深夜のテレビのノイズ。

気持ち悪い——頼むから静かにしてよ。

「もしかしたら、恨む間もなくバラバラになったのかもしれない」

「……」

「だとすれば、幸せだ——」

「幸せなはずないじゃない——」

強く、反論する。

「……」

恭介は沈黙する。だが、驚愕という表情ではない。

「……そうだな、彼は不幸だな。だが、残された我々はそれ以上に不幸だ」

「我々、ですか？」

きつと、その被害者の中に私が含まれることはない。

「……死んで詫びるのは、彼だけなのでしょうか？」

「死にたいのかね？」

恭介はコーヒーを口に運びながら、学校はどうだ、くらの尋ね方をする。この人にとっては、人の生き死になどそれくらいに当たり前のことなのかもしれない。

「……私の罪を、たまに考えることがあります」

「考えればいい、それで死ぬべきだと思ったなら死ねばいい」

「冷たい物言いですね」

「君の罪は私にとってどうでもいいことだ。別に君は私の復讐の対象ではない。ただ、これだけは言っておこう。君が死んでも何も解決することはない。警察と学園の仕事が増えるだけだ」

「……」

「問題は死んだ者ではない、残された我々だ。君は誰が一番許せなかった？ その人間がいなければどうなったと思う？ これは、そ

ういう問題なんだよ」

私は、頷いたのだろうか。よく分からない。覚えていない。気づけば、夕暮れの街を歩いていた。

脳裏に影が浮かぶ。十年前のままの少年の姿がまず浮かぶ。そして次に、ニュースの映像。恐慌に陥った御座市中央区のセントラル街の映像。そして最後に電波ジャックの映像。撃たれて、ビルから落ちていった女性の映像。それが少年の姿と重なった。

身体が寒い。妙に身体が冷えている。おかしいな。両手を目の前で広げてみる。小刻みに震えていた。頑張つて止めようとするけれど、全然うまくいかない。そのまま顔を覆う。窒息させてしまいたくなる。ぎゅっと。思いつきり、思いつきり押し付ける。

「私は――」

わたしは――？

「どうすればいいんだろう……」

自問する。だが、分からない。感情は悲しくて、苦しくて――その解決方法は分かっているのに。なのに、そうなってしまふことを何よりも怯えている。

どちらも選べない。選択肢を前に、心は矛盾する。

加藤恭介――彼が私に何をさせたいのか、そんなことは嫌でも分かる。分かっている。私もまた、知らねば良かったと思う人間だったんだ。知らなければきつと、こんな苦しみを味わうこともなかった。

『それは――罪だ』

そう、罪――恭介の言う、レンガの家に住む豚の罪。

「だから、遅いよ……」

自分の罪を知ってしまえば、止まることはできない。

森野、勇次――。ましてや、自分の父が関わっていると知れば……

「お父さん……」

敵の名前。復讐するは、御座市を裏切った男へ。それが実の娘の

手で執行されることを、あの男は望んでいるのだろう。利害は一致していたはずだ。なのに私は恐れている。

「……何、に？」

再び自問する。やはり、分からない。

「自殺だってさ」

「また？ これで何件目？」

「四件だったけ」

「また自殺？」

「世に言う『連続自殺事件』だろうね。ネットのそうした掲示板を今捜査しているらしいよ」

人が集まっている。耳から入ってくる会話から、連続自殺事件がこの近辺で起こったようだ。見慣れた光景だ。多少の狂気など、どこにでも、誰にでもある時代。人が死ぬことすらもまるでゲームのような時代。みんな携帯電話でぺちゃくちゃと喋る。

「日向――？」

群衆の中の一人が振り返る。

久だった。いつも通りの笑顔だが、こんな現場だとなぜか異様なもののように見えた。

「どうしたの？」

「自殺があったらしいんだ」

そして、私は日常の仮面を被る。

「何件目だっけ？」

「五件目だよ」

「物騒な世の中になったわね」

「余裕があるんだよ」

「余裕？」

「心を病む余裕さ」

珍しい考え方、久らしくない意見だ。

「人は、理由もなく心を病む余裕を手に入れたんだ。いや、理由がないから心を病んだのかな」

「そんな暇つぶしみたいに……」

「案外そんなものかもしれない。専門家達は理由を探したが。理由を見つけて、なければこじつけるのが仕事だからね」

「真実はその逆ってことなのね」

「そうかもしれないってくらいだよ」

そう言って、久は笑う。

「でも野次馬なんて趣味が悪いわね」

「それを言ったら世の中趣味の悪い人だらけだね」

野次馬達を親指で差す。不幸に群がり、他人の不幸を餌にする人々。不幸を喰らい、肥えていく姿は醜悪だ。『煉瓦の家』に住む人々——。彼らを見ていると、薄暗い感情が湧き上がってくる。輪の中に爆弾を投げ入れて、彼らは破裂する——。

そんな——そんな、どうしようもない破壊衝動。

「顔が怖いよ？」

「——っ」

はっとする。

「………何でもない」

嫌になる。

「久は………」

ぽつりと。

「久は、自分がどうしようもなく嫌になる時、ない？」

「自己嫌悪ね」

少し考える素振りを見せた後。

「誰だってあるんじゃないかな？」

曖昧に誤魔化したように思える。

「一般論………」

「凡人ですから」

「………」

たまに、久の考えていることはよく分からない。穏やかな表情が穏やか過ぎて、あまりに嘘くさく思えてしまう。

「真実はどうだか、本当に久はそう思ってるの………?」
皮肉めいた言葉を返したつもりだった。

「………真実ね」

だが、返ってきた言葉は思いのほか低い口調だ。

「真実とは、実際にこの世界に起こった事じゃないんだ」
「?」

首を傾げる。言葉の定義とはまるっきり正反対のことを言う。

「嘘でも本当でもいい。要は、人が信じたいかどうかなんだ………」
「」

「哲学的ね」

「真剣なつもりなんだけどな」

「本気だとしたら、あまり納得できないわ」

「そうだろうね、辞書を引いてもまるっきり正反対のことが書かれて
いるよ」

「………」

「だけど、一人だけが知る真実には、何の意味もないんだ」
黄昏を背に、久に影がかかる。

「世界は、嘘をつき続けているんだから――」

久と慶介 ― 庄治慶介

「久、心の読み方を教えろ」

「いきなりこの人は無理をおっしやる・・・・・・・・」
いつものファミレス。

今日は六人がけのテーブルに、久と向かい合って腰掛けている。

時刻は午前二時。

「突然どうしたの？ 麻雀にでも大負けした？」

「むっ・・・・・・・・確かに心が読めれば麻雀で大儲けが出来る。眼牌など足元にも及ばんな」

メニニューを畳んで考えた後、

「よし、というわけで心の読み方を教えろ」

「・・・・・・・・今、目的が摩り替わったよね」

久は溜め息をついた。とりあえず久はベルを押してウェイトレスを呼ぶ。

「注文決まってるよね？」

「何も言ってるねえのにお前は分かるんだ。心を読んどるとしか思えねえ・・・・・・・・」

久は自分の額を押さえる。

「メニニューを畳んだのに分からない奴はいないでしょ？」

「おら、エスパークン。お前のエスパークを俺にもエスパークしてくれ」
「喧嘩売られてるのかな？」

「いいから教えろ。もしくはバッグの中に身体を収めるエスパーク技を見せろ、もやしっ子」

ぴくりっ、と久の顔が一瞬だけ固まった。

「・・・・・・・・そもそも他人の考えていることなんて分かるわけないじゃない。心がなんであるかなんて検証も行われてないのだから、科学的にも立証されてないんだよ。ただ、頭のいい人の仮説があるだけだよ」

「ああ、難しい話をするな。まあエスパーかどうかはさておき、お前勘が鋭いだろ？ 真面目な話、その力を貸せ」

「ビビッてきたら慶介にも分かるよ」

おちよくり過ぎたようだ。真面目に答えてくれなかった。

「まったくもって分からん。というか真面目な話と言っただろうが」
「受信料払ってるからアンテナが電波を受信するんだ」

「いつから宇宙の怪しげな電波とチャネリングするようになったんだ……」

「頭の中に神が光臨するんだ」

「この野郎――、クリスマスと正月を祝う国民のクセに……」

「ザーメン」

「止めろキサマ――！ 公共の場でしれっと直接的な表現は控えろ！」

「歩く猥褻物の慶介がそれを言うかな？」

ぴくりっ、とこめかみに青筋が立つ。久さんよ、真面目な話つたる。いつまでも舐めたこと言いやがって。

「久さんよ……随分とご機嫌じゃないか」

「慶介こそ、人に物を頼む態度を知ったほうがいいよ」
久との間に見えない火花が飛び散る。

「あのお……」

若いウェイトレスが少し居づらそうに立ちすくむ。

それでも注文を取りに来るのは、見上げたプロ根性である。

「抹茶アイスドリンクバーセット」

「チキングリルのセット」

ガンを垂れあつたまま答える。

「あつ、えーと……かしこまりました……」

ウェイトレスが少し涙目だった。

「この電波野郎が、そのもやしのような体でこの俺に喧嘩を売るつもりか？」

「頭の中まで筋肉で股間に脳みそがあるような珍獣が人間様と対等なつもりかな？」

「ご注文繰り返しますね．．．．．抹茶アイスのドリンクバーセツトとチキングリルのセット。以上でよろしいでしょうか．．．．．」

「デメエの脳みそなんて、あっても怪しげな電波しか受信できない代物だろうが――」

「それは食う寝るセックスしか知らない原始的な生物の嫉妬かい？」

「．．．．．」

「あっ、注文はそれで大丈夫です」

「はい．．．．．ごゆっくりどうぞ．．．．．」

逃げるようにウェイトレスは去っていった。

「で、なんで突然心を読むとか言い出したの？」

空気が緩和したのを機に久が軌道修正。

「ああ．．．．．」

だが言い辛いことだった。それは暗黙の了解だったから。

「王子様の話をしよう」

「．．．．．」

「王子様だと言い張るお姫様の話だ」

「露骨過ぎて分かりやすいよ」

「お前はたまに確信的に空気を読まん．．．．．」

「慶介にロマンチックは似合わない」

「ああ．．．．．その通りだ、クソ」

脱力したようにテーブルにうつ伏せる。久は一度目を閉じて、ゆっくりと微笑を消した。

スイッチが入れ替わるように、目を開ける。

「人魚姫の助けた王子様は、自分が王子様って言い張るお姫様だったってことだね」

「人魚姫って、誰のことだよ」

「想像に任せるよ」

久は含みのある笑みを浮かべる。

「ちっ、まあいい」

「で？」

「王子様は、根本的に事実を曲解して、取り返しのつかない過ちを犯そうとしている」

「原作なら、王子様は違う女性を恩人だと勘違いするんだ」

「ある意味ではそうかもしれない」

「ある意味、ね……でも、その方が王子様にとっては幸せだったのかもしれない」

「……」

「姫はね、喋ることが出来ないんだよ。二本の足と引き換えに、彼女は声を失った。言葉は無効だってよく言うけど、その反面、言葉は何よりも有能だ。だから、伝えることが出来ないっていうのは、本当に残酷な呪いだよ。伝えられなければそれは彼女の中で真実にはなりえない。慶介だけが知る真実は、日向にとって何の意味もないんだよ」

「分かっているんだ……」

顔を覆う。

「呪いの説き方くらい、分かっている」

「なのに、君は動かない？」

「ずっとこのままでいられたら、どんなに幸せだろうな……」

「

それは暗に、このままでは居られない、ということを俺は知っていた。

「変わってしまうのは怖い？」

優しい声で久は問いかける。

「ああ、全てが解決するかもしれないし、もしかすると全部壊れてしまうかもしれん……」

「本当のことを知れば、日向の憎しみは解決するかもしれない」

「・・・・・・・・知ってたのか？」

「暗黙の了解だから、慶介だろうとおいそれとは話さなかった。それだけは理解して欲しい」

「別に、責めてるわけじゃない」

だが、もう少し早く打ち明けてくれても良かったと、恨み言がないわけではない。

「でも、もしかしたら日向にとっての家族ってさ、今でも殺したいくらいに憎い、ってやつなのかもしれないね」

「・・・・・・・・なぜ、そう思った？」

「この間のビリヤードの時・・・・・・・・慶介は気づかなかった？」「何をだ？」

「日向、僕達に声をかけようとして、そのまま帰ったんだ」

「いや・・・・・・・・見てなかったな」

少なからず驚いた。恐らく聴覚のいい久だけが気づいたのだろう。

『私はね・・・・・・・・彼女に憎まれてるの』

陽子の言った言葉が浮かんだ。

「アイツは、陽子を憎んでいるのか？」

「あれは・・・・・・・・そんなに簡単な表情じゃないよ」

そう言っただけは顔をしかめる。両手で眉間を押さえて、言葉を捜そうとする。だが、言葉は見つからず沈黙だけが残った。

「・・・・・・・・」

呟いた言葉は本当に小さな声で、店内の喧騒にかき消される。

俺は無言で立ち上がった。

「・・・・・・・・どうしたの？」

「久は何か飲むか？」

そう言っただけドリンクバーコーナーを指す。

「ああ・・・・・・・・そうだね、何か取りにいいこうか」

「いい、俺が取ってくる。お前は考えをまとめておいてくれ」

「・・・・・・・・ああ、ごめん」

「いい、俺はバカだから考えるのは苦手だ。難しいことはお前が考

えろ」

茶化すように笑う。少しだけ、思い空気が薄れた気がした。

「力になれなくてごめん」

久はもう一度謝った。

「気にするな」

立ち上がり、テーブルを離れる。

「あれは．．．．．簡単な表情じゃない、か．．．．．」

コーヒーを注ぎながら、先程の久の言葉を反芻してみる。

「当たり前だろ．．．．．そんな簡単に憎むことが出来るかよ」
願望だった。だがそれは誰の耳にも届かなかった。

『日向は．．．．．いいヤツだから』

そう言ったのは俺だ。俺はそう信じている。

瘴氣 ― 庄治慶介

「ようやくコマが動き始めた」

陽子と本当の意味で再会した夜、クロさんは俺にそう言った。

「コマ―?」

「春賀晃と森野勇次、奴らに対する復讐だよ」

「……そうか」

歓喜はなかった。ただ、来るべき時が来たという絶望だけだった。
――だったら、なんでイエスって頷いてるんだよ、俺は。

何度も思った。現状維持、ぬるま湯の世界、それを死ぬまで続けたいと思った。

クロさんと進む先に未来などない。あるのは他人を巻き込んだ自己満足の破滅だけだ。

「森野勇次は、俺に任せてくれるのか?」

なのに、どうして俺はそれを選んでしまうんだろうな。

『民自党の森野です――、針木市だけに目を向ける時代は終わったのです。周辺の自治体を巻き込んだ、果ては州全体での組織改革、都市発展こそが今は求められているのです』

喫茶店に備え付けられたテレビからは、近々に行われる市長選挙の演説が流れていた。

周辺自治体を巻き込んだ――よく理解しているじゃねえか、森野勇次。そうだ、お前はそうやって針木という街の発展のために、御座という街を犠牲にしたんだよね? 御座市の被災者を受け入れるという名目の元、針木市の経済は一気に回復した。人口は急激に増え、産業も突然活発になった。お前は、あっという間に英雄になったわけだ。

「アイツは、お前の獲物だよ」

そう言って、クロさんもブラウン管を見上げる。

ああ、そうだ。アイツは、森野勇次は、何度もぶち殺してやりた

いと思った。

森野、勇次——お前だけは絶対に許さない。

『——生きててくれて、ありがとう』

瞬間、憎悪に水を差されるように陽子の顔が浮かんだ。

それは多分、今度は俺がアイツを裏切るということだろう。

殺してやりたい、殺してはいけない——。

「慶介——、本当の最終確認だ」

顔を上げると、クロさんがいつになく厳しい視線で俺を見つめていた。

「本当にお前は、アイツが殺せるのか？」

「ああ……」

即答してみせる。

「そうは見えんから聞いている」

「……」

さすが、年の功だ。見透かしてやがる。

「大切なものがある。そんな奴の顔だ、今のお前は」

「でも、大切なものが奪われた」

「過去と現在を天秤にかけるか」

的確な表現だと思った。もしそれが知り合いならば、俺は止めるだろう。馬鹿げている、現状を見ろ、と。だが、自分がその立場ならば逆だった。止めないでくれよ、クロさん。俺が忘れて諦めてしまったら、アレは全部泣き寝入りになっちまうじゃないか。家族を殺されてのうのと生きれるほど、俺は面の皮が厚くねえんだよ……

「まあ、春賀晃の方は俺に任せろ、全ては順調だ。いいコマを手に入れた」

「いいコマ？」

「桜井要、という餓鬼だ」

「誰だ、ソイツ？」

聞き覚えのない奴の名前だった。

「救いようなない子供だ。春賀のぞみと共に麻薬の売買に手をつけていた」

「そんな奴、何に使うつもりだ？」

「沙耶春樹が使い方を教えてくれた。まあ、コイツを上手く使えば、春賀晃をセンサーショナルに春賀建設ごとぶち殺してやる事が出来る」

「……それは、春賀のぞみをどうこうするってことか？」

「――聞かないほうがいい」

有無を言わさぬ口調だった。

「いや、聞くなと命令したほうがいいな」

「クロさん……どうするつもりなんだ？」

「お前、俺は今お前に、聞くな、と言ったはずだが？」

ドスの聞いた声で。

「アイツらに、手を出すつもりなのか？」

「呆けたか……」

それは、俺に対する失望だった。

「誰も巻き込みたくないなどと、そんな甘い考えを本気で持っていたとはな」

「春賀晃を殺すだけじゃダメなのか？」

「ならんな、やるからには徹底的にブチ殺す。死んだ後もその名前を陵辱し尽くすほどに滅茶苦茶にしてやる。それでも足りない。何度殺しても、殺し続けても渴きが満たされることはない」

それは瘴気だった。恐ろしいまでの執念。拳を握り締める黒瀬智也という亡霊から、禍々しいまでの濁った瘴気が垂れ流されていた。憎悪、憤怒、狂気――言葉にしてしまえばどれもちっぽけになってしまうような得体の知れないものが彼を包む。

「だからもう一度聞く。慶介よ、仲間のことは聞かなかったことにして諦めろ。蒙昧に振る舞い、仕方なかったと考えればいい。それが出来ないような中途半端な覚悟ならば降りろ。辛いぞ？」

「クロさん……、俺には仲間を売る覚悟なんて出来ない」

引くわけにはいかなかった。

「そうか、だったら去れ。二度と針木には近寄るな」

「だが――、仲間のためだったら、家族のためだったら、春賀晃だろうが森野勇次だろうが誰だって殺してやる。アンタの望むように滅茶苦茶にして殺してやる」

「言ってることが矛盾してるぞ」

「汚いことは全部俺がやる。だからクロさん――仲間には手を出すな」

「ならぬ、と言ったら？」

「もしもクロさんが俺たちを攻撃したならば、俺は報復する」

「・・・・・・」

「どんな手段を使っても、必ず排除する」
物騒な物言いだ。

「――必ずだ」

「・・・・・・」

沈黙。クロさんの視線に負けぬように睨み返す。矛盾でもなんでもいい。子供の言い分だと一笑されてもいい。だが、アイツらを再び不幸にすることなど許せるはずがなかった。少なくとも、日向はアイツは救える可能性がある。陽子さえいれば――アイツは再び取り戻せるから。

「一度だけチャンスをやろう」

クロさんは沈黙を破る。

「一週間後、針木市のセントラル街で森野勇次が街頭演説を行う。」

この平和ボケした街では警備も手薄だ。狙うならば外がいい」

淡々とした口調が、これがただ一度のチャンスであることを悟らせた。

「そこで森野勇次を殺せ。そうしたらお前を信用してやる。春賀のぞみにはなく、お前を使って復讐することにしよう――」

ありがとう、クロさん。それは最高の譲歩だ。そう、俺の仲間に手を出すヤツは必ず排除する。それは昔だろうが同じだ。

俺の家族に手を出した森野勇次には必ず報復する――。

そして、すまん久、栄治。

俺はもうぬるま湯には戻れない。気に入ってたんだが、もう執着してられない状況になっちゃったようだ。のぞみにも手が出る危険が出てきた。

陽子――俺は祈ってるよ。

きっとお前なら、高辻日向の呪縛からアイツを開放してやれる。

そして、日向――美月。

お前が気に病むことじゃない。俺の復讐はこれで終わる。だからお前は、これからは森野美月として生きればいい。

陽子が、お前を救ってくれる。

ああ、それと、最後まで迷惑をかける俺を許して欲しい。もしくは、罰して欲しい。

変化 ―高辻日向

変化は突然やってくる。突然加藤恭介という人間が現れて、突然森野美月が現れる。だから、桜井要という変化も突然だ。

朝、部活の朝連に行くつもりだった。部活について取り立てて説明することはない。ただの運動不足の解消に陸上部に所属しているだけだった。まあ、部活に入ったのならそのルールに従い、朝練をこなそうとしただけだった。

学園は落書きだらけだった。その内容は酷く幼稚な罵詈雑言。援助交際を責める文句と女性器のマーク。救いようのない悪戯だ。朝から私は落書きを消す羽目になった。

「あーあ、どこの誰だか知らないけどムカつくよね。朝からいい迷惑だっつーの」

洗剤を地面に垂らしながら、同じ部活の仲間が話しかけてくる。

「心を病む余裕があるのよ」

久の言った言葉をそのまま口にしてみた。

「何それ、哲学？ さすが高辻さん、頭いいねえ」

へらへらと笑う彼女が羨ましいな、と思った。下らない妬みだ。彼女だって何か人に言えない事情で悩んでるかもしれないじゃないか。あー、ダメだな。自分だけが不幸ですってスパイラルだ。

その後、久とのぞみが登校してきて、のぞみの様子が明らかにおかしかった。後を追って話しかけても、のぞみはずっと上の空だった。――暗黙の了解、その言葉が頭をよぎった。

昼休みも、皆のぞみのことを話していた。内容は今朝の落書き事件について。端的に説明すれば、この事件はのぞみの暗黙の了解に深く関わる。のぞみは三年前、教会に引き取られてからずっと通院している。彼女は麻薬中毒者だった。その経過を確認するために通院を続けていた。だが彼女は少年院に入ったわけではない。どういうわけか、恐らくは久の仕業だろうが、非正規で入院し、その罪は

問われなかった。

南さんがそれを許したことを考えると、何か理由があったのかもしれない。だが、それを尋ねることは出来ない。暗黙の了解に反することになるからだ。

——そう言えば私は、そんな友情を否定していたんだっけ。

『アナタの正しいお友達論を私たちに強要しないで。それは侵略よ』
今ならば、悠希の言ったことが分かる。

友達ならば助けてあげたい。困っているならば、巻き込んで欲しいと思う。

でも、それが逆の場合ならば？

友達に、巻き込まれて欲しいって思う？

答えはノー。

ましてやそれが重過ぎるならば——、助けになんて来ないで欲しい。

潰されるのは、私ひとりでいい。

背負い損ねたら友達を巻き込むなんて、そんなこと、沢山だ。

のぞみだって、そう考えてるのだろうか？ 今回の事件、のぞみ

の代わりに全ての罪を着せられて少年院へと入れられた桜井要という少年が、のぞみへの復讐のために事件を起こしたそうだ。

ねえ、のぞみ。アナタの暗黙の了解は、どれくらい重い？

アナタはその重いものを私たちにも支えて欲しいと思ってる？

それとも——一緒に潰されるくらいなら、側になんて来て欲しい？

「本当に私たちは、のぞみの暗黙の了解を破って踏み込むべきなのかしら？」

気づけば私は、そんなことを口にしていた。

「何言ってるんだよ？」

佳織の責めるような言葉に、失言だと気づいた。

「……暴力団も絡んでくる可能性があるってことでしょ？
もう事態は私たちの手に余るってことじゃないの？ 助けてあ

げたいけど、私たちのカバーできる範囲を超えてるわ」

正論で誤魔化した。だけど、これはむしろ頃合じゃないだろうか。「ひなたんよー、ヒッサーの話聞いてたか？ 狙われてんのはのぞみんとヒッサーだけじゃねえの。このままじゃ私らにまで被害が来るのよ」

ねえ、と佳織は久に同意を求める。

「そうだね、桜井の目的は僕たち七人の絆を滅茶苦茶にしてしまうことだろうからね」

「つまり、戦わなきゃ私らこれで終わりなの。アンダースタン？」

佳織の真っ直ぐさは好きだった。

口が悪くとも、彼女はいつだって仲間のことを一番に考えてくれている。

いつか久は言っていた。

佳織の蒙昧な振る舞いは擬態。

本来の彼女は理知的で、仲間と認めた人間ならば全身全霊を込めて大切に扱ってくれる。

今だって、何が何でものぞみを助けようとしてあげている。

——だからこそ、私もアナタを巻き添えにしたくない。

友達は、終わりにする頃合なのかもしれない。

「……潮時なのかもね」

空気が凍るのが分かった。

恐らくは、ここにいる誰もが思ったことがあるはずだ。

もし自分の暗黙の了解が爆発して皆を巻き込むようなことがあるならば、その前に自らの手で幕を引きたい、と。

「なんつった、今？」

「暗黙の了解……、他人の分まで背負うには重すぎるのよ」引き時が、私にとっては今だったってだけの話——。

「お前——」

「佳織——」

今にも掴みかからんとする佳織を慶介が手で制する。

「お前らしくないな」

「・・・・・・・・」

慶介の責めるような視線は、これまでのおふぎけとは別種のものだった。

――抜けることなど許さない、と。暗に仄めかすかのように。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

表情に出ないように気をつける。心境の変化はある。意志の確認とも言える。

「・・・・・・・・」

確かに森野美月の登場は、私を苛立たせた。それは、私の中の意志を確認する出来事でもあった。

「日向が苛立つ理由も最もだ」

慶介が、まるで私の本心を知っているかのように――。

さすがに焦ったが――。

「・・・・・・・・生理か？」

「・・・・・・・・」

どうやら、思い過ぎだった。

「・・・・・・・・は？」

「・・・・・・・・バカ」

慶介の馬鹿な一言で、緊張した空気は薄れる。

失敗させられたのだと思う。

わざわざ嫌われるようなことを言って空気を悪くして、私は薄れてしまうつもりだったのに、慶介の言葉が膨らんだ緊張感を全て台無しにしまった。

「・・・・・・・・ごめん、佳織。変なこと言ったわ」
引くことにした。

「全く、頼むぜ委員長。生理重いからって言っていていいことと悪いことがあるっちゅーの」

でも、立つ鳥は跡を濁さず――。

「・・・・・・・・いつもなら叩くところだけど、今日は立場が弱いわ」
私は空気に同化するように、少しずつ薄れていなくなっちゃー。

「ひなたんは今日一日私の肉便器ね」

だから佳織、お願いだから、私を記憶から薄れさせて欲しい――。
「凌辱系が許せない、という人は意外と多い。凌辱系は凌辱系の良
さがあるんだ。いかに相手を屈服させるか、という心が折れていく
過程こそが興奮を掻き立てるんだ。セックスにおけるプレイだけが
話の中心じゃない。真の陵辱というのは――」

「おい、久――」

「スイッチって――」

「乳首を押したら――」

「・・・・・・・・あんたたち――」

・・・・・・・・。

「・・・・・・・・」

・・・・・・・・。

「暗黙の了解――、誰か一人が・・・・・・・・背負い損ねたらどうな
るのよ」

皆に聞こえないように呟いた。

私は背負い損ねる。

それで高辻日向は終わりだ。その隣には、誰もいてはならない。

退廃 ― 庄治慶介

「へっ――？」

陽子が間拔けな声を上げる。仕方ない、もう一度言ってやろう。

「お前、美月と会え」

「いや、いきなりすぎるって、美容院とか予約しないと」

「お前は妹に会うのにいちいち美容院に行く気か？」

「いやいや、心の準備しないと、まだ無我の境地に達してないし」

「お前は妹に会うのにいちいち悟りを開く気か？」

「仕方ないじゃん！ ヘタレなんだから！」

「開き直るな！ このサノバビッチ！」

話し合いは平行線だ。というかそもそも話し合いになっていない気がする。

「貴様が妹と仲直りすれば万事うまくいくんだ！」

「いやいやいや、妹と我が森野家の確執は知ってるでしょ？ 悟り開くくらいじゃ足りないんだよ！」

陽子はへっぴり腰だった。しかし急がなければならない。久は桜井要の件で頼りには出来ない。ならば、日向の問題は早急に解決して憂いを絶たなければならぬと思った。

「もっと時間かけようよ」

「このヘタレストめ！ そうやって明日こそは明日こそは、と言いつける奴に明日など来ない！」

とりあえずもっともらしい事を力説してみた。なんか久みたいなお話を言ってるな、俺。

「根性論、無策玉碎、カミカゼ反対！ 具体的施策の提示を願う！
ダメだ。話が全くもって進まん。

「はあはあ……ああ言えばこういうヤツめ。後一時間後にはアイツが来るんだぞ、そんなことでどうする」

「……………帰ります」

「待て、待て、待て——もはや本土決戦は避けられん、腹を決めろ腹を」

「本土決戦にしたのはアンタでしょーが！」

「いかにも。それを決めたのは庄治総理だ」

「……………無能な為政者め」

「貴様……………レイプされたいか」

「あーもしもし警察ですか？ たった今日の前で犯罪予告をする自称総理大臣が——」

「待て、待て、待て——」

携帯電話を取り上げた。

「話が進まん、それほどこまでに妹と会うのが嫌か？」

「……………説明」

「説明？」

「どうして突然そんなことを言い出したの？ 何かを焦ってるみたいに」

真剣な顔で詰め寄られる。

困ったな、そう言えばコイツは野生の勘じみたものが昔からあったな。

「——ビリヤードだ」

最もらしい理由をでっち上げる。

「あの時アイツ、俺らと遊んでるお前を見たらしい。それはそれは阿修羅のような形相だったようだ」

「えっ——？」

陽子は目を見開く。

「家族を憎んでる、そうお前言ったよな？」

「……………うん」

「その原因は、高辻日向だ。だから今のアイツはアシユラ高辻だ」

「……………リングネーム？」

「だったら、もう隠すのは潮時だろう。詰まらない誤解はもう終わりにしよう。本物が生きているとすれば、あいつがアシユラにいる

必要はなくなる」

「それって――」

「具体的施策ってヤツだ」

そう、陽子と美月の確執を無くす為の切り札のカードだ。

庄治慶介の暗黙の了解――。

「いいの？」

「ああ」

「今まで黙ってたのだって、ワケがあるんでしょ？」

「…………お前と同じ理由だよ」

そう、日向に正体を隠していたのは、高辻の息子が生きていることを悟られるワケにはいかなかったからだ。高辻日向を名乗る得体の知れない少女、警戒して当然だった。

だが、彼女の正体が分かってからも俺はそれを明かさなかった。

それはなぜか？

「俺もヘタレストだったってワケだ」

「最上級？」

「ああ、最上級にダセエぞ、畜生」

そう、最高にダサイことだ。どうして美月が『高辻日向』と名乗るようになったのか、そこにどんな理由があるのかは分からない。だが、美月が持つ俺への負い目があることは明らかだった。

「同情されるのが嫌だった。もし名前を明かしてしまうと……………俺たちは対等じゃなくなるような気がした」

「…………あの子だったら、謝りそうだね。父親のことでゴメンって」

「そうだな。そして、そう言われるとアイツのこと許せなくなりそうな気がした。ははっ、可笑しいよな？　黙ってりゃ何でもないのに謝られると許せないなんてさ」

それは、俺自身に対する恐怖だった。

「恐いんだよ、誰かのせいにできるって気づいた時点で、もしかしたら俺は不幸なフリをして全部ソイツのせいにしまっくんじゃない

かつて――」

「あんなに……仲間を大切に思ってるのに？」

――あめあめ、ふれふれ、と歌う声が聞こえる。誰の声だった。黒い雨なのに、誰かが、降れと願っていた。

――白いシート。

――燃える家。

悲鳴のような歓声が起こったのはいつのことだった？

――エディフィスタワー。御座市センター街のシンボル。針木市に移された悲劇の象徴。

そう、ここからでも見る事ができるじゃないか。

見上げてみる。

雑然と立ち並ぶビルに混ざり、それは一際目立って俺たちを見下ろしている。

世界に雨を、黒い雨を――。そう願ったのは、誰だ？

「例えばさ、誰か悪い人がいたとして――」

右手が柔らかな温もりに包まれた。

「この手でさ、殺してやろうって思うくらい憎かったとして――」

心臓を、驚づかみにされたような気がした。

「本当に悪い人を殺しちゃうと、その人はどうなっちゃうのかな？」

「……どう、とは？」

「今度は、その人が悪い人だね」

陽子は、両手で包んだ俺の手の平を視線の高さに掲げてみせる。

「今度は、自分を殺しちゃう？」

「……一体、何を言ってるやがる？」

「人に過去は選べない。失ったものを取り戻すことは出来ない。壊れた物を元通りにすることはできない」

その通りだ。俺たちは、けして神様にはなれないのだから。

「よくさ……過去か未来か、みたいな究極の選択であるよね？ それって、結局選択の答えは決まってるの」

「……」

「手に出来る可能性があるのは、未来だけ。過去は戻らない……
・手に入れることなんて出来ないの」

「だが、忘れることもできない」

「そうだね」

でも、と陽子は続ける。

「これも忘れないで欲しい。自分のたち位置は過去ではなく現在。
だから、今の自分のために変わって行って欲しいと思う」

「……なんで、そんな話を？」

「思いつめた顔をしてたもので」

まるで、見透かされているような物言いだった。

「……そんな簡単な問題でもない」

「大丈夫」

「……断言しやがる」

「出来ますとも。ねえねえ、ちょい中腰になって？」

「？」

「いいから」

言われたままにしてみる。ちょっと上体を屈めて、顔の高さが同じくらいになった。

瞬間にふわりと、甘い香りに包まれる。

そして、柔らかな感触が頬に当たった。

「……」

キスされた。

ワケが分からない。

「優しいままでいてくれて、ありがとう」

陽子は、笑顔だった。

「ワケが分からん」

言葉にしてみた。

「優しい子に育ってくれたから、ご褒美だよ」

「母親みたいなことを言いやがる」

「じゃあ、亡くなった小母さんの分も込めて、ありがとうだ」

優しい大人になりなさい、か。母親の教えを思い出した。

なんだよ俺は。嘘だと言いながら、結局はそんな風になろうとしていたのかもな。

「エコ人間庄治慶介だ」

「地球規模で優しいのか、さすが俺だ」

気がつけば、馬鹿なことを言い合っていた。

陽子の言う『現在』は居心地が良かった。このぬるま湯は本当に居心地が良かった。

だから俺は、油断していたのだと思う。

「・・・・・・・・・・どうということ？」

低い声で響いた。

「友達の輪、広げ隊・・・・・・・・のつもりだったんだけど」

最悪のタイミングで、佳織が日向を連れてきた。その後ろには、悠希と栄治もいた。

「な、なんつー修羅場チャンスを作ってくれんだよ・・・・・・・・」

佳織はとてつもなく氣まずそうだった。

「どういうつもりなの？」

淡々とした声で日向は繰り返す。

「だからさー、接吻は予想外のアクシデントだったけど、学生生活をもっと楽しもうってコンセプトで仲間を増やすというー」

「余計なお世話――！」

佳織の言葉を遮り、日向は叫ぶ。

「みつき・・・・・・・・」

そう呟いた陽子をキッと睨む。

「・・・・・・・・アンタたち、コイツに何吹き込まれたの？」

「コイツってお前――」

佳織の反論を遮るように、前に出る。

「陽子は別に何も言っていない」

クソッ、なんか知らんが最悪の状況だ。とにかく何とかしねえと。日向は完全に頭に血が上ってやがる。

「だったら、何の意図？ 私とコイツを仲良くさせたい理由は？」

「あら、友達になるのに理由が要るの？」

一人だけ平然と悠希は言う。

「白々しいわよ、悠希」

日向は悠希を睨む。

「あら・・・・・・」

悠希は困ったように溜め息をつく。

「どうしてだ」

「慶介？」

真剣な声で告げた。佳織も驚いたように俺を見る。

「どうして陽子避ける？」

「・・・・・・」

無言でにらみ合う。

「それこそ理由があるのか？」

皮肉のつもりだった。

「はっ——」

日向は鼻で笑う。

「確かにね！ 人を憎むのにも理由が要るってことだよね！」

だが、その答え方は普段の日向から想像も出来ない冷酷さで。

「日向さあ、私たちも悪かったから落ち着けて——」

そうして佳織は日向の肩に触れようとして——。

バチン、と——手を叩く大きな音が響いた。

「障らないで——！」

日向は叫んだ。

空気が、白々しく拡散する。

周りの冷たい視線に気づかないほど、日向は興奮していた。

佳織は叩かれた手を下ろすことも忘れていた。

「・・・・・・ひなた？」

呆然と、理解できないと、驚きと困惑の入り乱れた表情を浮かべている。

世界の歯車が噛みあわなくなる。日常を取り繕えなくなる。

「・・・・・・・・何よ、友達面する気？」

そして日向は、禁忌に触れる。

「えっ——？」

言葉を発したのは佳織だった。

「上辺だけじゃない」

日向は続ける。

「全部、変よ！ 本心なんて何ひとつ喋らないで、都合の悪いこと全部腹の中に押し込めてへらへら笑って誤魔化すのが友達？ 気持ち悪いのよ！」

——あめあめ、ふれふれ。

「そのくせ興味半分で人のことには土足で入り込む。こんな不愉快なことはないわ——！」

——あめあめ、ふれふれ。

「あんただって何でもなくて顔しているくせに、塚本の生き残りなんでしょ？ そんなアンタが春賀や森野に近づいてくるなんて、裏があるんじゃないかと思えない——！」

「日向——！」

叫ぶがもう遅い。言葉は放たれてしまった。悪意は形となり伝わった。

佳織から笑みは消えた。

「黒い噂の耐えない沙耶の養子になったアナタだって、本当に私たちの友達のつもりだったのか、怪しいものよね、ねえ、悠希？」

「・・・・・・・・」

それは徹底した日向の空爆だった。七人の世界を焦土に帰すかのような、酷い攻撃で。

「ここにいないのぞみだって、いつ裏切るか分かったもんじゃない・・・・・・・・。アンダーグラウンドでは有名なもの。子供に麻薬を強要する子供のギャンググループってさ」

「・・・・・・・・」

燃えていく。七人で必死に積み重ねてきた何かが、簡単に崩れていく。

「そんなあんた達に友達面されて、いい気になれるわけないじゃない——！」

なんだ、これは？

「気持ち悪いのは……もう、うんざり」

日向は吐き捨てる。心を、吐射する。

「……」

佳織の目は無機質に変わる。

「怖い目」

日向は呟く。

「あなたはそんな目を友達に向けるの？」

そして皮肉を込める。

「——日向！」

「……栄治」

栄治に向けられた日向の視線もまた、友達のものではない。

「あなたも同じクチでしょ？」

「えっ？」

「後ろめたいことは全部包んで、笑顔でトモダチしてる。そんな人が、友達面しないでよ」

「……あっ」

栄治は俯く。

「日向……」

「ねえ、慶介。これで満足？ 人を憎む理由は」

「……お前は」

重苦しい声で。

「お前は、これで満足なのか？」

問いを問いで返す。

「ええ」

日向は怪しく笑う。

「もういいでしょ？ 代わりなんていくらでもいる。結局のところあなたたちは、痛い腹を探られないトモダチなら誰だっていいのよ」
「代わり、だど？」

佳織は咎めるような口調で。

「そうでしょ？ 同じ脛に傷を持つ人が傷を舐めあうように・・・
・・・、気持ち悪いっただらありやしない」
「・・・裏切るのか？」

佳織はぼつりと呟く。

「裏切るっていうのは、仲間に対して成立する行為でしょ？」

「お前も・・・裏切るのか」

「だから仲間面しないでよ、『塚本一族』のクセに。死に損ないのクセにさ」

会話が成立しない。

佳織の重心がふわりと低くなる。

「止めなさい――」

場の空気を拡散するように、凜とした声が響く。

「――悠希？」

「それを抜いてどうするつもり？」

「・・・」

佳織はいつの間にかポケットに手を入れている。

「日向も、つまらない友達理論を押し付けないで」

「つまらない？」

咎めるような視線を悠希は受け流す。

「ええ・・・子供の八つ当たりみたい」

「――！」

頭に血が上る。

素早く伸びた手が、悠希の胸倉を掴み上げる。

悠希の瞳に驚きの色はない。

「何か違うかしら？」

「・・・黙れ」

「名前すら偽っているあなたが、何を言い出すかと思えば……」

「……っ」

凶星を突かれる。

「なまえ？」

栄治が首を傾げる。

「そう、戸籍の売買はアンダーグラウンドではよく行われていることよ」

「黙れ……」

「高辻日向に成り損ねた粗悪品」

「黙れ——！」

「そうよね？ 優等生の『委員長』さん」

「止めろ、悠希——！」

「あなたもそう思うでしょ？ 慶介——」

悠希は、日向を敵として扱った——。

「お前……」

「もう止めてよ——！」

陽子が叫んだ。

「……おかしいよ、こんなの、おかしいよ」

涙声だ。場が白ける。日向は荒々しく悠希を解放する。

悠希はすまし顔で、何事もなかったかのように襟元を正す。

「帰るわ……」

日向は踵を返す。

「日向？」

呼び止めるが。

「さよなら」

鞆を手にして去る。

「おい、待て——！」

「今は止めておいた方がいい」

久の言葉が響いた。

「久——？」

「遅くなってごめん。でも、何か大変なことになってしまったね」
「……………」

佳織も無言で席を立つ。

「佳織？」

栄治が心配そうに声をかける。

「……………最後の最後で、ドジった、クソー——」

「えっ……………」

何か、違和感のある言葉だった。

「何だ、最後の最後って？」

「あとちょっとで、上手くいくと思ったんだけどな。なんとかして
アイツの問題解決してやりたかった。踏み込むのはルール違反だっ
たけどさあ」

そう言って、佳織は鞆を肩にかける。

「あなたも帰るの？」

悠希が問いかける。

「うん」

短いやり取りの後、佳織も立ち去ろうとして。

「また、いつか——」

そんな言葉を言った。

墓地にて ― 庄治慶介

刻一刻と時間は迫っている。森野勇次の街頭演説の日はすぐそこまで迫っていた。

俺の身辺整理はというと、全く進んでいなかった。

その日は、それぞれの胸中を表すかのような憂鬱な曇り空だった。日向と佳織――、二人が欠けた輪は自然と崩れていく。誰か一人でも欠ければそれで終わり。そんな脆いもので出来ていたのかもしれない。

いつものファミレスには、のぞみと悠希だけだった。

「・・・・・・・・みんな、来ないね」

「そうね」

会話はほとんどなかった。

一方、巷を騒がせている連続自殺事件の現場。

塚本佳織は焦げたコンクリートの壁をぼんやりと見つめていた。

「・・・・・・・・」

佳織は、取り憑かれたように自殺現場に姿を現していると噂で聞いたことがある。

アイツにもまた、アイツの物語がある。だが、それはまた別の話だ。

ひとり街を歩く。思い立つと、ポケットから携帯電話を取り出して電話をかける。アナウンスは同じだ。――この電話番号は、お客様の都合によりお繋ぎできません、と。今日一日でこの動作を何回繰り返したのだろうか。

「・・・・・・・・日向」

力なく呟き、そして――。

「クソっ――」

悪態を付くのも何回目だろうか。

どうしてこうも上手くいかないのだろうか、溜息をつきたくなる。

のぞみのことも気になる。あれから桜井要の接触はないが、校内では嫌な噂が蔓延していると陽子から電話があった。

「……………学園か、懐かしい響きだ」

学園にはもう行っていない。後三日の寿命だ。余計なことをする必要はない。行かなくなったのはたかだかここ三日くらいなのにな。もう行くことはない、と分かっているからだろうか。俺も随分とぬるま湯が気に入っていたようだ。

——殺したいほど憎んでいる。

もし日向が、俺と同じ結論に達しているのだとすればどうだろうか？

俺だって一度は思ったはずだ。もしそれをするならば誰も巻き込みたくはない、と。

結局は考えるのに疲れて、なるようになるだろ、っと希望的観測で思考を放り投げたわけだが。

真面目なアイツは、それを必死で考えるかもしれない。どうすれば巻き込まずに居られるのか。どんなことに七人は傷つき、それを回避するためにはどうすればいいのか。何度も分析し、問題点を洗い出し、そして解決策を模索する。それを何度も繰り返し、徹底的に考え出した処置を実行する。

だって、徹底していたじゃないか。禁忌に土足で踏み込み荒らし回るなんて、栄治の馬鹿だってそんなことはしない。どう考えても不自然だ。友達の理想像を、誰よりもはつきりと持ってるアイツが——。

——日向くん。

そう——、ありゃ、俺と陽子の責任だろうな。よっぽど気に入ってくれたんだろうな、あんなにもたわいのない日常をさ。

携帯電話が鳴る。着信はクロさんだった。もう時期が近いことを改めて思い知らされる。

「もしもし——」

「慶介か、今日の夜は空いてるか？　いつもの喫茶店に来い。必要

なブツを渡す」

必要最低限の業務連絡だった。すぐに通話は切れる。

「まだ返事してねーだろうが」

悪態をついても、無機質な電子音が鳴るばかり。

クロさんも随分と変わってしまった。昔はこうじゃなかった。子供が好きな人だった。俺に色んなことを教えてくれた。自分にも俺みたいな子供が欲しいって言っていた。今でも俺には多少の心配を見せてはくれるが、決定的に昔とは違う。

「うるせえな、黙らせてやりてえ」

喫茶店ではしゃぐ子供がいた。それをクロさんはゴミのように見下した。ぽっかりとした喪失感を覚えた。ブラック・マンデーと呼ばれる災厄が奪っていったのは人の命だけではない。残された者さえも変質させてしまったのだ。

気がつけば俺は、教会の裏手に来ていた。ここはキリスト教系列の墓地が並んでいる。ブラック・マンデーにて奪われた命が、いくつもの魂が眠っている場所だ。一際大きな墓標がある。だが、五万の魂が眠るには小さすぎると思う。

「慶介――」

声をかけられる。裏手に回る途中に姿を見られたのかもしれない。

「おう、パパ。元気か？」

「パパは止めなさい」

不本意です、と聞こえてきそうな南さんの表情。

「最近また学校から電話がありました。慶介、卒業する気はあるのですか？」

有難い説教を聴くのも悪くない。随分と名残を惜しんでいるな、俺も。

「悪い、時間があんなねえんだ」

「それは不登校に値する理由なのですか？」

正直に答えるわけには行かない。言える筈がない。今から人を殺すからです、なんてよ。

「何をするつもりですか？」

乾いた空気だ、冬の夕暮れによくあう。

「答えられませんか？」

このままじゃ疑われそうだから、半分だけ答えることにした。

「日向を探している」

「日向――？ 部屋には帰ってないのでですか？」

「帰った形跡はない。日向は不登校とかじゃないのか？」

「ええ、日向の連絡は特に受けてません」

驚きだった。あの様子じゃ学園にも登校していないと思っていたが、律儀なヤツだ。学校に行けばよかったな。

「なあ、南さん。高辻日向の本名は知ってたか？」

「・・・・・・ええ」

逡巡し、答える。

「森野・・・・・・美月です」

「どうして親元に帰さなかった？」

「始めは親元に帰すのが筋だと思いましたが、危険だと判断しました」

「危険？」

「彼女、難民の仮設住宅から夜中に抜け出しているところを見つけたんですよ」

「そのどこが危険だ？ 死んだ親が恋しくなって抜け出す子供なんて山ほどいただろう？」

「銃を、持っていたんですよ。殺してやると目を血走らせて」

「――銃？」

あまりにも、日向に似つかない単語だ。

「誰を、と訪ねると、森野勇次と答えました。異常でしょう？ 自分たちを救ってくれたはずの英雄を殺してやるだなんて、ただ事ではありません。だからひとまず身寄りのない彼女を引き取り、彼女の素性は調べました」

「そこで知ったわけか。英雄の娘は英雄を憎んでいると」

「日向は……そのことで苦しんでいるのですか」

「ああ」

「そうですか」

短く答えると、南さんは後悔するかのように俯いた。

「私は……父親失格ですね」

そして、疲れた笑みを漏らす。

「彼女はどこか無理をしていた。私は、それに気づいていたはずでした」

懺悔するように。

「理由を知っていたはずでした。でも私は些細なサインを、自分の気のせいかと見逃した。とりあえず様子見をしようと日和見なことを考えていました。本当に、父親失格です……」

いつでも父親であり続けてくれた。俺たち七人の父親代わりだった。失われた家族に代わる温もりを、南さんは与え続けてくれた。それはどれくらい大変なことだったのだろうか。経済的にも、精神的にもだ。

「ああ、全くの馬鹿野郎だ」

そうやって一人で、全てを解決しようとしてくれていたのかもしれない。

「家族を頼れよ大黒柱。アンタを含めた八人で南家だろうが」

我ながら、なんともクサイ言葉だと思う。

「……そうですね。慶介の言うとおりなのかもしれません」
「とりあえず、そんなワケで日向を目下ウォンテッド中だ。パパはアイツ見てないか？」

「……見てませんが、恐らく居場所の特定はできます」
「思いもよらぬ情報だった。」

「どこだ！」

「三日後この場所に、恐らく日向は現れます。例年通りだと、大体夕方から夜にかけてでしょうか」

「三日後？」

「ええ」

俺も、すっかり忘れていたことだった。

「三日後は、ブラック・マンデーが終わった日と言われています。審判の日……。井端紫音の、全ての犠牲者の命日です」

長い冬 ― 庄治慶介

「明後日の昼二時、このエディフィスタワー前で森野勇次が市長選挙の演説を行う。四期連続の市長となる線が濃厚だ」

「・・・・・・」

「――慶介」

「・・・・・・聞こえてる」

「ならばいい」

会話は淡々としていた。そこに昔の暖かさはない。ただ、機械的な冷たさだけが残る。

「本来ならば近づきたいところではあるが、そうなれば取り押さえられる可能性がある。十メートルが妥当な距離だ。それを超えて近づくな。本番はエディフィスタワー前に選挙カーを横付けし、それを群集が見上げる形となる。その群衆に紛れた形で狙撃を行うわけだが――」

聞こえる言葉は右耳から左耳へ通り抜けていく。何も覚えていない。

深夜になっても、針木駅前から人の姿がなくなることはない。

眠らない街だ、ここからじゃ星明りもよく見えない。全てがネオンに溶けて飲み込まれていく。

ここだったら、どんなに魂が汚くとも、心が腐れ落ちたとしても、清濁全てを飲み込んでくれるような気がした。

その象徴が今日の前に聳えるエディフィスタワー。御座市のシンボルだったはずのソイツは、森野勇次の案により針木市に再建築された。あの日も俺たちを冷たく見下ろしたソイツは、今もまだ変わらぬ姿で俺たちを見下ろす。なあ、森野勇次――それが俺には、お前への憎しみを忘れるな、と絶えず語りかけているように見えるんだ。

――人に過去は選べない、か。

「――過去を亡き者にすることはできない」

娘の言葉に反するように、お前はいつでも俺にそう語りかけていた。

「お前は、そう考えているのか？」

クロさんが問いかける。

「これは過去も未来も選ぶことができるチャンスだと考えてんだよ」

「だが、その未来にお前が含まれることはない」

その通りだ。

「だからこそ、俺はお前を疑う」

冷たい、体温のない目に見据えられる。

「その未来を、お前は仲間たちと甘受したいと願っているのだろう」

「ああ、そうだな」

「否定しなくていいのか？」

「もうとつくに失望してんだろ？」

「安心もしている。お前は俺と違い、お前のままだ」

それはきつと、記憶を手繰り寄せた答えだろう。そう言うクロさんの目は冷たいままだ。

陽子のことを思った。彼女もまた、彼女のままでいてくれた。

変わらずにいてくれる人の大切さを、アンタはまだ覚えているか？　もうきつとアンタは、その言葉と共に感じる暖かな感じを思い

出すことができないのかもな。

「反論もないのは心配だな」

「安心しろとか、俺はやるとか、もうそんな言葉は無意味だろ？」

そんな言葉、今のアンタにとってはなんの足しにもならないだろ」

クロさんは笑いをこぼした。

「くくくつ、その通りだ。明日お前の出す結果が全てだ。俺は、期待もしないし絶望もしない。ただお前の出した結論に対して動くだけだ」

随分と頭のネジが緩じまったみたいだ。本当、昔のアンタからは信じられない。アンタの婚約者もきつと、そんなアンタなんて想像

できなかっただろうな。今のアンタは、破壊するだけの機械だ。

「ロボット野郎——」

「正解だろうな……憎みすぎて壊れた頭じゃ、もう憎しみは感じない」

「皮肉に馬鹿正直に答えてんじゃねえよ」

「だが、忘れてはいないこともある」

クロさんは凜として告げる。

「大切な思い出があった」

その言葉は、過去形だった。

もはやかけるべき言葉はない、といわんばかりに、クロさんは踵を返した。

後には、冬の始まりを告げる冷たい風が吹くばかり。

『例えば、誰か悪い人がいたとして——』

『この手でさ、殺してやろうって思うくらい憎かったとして——』

『本当に悪い人を殺しちゃうと、その人はどうなっちゃうのかな？』

例えば、それが仲間を救うための崇高さを包括していたとしても——。

『今度は、その人が悪い人だね』

長い冬は、まだ始まったばかり。

復讐の是非 ―幕間―

誰が、悪かった？

法律という尺度で測るのではない。

慶介よ、一体誰が悪かったのだ？

お前は迷いなく答えるだろう。

森野、勇次と――。

確かに、彼の犯した罪は重い。

ならば彼にもその命をもって罪を償ってもらおう。

罪を乗せた左の天秤が吊りあうには、右の天秤に彼の命を乗せる
しかないのだから。

では、その結論は正しかったのだろうか？

お前の行動も法律の尺度で測るならば、けして許されることでは
ない。

確かに、たとえその行為を法が罰しても正義と呼べる場面がある。
義賊という価値観だ。

でも、やはり法律は守らないといけない。

明確化されなくても、超えてはならない一線というものが確かに
あるのだ。

私たちが出来るのは、忘れたことを思い出すことだけなのだ。
だから、復讐は禁止された。

この国にだって、復讐が正とされた時代が確かにあった。

しかし、時代が進むと共に私刑は否定された。

多数決で否定されたものかもしれない。

それは、少数の人にとっては否定することのできない絶対的な行
動原理なのかもしれない。

私には、その少数の人々を否定することは出来ないのかもしれない。
い。

だが、そこにお前の救済はない。

目には目を、齒には齒を。その果ては、――核には核を。ならば否定しなければならぬ。お前の行き着く先は、地獄のような場所だからだ。

お前の足は、結局、ブラック・マンデーのような地獄へと向かっているのだ。

そんな、長い長い、地獄の入り口で。

長い長い、冬の始まりに。

お前は、日向との邂逅を果たした――。

埋没 ―高辻日向

七人の絆を滅茶苦茶にしまつてから、何日経つたのだろうか。あれから私は自室に帰っていなかった。今までバイトでコツコツと貯めていた貯金を使い、カプセルホテルと学校を往復していた。本当は学校を卒業したときに南さんへ養育費を返そうと考えていたのに、その計画も水の泡だ。

『親はいますか？ それじゃあ色々大変でしょう？ では、友達はいますか？』

今より少しだけ若い、南さんの顔を思い出した。本当の父親みたいだった。今でもまだ、私はそう思っている。

でも、それすらも断ち切ることを決めた。

もう、家族も友達もいらないと決めた。傷つけてしまうならば、自ら傷つけて捨ててしまおうと思った。その方が致命傷にはならないから。

ぼんやりと幻視していた少年は、少しだけ笑ってくれた気がした。そう、一番はアナタだった。

アナタが笑ってくれるならば、私はアナタ以外の全てを捨てることが出来るの――。

日向くんは、私の全て――。

――瞬間に、慶介の顔が浮かんた。

臆病で矮小だった、私の世界の全て――。

――危険だと思った。

私の目に映っているのは、今も昔もただ一人――。

――だから、そこに慶介を映すわけにはいかない。

「そんなアナタ達におトモたち面されたくあつりませーん」

「――っ」

突然のことに驚き、顔を上げる。

「よお奇遇だな、優等生が夜遊びか？ バイトもせずがいい身分だ

な」

「・・・・・・・・慶介」

慶介が、目の前に相変わらざるのへらへらとした顔で立っていた。危険だと思った。すぐに走り去ろうとした。

「待てよ」

だが、その前に手首を掴まれる。

「つれねーな、お友達ヅラさせろよ」

「不必要よ、この手を放して」

「却下だ」

「大声出すわよ——」

瞬間に、乱暴に口を塞がれる。頬を掴まれたのだ。

「だったら本当にレイプしてやってもいいんだぜ？ 家出娘が夜の街で少年に絡まれてレイプされるなんてよくある話だ」

低い声に、戦慄を覚えた。恐ろしい形相だった。確かに私は仲間から嫌われようとしたけれど、この状況は一体なんなのだろう？

慶介が・・・・・・・・まるで別人のように見えた。まるで、二重人格のように。

「俺はな・・・・・・・・俺たちに手を出したヤツはどんな手段を使っても、必ず排除する。そう決めてるんだよ」

そのまま壁に押さえつけられる。手首を掴んでいた手は放されたが、口元を押さえつける腕はびくりともしない。今更ながら、私は後悔した。これが、敵になった庄治慶介だ。仲間内に見せるふざけた態度はどこにもない。あるのは圧倒的な恐怖だけだった。

「お前は、俺たちを攻撃した」

慶介の腕が、内腿へと伸びて、ツーッと線を描く。

「——っ！」

悲鳴は、口の中でかき消された。恐怖で、思考が真っ白になる。

「だから、お前にもそれ相応の報いを与えることにした」

ゆっくりと指は、スカートの中へと潜っていく。感触は、徐々に秘部へと近づいてくる。

両手も両足も自由だったのに、恐怖で震えて動かすことが出来ない。

「言っただろ？ おトモダち面させろって。セックスフレンドだよ。栄治が言ってたな、陵辱における処女性かどうのってな」

慶介は下品な笑みを零し。

「なあ、ちゃんと処女だろうな——？」

秘部に指が達し、ショーツの上から押し付けられる。

「——っっっ！」

びくりっ、と身体がひととき大きく跳ね上がる。

叫びたかった。逃げて、助けを求めたかった。でも、口さえも震えて、思い通りに動かすことが出来なかった。ただ、目から涙だけが溢れた。

恐い、恐い、恐い——。

頭の中を巡る言葉は、ただそれだけだった。

「……ん？」

恐怖の余り私は、子供みたいに失禁してしまった。

情けない、恥ずかしい、恐い——。色々な感情が滅茶苦茶に混ざり合い、狂ってしまいそうだった。

濡れた自分の指を慶介は不思議そうに眺めていた。

「ヤベェ……やり過ぎた」

間拔けな声で、そう言っ、口元を押さえた手を開放した。

「……は？」

「今のなし、忘れる。——というわけでデートしよう」

混乱した思考が徐々に収まっていき、状況を確かめる。

これは——慶介の悪ふざけ？

「フアアアアアアック——！」

「タイソン——！」

右ストレートを炸裂させた。

「ワケが分からないワケが分からないワケが分からない——！」

「お、落ち着け、軽いスキンシップだったんだ。女性は男性よりも

肌を接触させることで安心感が……レコパツ——！」
サッカーボールキック。

「どこの世界にレイプされそうになって安心する女がいるのよ——！」

「ぐっ……、お、お前がもしかしたらその希少な一人かもしれない……フグツ——！」

踵落とし。

「はぁ……はぁ……、本当にアンタってヤツは……」

「待て、スマン、悪ふざけが過ぎたって——」

「……本当に、恐かったんだから——！」

我慢できずに、私は泣いてしまった。本当に最悪。ショーツは濡れて気持ち悪い。情けないし、恥ずかしいし、死にたいくらいに最悪——。

「本当に、悪かった——」

ポンポンっと頭を撫でられる。

「でも、お相子だろう？ 俺たちだって本当に恐かった。お前に裏切られるのは、本当に恐かったんだ」

「……本当に、本当に馬鹿！ 私は、もう抜けたかったのよ！」

「そうだな、おトモダチごっこはもう終わりにしよう」

「……へっ？」

間拔けな声を洩らした。

「今から俺は、お前の暗黙の了解に踏み込む——」

慶介は、そう宣言した。

「何を、言ってるの？」

「続きは明日にしよう。というわけでデートしよう。明日の正午、エディフィス・タワー前で待ち合わせだ」

そう言って慶介はひらひらと手を振って、踵を返す。

「待ちなさいよ！ 行くとは言っていないでしょ！」

「ちゃんとパンツ履き替えて来いよ？ 小便臭いデートは勘弁だ粗相女」

「慶介えええええ——！」

何かを投げ付けてやりたかったが、手ごろなものは何もなかった。そのまま、慶介は夜の街へと消えていく。

いつも、いつも、人を馬鹿にするだけ馬鹿にして。自分勝手に傲慢で、自分の優しさを押し売りにして——。そんなアンタの為に行くわけじゃないじゃない。そんなアンタが私の中で一番になるワケないじゃない！ だから私は、アンタ達から離れたいと思ったのよ！ 行かない、行くもんですか、行ってたまるもんですか！

・・・・・・・・。

・・・・・・・・そして、次の日。

散々悩んだ挙句、私は待ち合わせ場所に約束の時間三十分前に立っていた。

ワケが分からない、本当に。私、何やってんだろう、こんな中途半端な覚悟でさ。そんなことをぼんやりと考えているうちに、待ち合わせ時間十分前になっていた。

ダメだ、どうしたいかハッキリしないと。もうすぐ慶介が来る。それまでに、決めておかないと——。

・・・・・・・・。

そんな気も知らずに。

「・・・・・・・・遅い」

すでに、待ち合わせ時間を三十分も過ぎていた。

「あり得ない・・・・・・・・あの男。自分でデートだとか言っておきながら・・・・・・・・」

・・・・・・・・。

「・・・・・・・・おー、日向。お前早いな」

「慶介えええ——！」

慶介は、一時間の遅刻をかました。

「アンタ、自分で提案しておきながら一時間の遅刻ってどういうことよ！」

「いつも通りのことだろうが」

「……いつも通りに。」

「肩の力も抜けたし、いつも通りだろ？」

ぬけぬけと、そんなことを言った。

「ちゃんとパンツは履き替えてきたか？」

とりあえず鈍器のようなもので三発殴った。

駅前――。

「この前、ビリヤードってヤツを初めてやった」

「アンタ、やったことなかったの？」

「ああ、陽子に教えてもらった」

「……」

「お前いたんだろう？ 久に見つかってたぞ？」

「そう」

「入ってくれば良かったんだ、姉ちゃんも一緒だったのに」

「どうして知ってるのよ！」

「陽子から聞いた。そして、俺は暗黙の了解に踏み込んでいくことを決めた」

「余計なお世話」

「余計なお世話をすることを決めた」

「本当に減らず口を」

東口――。

「だったら、私もアンタに踏み込む」

「来るがいい」

「なんでそんなに態度がデカいのよ」

「実は俺は南家で一番偉いのだ。南パパにだって説教が出来る。パパが神父ならば俺は神だ」

「……一番の俗物のクセに」

「貴様……レイプの続きをするぞ!」

「もしもし、警察ですか? たった今日の前で性犯罪予告をする自称神が――」

「待て、待て、待て――、姉妹揃って同じリアクションを取るんじゃない」

「……姉さんの話はしないで」

「ホントに嫌ってんだな」

色んなところにいく。気取った物はなく、着飾ったところなどない。優等生と劣等生のありのままの日常。

「ゲームセンターって初めて」

「お前入ったことないのか? 珍しいな」

「アンタだってビリヤードしたことなかったんでしょ?」

騒音が支配する、五十坪もない小さな店内。

ガラス戸の中にぬいぐるみを入れた遊具が並んでいる。

「なんだ、お前欲しいのか?」

「別に」

「そうか、じゃあ奥に行くぞ、俺もクレイゲームは用がない」

「……」

「おい、貴様。なぜ付いて来ない」

「別に、すぐ行くわよ」

じーっ。

「貴様、本当は欲しいんじゃないのか?」

「別について言ってるでしょ」

じーっ。

「指を咥えながら見るんじゃない。メチャメチャ欲しがってるじゃないか。仕方ないな……」

「別について言ってるじゃない」

「とんだツンデレだ貴様は、ならばこのぬいぐるみを取って貴様のデレを引き出してやる」

「栄治語を使わないでよ」

「そしてデレと化した貴様は、今度は俺のモノを指咥えながら物欲しそうに見ることになる」

とりあえず鈍器のような物で三発殴った。

殴られながら、慶介はぬいぐるみをゲットして、それを私に放り投げた。

もしかしたら、私の顔は少しだけデレっとしていたかもしれない。そうやって私は日常に再び埋没していく。

しかし――。

私は再び、慶介との日常へと戻っていく。

しかし、それでは――不発弾を抱えて、生活していくようなものではないか？

時刻は、すでに夕暮れだった。

「もう一箇所だけ」

「どこよ？」

「来れば分かる・・・・・・・・・・」

言いよどむ。

「？」

首を傾げた。

告白 ― 庄治慶介

無言のまま、高いコンクリートの壁の前に立ちすくむ。

県境――。ここは、境界線の上だ。

けばけばしいオレンジ色に染められた瓦礫の楽園が、この檻の向こうには広がっている。

通る人の影はない。この先にはゴーストタウンと化した埃塗れのコンクリートが立ちすくむだけだからだ。

慶介と私はまるで、滅びゆく世界から生き残った、ただ二人の人間のように。

「もう、誰もいないんだろうな」

「ええ」

静かに、一日が終わろうとしている。

「さすがの不真面目な慶介でも、授業で聞いたでしょ？」

「耳にタコができるほどな」

「どうしてここに連れてきたの？」

慶介は言い淀み、考え直し、言葉を紡ごうとする。

「滅んでしまえば空しいもんだな……。ただ、漠然と、身体にぽっかり穴が開いたみたいになくなっちゃったことだけが分かる」

「そうね……。…」

「失うってのは、そういうことだと思う」

「何を失ったの？」

「父親と母親」

その言葉は、鋭利なナイフとなって森野美月の心を切る。

「失ってしまえば、どんな理由も無意味になる」

慶介は黄昏へと手を伸ばす。空を切る手は、空に届くことはない。

「庄治慶介って名前が、俺にとってどんな意味があるのか、俺にはよく分からない」

手は力なく落ちた。

「高辻日向って名前が、お前にとってどんなに意味のある名前なのかも、分らない」

「知らないのなら、土足で上がらないで……」

「招かざる客、ってか？」

慶介は笑ってみせる。

「友達なら隠し事はダメか？ 踏み込んだじゃいけないか？ どっちだろうな？」

「……」

「俺たちのやってきた『友達』って、何も出来ないよな……だからお前は否定したかったのか？」

「……やめて」

「逆に言えば、何もしなければ、何も求めなければ友達になれる。定義されれば機械にだってできるぜ」

ゆっくりと慶介は振り返る。

目が合う。

私の心は、怯えに満ちている。

「でも俺は……高尚なモンなんて信じねえ」
重く呟く。

「劣等生だからな」

そしてすぐに拡散させる。

「……本当は、分かってるんでしょ？ 私の、暗黙の了解」

「ああ、多分全部。お前の心の中以外はな」

「嫌いじゃない……、嫌いになんてなれるはずがない。表面だけでも、隠し事だけでも、私はそれを好きになった。紛れもなく、アンタたちは私の中で友達だった。それでも友達を続けるわけにはいかないのよ。それは、一番じゃないから——」

慶介にも分かっているはずだ。これは友達の定義の問題ではない。優先順位の問題だ。

「……あなたは、ブラックマンデーの時、何をしていた？」

「ひとり、震えてたな……」

「今のアナタじゃ想像できない」

「うるせえ」

笑いあってみる。ここまできて、取り繕ってみる。無駄だ、と知りながら心を偽る。

「私は、思い出せない」

やはり、無駄だった。今日の夕飯の話みたいにな、笑って話せるんじゃない。

「頑張ってみるけれど、思い出すことができない……」

ブラックマンデーは、悲劇の象徴。ならば、思い出さないということは喜ぶべきことだろう。でも、私には喜ぶことなんてできない。

「あの事件は………作爲だったのよ——！」
叫ぶ。

「いつそのこと死んでしまえば良かった………。全ての罪を明るみにして、森野という一族ごと責任を取らされてしまえば良かったの」

「そう、春賀晃と森野勇次。ブラックマンデーを機に一躍有名になった二人の名前こそが、事件の核心にある」

「御座市の人々を殺したのは………森野勇次という男。森野美月という少女の父親………」

——森野、美月。

慶介はその名前を反芻する。

「そんな、呪われた血が憎い………」
怨ずる。

「私のために、八十万人の犠牲を選んだ父が、憎くてたまらない」
そして、力なく俯く。

「私の………為に？」

慶介はぼんやり呟く。

「私は、生まれつき病気を患っていたの。ぼんやりとだけけど、昔の自分を覚えてる。昔の私の髪は真っ白で、目は真っ赤だった。十年

も生きれないって、そう言われていたらしいの」

「……………」

「そんな私を助ける方法を父は見つけた。その代償が、ブラック・マンデーという事故を引き起こすことだった」

顔を上げる。恐らく私の表情は悲愴に満ちている。

「原子力発電研究施設の設置に後ろ向きだった高辻洋平を、都市の発展という側面から何度も後押しした。設置のための予算を、針木市から融資するという条件を出した。大掛かりな産業だった。その建設には春賀建設も関わった。それは偏に、原子炉を融解へと導くために」

慶介は、スラスラと私の知らない事情を説明し始める。

驚きだった、同時に疑問でもあった。

「アナタは、誰？」

険しい表情。慶介の真剣な表情は稀だ。

「高辻日向と言う名前に……………どんな意味がある？」

慶介は質問に答えず、核心に迫ろうとする。

「すべて」

迷いなく答えた。きつと、その答えで正しい。罪も、罰も、喜びも、苦しみも、愛情も、憎しみも、——過去も。そこにはないのは未来だけだ。

「高辻、日向は生きている……………」

「えっ——」

「俺の名前は……………高辻日向」

繰り返す。

「……………偽者の亡霊に囚われるな」

「何を、言ってるの？」

慶介の言葉が理解できない。

「言ってはいけない冗談も理解できないの、アンタは——」

「俺なんだよ。オレンジのゴムボールで遊んでいたのは——」

時間が止まった。

「春はな、夜桜が綺麗なんだよ。暗い公園に咲く夜桜はわずかな光をすべて吸い取っているかのようにその色を際立たせるんだ。それを見上げながら、大人たちは酒を嗜む。それを見ながら俺も、早く大人になりたいって、子供心に思っていた」

慶介が、高辻日向の言葉を口にする。

「夏はみんなよく海に行くんだ。でも夏の終わりはダメだ。クラゲってやつがいる。陽子曰く、人を襲う獰猛な生き物らしい。もちろん嘘だが、刺すのだけは本当だ。秋は——」

「もういいよ——」

ごまかしようもないくらいに決定的だった。

「・・・・・・・・生きて、いたんだね」

「ああ・・・・・・・・」

「どうして・・・・・・・・」

後の言葉は続かなかった。だけど、慶介はそれを掬い上げてくれる。

「お前に謝られるのが恐かった——」

「どうして？」

「対等でなくなってしまうのが恐かった。もしもお前が負い目から下になると、これまでみたいな関係じゃいられなくなる。お前とは対等に睨みあって・・・・・・・・対等に笑っていたかったから」

「・・・・・・・・」

「なあ、『美月』——。お前のしようとしていたことは、必ず俺たちに影を落とすことになる。欠けるというのは、そういうことだ」
私の目的を——慶介は知っていた。

だから遠ざけようとしたのに、こうして近づいてきた。

「もし、そうなれば・・・・・・・・俺はお前を許さない」

そうして警告を込めて私を睨む。

「俺自身、『高辻日向』も、絶対に、許さない——」

「・・・・・・・・」

「だから言うことにした。言えば、理由はなくなるから」

「生きて………いたんだね」

どうしようもない、歓喜で満たされる。

「うわあああ………」

あとはもう、言葉にならない。

「うわあああああああああああああああ——
——！」

決壊するばかり——。

「おっ、おい——」

涙腺が壊れて、あっという間に視界が滲んでしまっ
て使い物にならない。

「ま、まあいっか」

慶介は、昨日の夜のようにポンポンと私の頭を撫でる。

「日向改めて美月、明日付き合ってくれ」

言葉が上手く喋れなくて、必死に首を縦に振った。

「明日、一緒に墓参りをしよう——」

私は、神様へと願った。

——これが、夢じゃありませんように。

高辻日向が入れ替わる。高辻日向は森野美月となり、庄治慶介は高辻日向となる——。

この日から、世界は変化した。

今日生まれた希望を飲み込むように、濁流となり、私たちを汚していく。

歓喜に満ちた私に気づくはずがない。

この時、慶介は、どんなに絶望的な気分だったのだろうか。

けして、私だけじゃないのに。

庄治慶介の中にも、暗黙の了解は深く根付いていると言うのに——。

英雄 — 庄治慶介

結局のところ、俺が欲しかったのは理由だったのだと思う。憎む理由、理不尽な出来事に対する責任者探し。だから、俺の望まない形で理由などいらなかった。森野勇次は、絶対的な悪でなければならなかった。

幼き日に、俺は父親に連れられてよく森野家に行っていた。高辻洋平は森野勇次の後輩だった。彼らはよく、酒を酌み交わしながらこの国の将来について話していた。州制度、都市間における競争化での問題点、詳しい話はよく覚えていない。子供だった俺には話の一割も理解できていなかったように思う。

だが、ある話題においてだけは理解できた。それが、新型の原子力発電所。その研究が実用化に至れば、御座市という都市の公共料金を大きく下げ、企業、家庭、あらゆる面においてコスト削減を生み、産業が、都市が、市民の生活が向上するということだった。だが、父は原子力発電所という設備を市内に設置することに難色を示していた。万が一起故を起こした時、多くの人口を抱えた御座市では未曾有の大災害となるのではないかと。

——地球に明日隕石が降るかもしれないと、人々は今日を生きるのか？

——設置場所には細心の注意を払い、人里を遠ざけるべきです。この話題になると、彼らの話し合いは平行線だったように思う。

父は森野勇次に、どうして貴方は市内の設置を勧めるのですか、と問いかける。

森野勇次は言った。他の自治体を巻き込むことは功績を横取りされることでもある。努力もせず、市民の生活を顧みずに都市を衰退させるような愚かな政治家に手柄をくれてやるくらいなら、君がすべきだ。力亡き者を英雄にするのは危険だ。器以上の力を得てしまえば、暴走する恐れもある。

——英雄は、人を救える器でなければならない。

現在、英雄と呼ばれる男はそう言った。

結果原子炉は融解し、多くの人々の命が失われた。

父は、英雄ではなく、絶対的な悪となった。

父の心の中には、市民の生活の向上という尊い理想があったのだ。だが、誰も見ようとしなかった。自分に都合の悪い真実など決して認めなかった。真実とは本当のことなんかではない。人々の信じたいことが多数決により可決されたとき、それは真実となる。誰も求めていなかったのだ。高辻洋平の善など、高尚な思いなど、絶対的な悪党に不要な情報はけして真実になりえることはない。

世界は、嘘をつき続けているのだから——。

俺は信じない。俺の憎しみに不要な、森野勇次の善など信じない——。

『そんな私を助ける方法を父は見つけた。その代償が、ブラック・マンデーという事故を引き起こすことだった』

真実じゃない。

それは、俺の信じたいことなんかじゃない。

「慶介——」

針木駅のコインロッカー前、クロさんは俺に鍵を放り投げる。

「……………もし、俺が失敗したらどうする？」

「……………それは、どういうつもりだ」

「クロさんは、森野美月を使うつもりじゃなかったのか？」

「そんなことか」

詰まらなそうに、溜息をついた。

「そうだな、お前のやる気が出るように教えてやろう。お前がミスれば、俺は森野美月を使う。はっきり言ってお前よりも確実だろう」

「止める、美月には近づくな」

「お前次第だ。森野美月も、春賀のぞみも、彼女たちの運命は今お前の手の中にあるモノ次第だ。全ては、一時間後に決まる」

「美月にはもう、父親を殺す理由はない」

「…………お前、正体を明かしたのか？」

さすがに鋭い。僅かな言葉尻からあらゆるケースを構築していく。コールド・リーディングというらしい。

「そして俺は必ず森野勇次を殺す。だから、日向——森野美月にはもう近づくな」

「お前が言ったことだ、もはや言葉は不要だと。それを決めるのはお前の結果だ。彼女を守るのも、彼女を壊すのも、お前次第だ」

聞き漏らすことの出来ない言葉だった。

「……………壊す？」

「高辻日向が生きていたと知れば森野美月は使い物にならないと判断される、そう思ったか。なら言っておいてやる。俺は彼女に森野勇次を殺させることが出来る。必ず、出来る」

「何を、するつもりだ？」

バンッ、と背後のコインロッカーが震えた。

クロさんが力強く叩いたからだ。

「彼女を守れよ、慶介——」

それは、どうしようもない恐怖だった。

「痛いぞ……………守れないというのは、本当に痛い——」

クロさんの瘴気に当てられるのは、どうしようもない恐怖だ。

「……………殺せる」

精一杯の強がり口にする。

圧力は消える。脅威は一瞬で去り、クロさんの表情は機械のように冷淡になる。

「一時間後を期待する」

クロさんは去った。

だが、俺は動くことが出来なかった。

——殺さなければ、絶対に森野勇次を殺さなければ。そうだ、俺は信じてない。俺の憎しみに不要な、森野勇次の善など信じてない——。そうしなければ美月を救えなかったなど、そんな美談、真実じゃない。俺の信じたいことなんかじゃない。

叫びだしたかった、クロさんのように狂ってしまいたかった。
俯き、顔を覆う。

だけど、この心の限界は、中途半端な憎しみを抱えるばかりだった。

どうか、どうか俺に憎しみを与えてください。躊躇わずに引き金を引ける、深い深い絶望を与えてください――。

望まぬことを強要される子供のように、俺は祈り続けた。

そんな俺を救うように、優しい声がかけられる。

「すみません……」

顔を上げる。

「私もコインロッカーを使用したかったので」

「えっ――？」

だがそれは救いなどではなく、残酷な偶然だった――。

「森野、勇次――」

「おや、私も随分と有名になったものですな」

壮年の、だが記憶と変わらぬ優しい面持ちで、森野勇次は立っていた。

――ありがとう、美月と友達になってくれて、本当にありがとう。
ひゅうひゅうと、頭の中に風が吹き荒れる。

思考が、処理落ちしたようにフリーズする。

十年以上前の言葉は色あせることなく、頭の中を支配する。
分泌系が多分イカれている。

ドボドボと、脳を麻薬漬けにされる。

「……英雄」

それは、思い出してはならない言葉だった。

それは、決意の炎を吹き消すに十分だったから。

認めまいと目を背けていた真実が、俺の中で目を覚ます。

認めてしまえば、真実になってしまう。

そう、彼は紛れもなく英雄だったから。

だからけして語らぬように、考えぬように、絶対的な悪として思考

を停止したはずだった。

——高辻日向にとって、森野勇次とはどんな存在だった？
血が、凍っていく。

——高辻日向は、森野勇次に憧れていたのだ。

高辻日向にとって、森野勇次はずっと英雄だったのだと。

憧憬 ― 庄治慶介

「日向くん、ごめんな、退屈だっただろ？」

「ううん、よく分からないけど、おじさんもお父さんもみんなの幸せのためにがんばってるっていうのは分かるから、退屈じゃないよ」

「ぶー、日向お父さんの前だからっていい子ぶってる」

陽子が不貞腐れた顔で言う。

「はははっ、許してやってくれ日向くん。陽子は嫉妬してるんだ。私が本当は息子が欲しかったんじゃないかって家内が口を滑らしてね」

「それは、森野さんが悪いでしょう」

高辻洋平も笑う。

「言ってくれるな高辻くん。君は幸せだよ、こんな聡明な息子を持てるなんて。君に似なくて本当によかったじゃないか」

森野勇次は朗らかに笑う。

「止めてくださいよ、息子の中で父親の威厳が小さくなってしまいうじゃないですか」

高辻洋平は苦笑い。

「だったら、私がおじちゃんの娘になる」

「えっ――！」

日向は驚いた。

「おやおや、こんな可愛い娘がいれば食卓も明るくなるだろうね」

高辻洋平も冗談交じりでそう言ったが、森野勇次は真剣な声で。

「ダメだよ陽子」

娘をたしなめた。

「なんでよー！」

陽子は膨れっ面で父を睨む。

「お姉ちゃんがいなくなっちゃうと、美月がひとりぼっちになる」

それは、とても優しい声だった。

「ぬ・・・・・・・・」

陽子は何も言えなくなる。

「分かってるよ、本気じゃないもん」

バツが悪そうに、陽子は答えた。

「――ひとりぼっちじゃないよ」

日向は口を挟んだ。

「オレは、美月のともだちだから」

「・・・・・・・・日向くんは、本当にいい子だ」

嬉しそうに、なのに泣きそうな顔で森野勇次は日向の頭を撫でた。大きな手だった。百万人を超える針木市の市民の生活を背負うに相応しい、暖かで大きな手だった。

「ありがとう」

父親も好きだったけど、森野勇次は憧れだった――。

彼は、本当に優しさに満ちていたから。

「美月と友達になってくれて、本当にありがとう」

大きな手で撫でられるのが好きだった。

嬉しかったのだ。

大きく、本当に大きく見えた。

メディアが騒ぐよりも何年も前の話だけど、その頃から森野勇次は英雄だった。

高辻日向の中では、百万人の生活を守る唯一無二の英雄だったのだ。

そんな憧れに認められたような気がして、俺は嬉しかったのだ――。

公約 ― 庄治慶介

「よければこの後暇かね？ エディフィスタワーの前で街頭演説をすることになってるんだ。君のような将来有望な若者にも聞いてもらいたいものでね」

「四期目の市長選ですか？」

悪であることを祈るように吐き出した。

「今回の支持を得る為の嘘はなんですか？」

挑発的な口調で、「公約」を「嘘」に置き換える。

「……嘘ではないよ、今回の公約を私は必ず叶えてみせる。何に代えても、市民に受け入れられず市長を辞めることになったとしても必ずやり遂げたいことがあるんだよ」

「ハッ―それは、それは、ご大層なことだ」

鼻で笑う。

「信じてもらえんようだね。まあ、仕方がないことか。政治家は二枚舌というのは昔から払拭することの出来ない悪しきイメージだからね」

だが、気分を害した素振りもなく、彼は続ける。

「でもね、二枚舌だからといって、国の為、そこに住む人々の為に人生を捧げたいという思いまで嘘と否定することは出来ないんだ。メディアはそれを悪だと糾弾する。それは自分たちのジャーナリズムが正であることを証明したいが故、彼らが悪を望むからだ。しかし、君たち若者までそれに毒されてはいけない。決して情報を鵜呑みにしてはいけない。そして分かりやすい悪に食いついて、君たちが正であると信じたいが為に都合の悪い真実を、けして葬ってはいけない――」

思考を止められる――。凶星を突かれたからだ。

「すまないね、老いぼれの長話に付き合わせてしまった。はははっ、どうしてこんなことを言ったのだろうね」

諦念に溢れた瞳に、一縷の希望の光を乗せて――俺は見据えられる。

「似ているのかもしれない。誰よりも素晴らしい大人になるだろうと思ったあの子と……」

呼吸を止められる――。

「はははっ、ワケが分からなかっただろう。すまないね、本当に。そろそろ時間もない。ロッカーを使わせてもらってもいいかな？」

よろめくように、俺は場所を空けた。

必死で、憎しみをかき集める。お前がそれを言うのか、と心の中で必死に叫び続ける。

失敗は――許されないのだろうか？ と何度も言い聞かせる。

森野勇次に憧れていたからなんだというのだ。必要ない。そんなものは足かせにしかない。だから、頼むから、俺の免罪符を奪わないでくれ――。

胸のポケットに入れた銃を、必死で握り締めた。

演説 ― 庄治慶介

「……少子高齢化の流れを食い止め」

「活気のある社会を構築し――」

針木市市長選挙も終盤を迎え、無党派層の票を確保しようとする候補者たちの演説に街は活気づいていた。だが、必死で演説を行う政治家たちに人々が足を止めることはない。本当に無関心な者も中にはいるだろう。だが市民の心の中には、完全無欠の英雄の存在が大きく根付いている。それ故に、人々の足は一つの方角へと収束していく。その先には高さ二百メートルの超高層ビル、エディフィスタワーがあった。

「この森野に一票を――」

柔らかくも、凜とした声が響いた。その声すらもどこか魔力を帯びているかのように感じる。仕草、表情、そして声が、彼がこの街の頂点であることを表しているようにも思える。

人ごみを割るように歩を進める。

思ったよりも人が溢れていた。それはそのはず、人々の生活に政治は直結するようになった、と父は言っていた。父が子供の頃は、まだ市民は政治に見向きもしなかったらしい。この中四国州が政治にも競争化を導入し、自治体をまるで企業のように扱いだしてから彼らの生活は大きく変わったのだと。

組織のスリム化によるコスト削減、公務員へのリストラの可決、そして、税金の低下と企業優遇による人口の確保、自治体が先頭に立った産業の活性化――。現代は、そんな変革の時代だ。自分たちの生活をより良い方向へと導く指導者を市民は求めている。『英雄』の公約を聞きに、彼らは集まってきたのだ。

『……嘘ではないよ、今回の公約を私は必ず叶えてみせる。何に代えても、市民に受け入れられず市長を辞めることになったとしても、必ずやり遂げたいことがあるんだよ』

気にならないと言えば嘘だった。あそこまで言いきった公約とは一体なんだったのか。森野勇次のカリスマ性に引き付けられるように、俺の足は進む。

「今年で今世紀最悪の人災、ブラック・マンデーから丁度十年です」それは、俺の傷口をえぐるような言葉だった。

——あろうことか、それを引き起こした張本人が、それを口にしやがった。

ぬけぬけと、よくもまあぬけぬけと言ってくれたもんだ。

心が軽くなるのを感じた。

歓喜だ。人々の生活を脅かしておきながら身代わりを立てて自分はそうやって被害者面かと思うと、笑いがこみ上げてきた。

「彼の事故が引き起こした傷跡は、我々の心にも今なお残っています」

「その通りだ、クソ野郎……」

心から同意する。お前が俺の心に突きたてた傷が消えることはない。いけしゃあしゃあと喋るお前の目の前にいる俺の痛みを、お前は知っているか、英雄。

ああ、そうだ。思い出したよ、この感覚。毎晩毎晩、俺は寝る前にナイフを持つ妄想をした。時としてそれは銃になったり、チェーンスーになったりもした。何度も切り刻んでやった。指を一本ずつ削げ落としてやった。人間と分からなくなるまで分解してやる夢想到俺は取り付かれた。

『——あれは、事故なんかじゃない。……森野勇次め、春賀晃め』

クロさんの言葉を聴いた時の俺の絶望がお前に分かるか？

懂れだったんだ。お前は、俺が初めて持った懂れだったんだ。本当に、英雄だったんだ！

それをお前は裏切った！ 父を裏切り、俺の心を裏切り、滅茶苦茶に陵辱しやがった！

「犠牲になった彼らの魂に報いるためにも——」

そうだ、お前はそれに報いろ！ 報いるためにもその命を——っ！

「私は——御座市再興の為に、四期目の市長選に立候補しました」

——群集たちが、ざわついた。

それは決して期待や歓喜によるざわつきではない。

戸惑いだった。

それは、針木市市民と結ぶべき公約ではない。確かに御座市に思いを馳せる元御座市市民もいるだろう。だが、多くの人々にとって、あまりにも思い出したくない過去である。つくべきではない。深いパンドラの箱を、けしてつくべきではないはずのに——。

「ブラックマンデーという事故の為に私が出る事は何か、それをこの十年間ずっと考えていました」

ざわめきの波を割るように。

「残された御座市市民の為に出来る事は何か、家族を失った、大切な人を失った彼らの為に、失われた魂に報いるために出来る事はなんなのか、ずっと考えていました」

「それが、どうして御座市再興なんだよ——！」

俺は叫んでいた。当然のように、集まった群集の視線を集める。

俺は一体何をしているのだろうか？ なぜ注目を集めるようなことを口にした？ これからヤツを殺さなければならなかったのに、どうしてこんなことを口にした？

森野勇次と目が合った。

「そうだ、少年。君の反応は最もだ」

スピーカーを通して、森野勇次は俺へと答える。

「私が言うべきことはそんなことじゃなく、針木市で今も生きる彼らがより幸せに生きるために悪しきを改善し、より一層針木市の発展に尽力する。それが針木市長としてあるべき姿だろう」

「分かっているなら綺麗事を言うな、この偽善者が——」

群集たちが俺を敵視する。当然だ。俺は、彼らの英雄を罵倒したのだから。

「君は知っているかな？ 御座市は針木市と違って木目調に綺麗に

街並みが整っている。平安京からの名残が残る京都のような街並みだ」

当たり前だ、よく覚えている。俺の故郷なのだから。

「道は広くとられている。そしてオービスを多く設置するなどして、スピード違反等の交通ルールの取り締まりも盛んに行われていた」
知っている、俺の父親が、高辻洋平がそうしたのだから。

「それを市民から反感を買おうとも、けして撤去することはなかった。政策の転換もなかった。御座市の政治家が自分の人気よりも、人々が安全に暮らせる環境を考えていたが故だ。罰則による収入源の確保なんかではない。彼らは何度も状況をシュミレートし、現場に足を運び状況を確認することで最も市民が安全に暮らせる街を作ろうとした。安全だけではない。公共機関におけるコストダウン、税金の値下げも常に実施してきた。どの市よりも税金を安く、そう唱え続けてきたのは、現在世紀の大犯罪者と呼ばれる高辻洋平氏だった」

何を、言っているのだこの男は？ 自分が彼を殺したも同然であることを理解しているのか？ そもそも、この選挙演説の場において、市民が大犯罪者と認識している男をどうして讃えるようなことを言うのだ。いくら英雄とはいえ、その発言は失言として捉えられるはずだ。メディアも食いついてくる。マイナスにしかないじゃないか。

「確かに、ブラック・マンデーは深い、私の想像を絶する絶望だった。だが、だからと言って高辻洋平氏が大犯罪者であるわけではない。彼の作り上げた、ブラック・マンデーの起こる以前の御座市はどうだった？ 過去類を見ないほどの人口増加率、それは、彼が過去類を見ない程の素晴らしい都市を作り上げたという結果だったのではないかね？ 私は、彼の意志も救いたい。彼の誇りも取り戻したい。全てが市民たちの為だけに行われていた高潔な政治だった。傷は癒えないかもしれない。憎しみは消えないかもしれない。だがそれでも、私はかつての御座市を取り戻したい。御座市は、私にと

っても故郷なのだから――」

呆然とする者もいた。涙を流す者もいた。集まった者の中には御座市出身である者も少なくはないだろう。この街の人口の三分の一は、御座市の人間なのだから。その誰もが深い悲しみを思い出していた。失ってしまったものを嘆いていた。その根底にあるのは、森野勇次の言った理想郷――御座市のかつての姿だった。

「私には、二人の娘がいます」

森野勇次は、過去類を見ない選挙演説の光景を作り出していた。サクラが騒ぐこともない、ただお通夜のように人々がすすり泣く異様な光景だった。

「彼女たちが、何の苦しみもなく生きることの出来る未来は、御座市の復興により作ることが出来ると、私はそう信じています」

分かった。ようやく、分かってしまった。

俺にしか分からない、彼の理由。

――そんな私を助ける方法を父は見つけた。その代償が、ブラック・マンデーという事故を引き起こすことだった。

罪など感じないわけがなかった。毎晩何度も葛藤したに違いない。彼は何度娘の命と八万人の生活を天秤にかけて、その度に苦しんだのだろうか。それこそ、想像を絶するような絶望だったに違いない。

ずっと、十年間模索していたのだ。自分の奪ってしまった者たちの為に少しでも報いるために。

――ふざけるなよ、だったら自首すればよかったんだ！ お前の命でそれを償えばよかったんだ！

……だが、そんな言葉も俺の中で尻すぼみになっていく。安易に罪を償うなんて言葉じゃない。きっと、奪う前から考えていたのだ。この先の自分の生涯をかけて少しでも報いることができる道――。

ぱちぱちと、十分な沈黙を破るように一人の手を叩く音が響く。それは群集に瞬く間に感染して広がり、大きなうねりとなる。

叫びながら、泣きながら、人々は蛇口の壊れた心で感情を垂れ流しながら英雄を讃えた。

大きかった。森野勇次は、あまりにも大きく見えた。

——だからなんだ！ それならば、俺の家族を殺したお前は許されるんでも言うのか！ お前は決して許されない！ お前のしたことは決して許されない！ 父親を返せ！ 母親を返せ！ 優しいかったクロさんを返せ！ お前は悪だ！ どんなに取り繕おうともお前は悪だ！ だから、俺が裁く——！

誰もが森野勇次に注目している。狂信者のように崇め、もはや誰も俺のことなど見ていない。

「どうか、この森野に一票を——。針木市と、御座市の未来の為に——！」

胸のポケットに入れた、小さな銃を握り締める——。

——お前は、何度も殺してやろうと思ったんだ！

銃を、抜いた。

『例えばさ、誰か悪い人がいたとして——』

陽子の笑顔が、浮かんだ——。

引き金に、指をかけた。

『この手でさ、殺してやろうって思うくらい憎かったとして——』

包まれた手の温もりを、思い出した——。

引き金にかけた指が、震えた。

『本当に悪い人を殺しちゃうと、その人はどうなっちゃうのかな？』

「……ああああ……」

握力がなくなる。

『今度は、その人が悪い人だね』

キンッ、と鋭い音を立てて、銃は落ちた——。

退場 ― 庄治慶介

「お前は、愚かだな――」

「・・・・・・クロ、さん」

その声に顔を上げると、エディフィスタワーを背にクロさんが立っていた。

すでに日は暮れていた。一体どれくらいここで呆然としていたのだろうか。

「・・・・・・違う、違うんだ」

うわ言のように呟くばかり。

「どうした、慶介？ 何が違う？」

びたり、と慶介の足が止まる。

「・・・・・・違うんだ、今度こそ・・・・・・」

「今度こそ？」

「俺が、森野を・・・・・・」

クロさんは煙草に火を付け、長く煙を吐いた。

「お前は、本当に愚かだ――」

哀れみの視線を込めて。

「これが結果だ。お前は、何も出来ない子供のままだった」

「違う・・・・・・、俺は森野を殺してやろうと・・・・・・でも、アイツは美月のために・・・・・・」

「なるほどな、恐らくは森野陽子辺りか、余計な入れ知恵をしたのは」

詰まらなそうに呟く。

「ならばお前は森野勇次以下だな」

「えっ・・・・・・？」

背筋が凍る。

「森野勇次は森野美月を助けるために八十万人を犠牲にした。だがお前は、森野美月を助けるためにたったの一人も殺せなかったな」

平静にクロさんは告げる。

「止めろ、美月に手を出すなど言っただろうが——！」
叫ぶ。

「言っただはずだ、それを決めるのはお前だと」

「美月を、どうするつもりだ」

「お前が知る必要はない。消えろ、慶介。もう二度と針木には近づくな」

微笑を浮かべて言う。

「俺はホッとしたよ。お前を蚊帳の中に巻き込むのは本当は忍びなかった。友達は今からいくらでも出来る。全てを忘れて、新しい人生を歩めばいい」

「お前——！」

「このままここにいれば、お前はきつと絶望する。言っただろう？
痛いぞ、大切なものを失うというのは」

「……だからって、尻尾を巻いて逃げれるかよ！」

「何も出来ないガキが粹がるな——！」

クロさんが叫ぶのを見るのは初めてだった。

動揺を隠せない。

「慶介……お前だろうが俺の邪魔をするならば躊躇はしない」

「最後通告かよ」

「でないと、殺すぞ？」

楽しそうに言った。

「……クロさん」

何もかもが、狂っていた。一体どこで間違ってしまったのだろうか。

「慶介、すまなかったな」

「……おい」

狂った笑顔で。

「お前を引き取ってやれなくて、本当にすまなかったな」

俺は、黒瀬智也が分からなくなる。

「ふざけるな！　ここで降りれるかよ——！」

聞こえているはずだ。なのに、クロさんの表情はもはや崩れない。

「過去が……そんなにいいのかよ」

「それを、お前が言うか？　だったらなぜ、森野勇次を殺すと言った？　なぜ、殺せない理由ができてなお、殺さなければならぬと自分に言い聞かせてきた？」

「……」

「高辻日向を遠ざけたかった、か？」

「——っ！」

クロさんの胸倉を掴み上げる。

「……くくくっそうだろうな、それはとても薄汚い行為だ」
それでも薄ら笑う顔。

「恋人らしい選択だな」

せせら笑いながら。

「……教えろ、何をするつもりだ」

「森野美月は、自分から復讐の道を選ぶ。俺たちが強要するわけじゃない」

「詭弁だろうが——！」

「好都合じゃないか。家族にだけ優しい父親だった森野勇次は実の娘に憎まれながら殺される。復讐としてはこれ以上ない爽快な結末だ」

「その、せいで……美月はどうなる？」

「森野の血筋は残らず絶望へと落ちることになるだろうな」
嬉しそうに。

「はははっ、考えるだけで爽快だ——ぐっ……」
体当たりするように壁に押し付ける。

ぼこぼこ。

頭の中の血液が沸騰する音が聞こえるようだった。

「美月に近づくなれば、ここでブチ殺す……！」

そのまま首を絞めようとした。

「・・・・・・・・」

その瞬間、恭介が万力の力を箆めて、胸倉を掴む手を握りしめる。離すまいとしたが、握力はなくなり恭介を解放する。

「デメエ・・・・・・・・」

「中途半端なんだよ、お前は」

「なんだと・・・・・・・・？」

「俺は途中からお前の失敗を確信した。お前が、美月と陽子に憎悪を向けなかった時点でお前には森野勇次は殺せなかった」

「――っ」

「言っておくぞ、俺は森野美月も絶望に叩き落してやろうと決めていた。アイツの命なんかの為に八十万人が犠牲になったのだからな」
「・・・・・・・・っ」

足に鋭い衝撃が走る。突然のことに情けなく尻餅をついてしまった。払った足はそのまま後ろへ振り上げられ、その反動と共につま先が鳩尾にめり込んだ。

「がっつっ――！」

衝撃で嘔吐する。口から反吐を吐き出して、顎を汚しながらのた打ち回った。

クロさんの蔑ずみの視線が見下ろす。苦痛と悔しさで下唇を噛んだ。

「お前は、俺たちとは決定的に違う」

「・・・・・・・・ち、がう？」

「自分の大切な人が、目の前で醜い肉塊に変わる――」

静かに、クロさんは俺を見下ろす。

「お前は、見たことがあるか？」

諦念を込めて。

「どんなに聖なる祝詞も、真っ直ぐな道德観も、あの街の中ではなんの役にも立たない。誰の耳にも届かない。あるのは、圧倒的な破壊衝動だ。頭が恐怖で沸騰しそうになる。誰もが狂うしかなかった。

そんな世界を作り出しておいて、許すなどと言えるはずがないんだ。今日の森野勇次もそれが分かっている。あの地獄を見たものならばきっと今日の森野勇次の演説は許せないだろう。高辻洋平を讃えるなど、絶対に許せないだろう。気づいていたか？ 何人かは拍手などせず、裏切られたように俯き、唇を噛んでいた。本当に地獄だったんだよ、十年前の御座市はな」

目の前にいる男は過去を回想し、口を噤む。

「……………だが、どうせなら全てを巻き込んで滅んでしまえばよかったんだ」

謳うように。

「あめあめ、ふれふれ——」

あめあめ、ふれふれ——。

あめあめ、ふれふれ——、と。

全てを洗い流して、曖昧にしてしまえ。

全ての感情を、水に混ぜて薄めてしまえ、と。

クロさんは謳うように。いつしか消えた、黒い雨へと願うように。

「……………だが、それももう終わる」

そしてクロさんの唇が醜く釣りあがる。

「はははっ、素晴らしいショーが始まる——最高のショーだ」

両手を上げて、悦に浸る。

狂っている。おかしくならないはずがなかった——。

「……………井端、紫音」

ぴたり、と。

クロさんの動きが止まる。

「やはり、クロさんが壊れたのは……………」

「慶介——さよならだ」

俺の言葉を遮るように告げる。

そしてゆっくりとクロさんの手が伸びて、俺の首を絞めた。

苦しいのは一瞬だった。すぐに、意識が遠くなる。

「クソ……………」

かすれた声で、呟いた。

クソクソクソクソクソクソ・・・・――！

薄れゆく意識の中で、何度も悪態をつき続ける。だが、自分の浅はかさに対する怒りは消えない。どうして、殺せなかった？ 美月は俺の大切な人だった。だから、もしかしたらクロさんは、美月を見逃してくれるかもしれないと甘い期待をしたのかもしれない。黒瀬智也、いや、加藤恭介がそんな甘い男でないことなど分かっていたはずだ。

そして、美月は全ての中心にいる。美月を巻き込まないという口約束。なんという蛇の甘言。なんという愚鈍。途中から加藤恭介は、俺ではなく美月を使って復讐を考えていた。

いや、愚かというならば恭介の言うことは正しい。

『――そこに、慶介はいる？』

久が心配していたのは、そういうことだったのだろう。森野勇次を殺すことを、何度も夢想した。破滅と共に選んだ選択肢だ。俺はその時すでに、七人を過去と天秤にかけて、切り捨てていたということである――。

――失うという意味を、知りもせずに。

加藤恭介の目を思い出した。深い奈落へと続くような黒い瞳。失うとは、そういうことなのだ。

・・・・失いたくない。

もはや、声にならなかった。

・・・・はやく、にげない、と。

美月を連れて、早くしなくては・・・・。

焦燥感とは裏腹に、体は鉛のように重い。意識はふわふわと消えていく。

――そう、美月を連れて逃げればよかったのだ。

だが、それももう遅い。

もうすぐ加藤恭介の復讐が始まる。

無知 ― 森野美月

茜色の墓地――訪れたそこに、慶介の姿はなかった。代わりに、一際長い影を描き出す墓石の前に森野陽子は立っていた。

見間違うはずがない……。ひどく、心がざらつく。理由がなくなっても、長く続いてきた確執がどうしても彼女を敵だと認識してしまう。

後姿からは何を思っているのか、想像することしか出来ない。

ただ夕暮れも相まって、陽子は酷く孤独に見えた。

陽子の視界の中に美月の影法師が伸びる。

陽子はゆっくりと振り返り、少し驚いて目を開いた。

「……………美月？」

「――お久しぶりです、姉さん」

ありったけの皮肉を込めて、姉と呼んだ。

「……………まだ、姉さんって呼んでくれるんだね」

自虐的な言葉、疲れた顔から口から苦笑が漏れる。

その仕草、表情、存在の全てが癪に障った。

「……………ここで、何をしているんですか？」

「……………悼んでる」

「何を今さら――」

だったら、どうして今までここに来なかったのですか――。

全ての呪いが収束する言葉。血流に乗って全身へと巡る怒り。

「どうして――」

言葉にならなかった。荒れ狂う感情の一方で、奇妙なほど冷静な自分がいる。怒りというには、余りに複雑な感情だった。

どうして――私は未だ姉さんを責めようとしているのだろう。悔しさにも似て、焦りのようでもあって、恐くもある。

「……………どうしてだろうね、美月はなんでだと思う？」

「――その名前で私を呼ぶな！」

空気を切り裂いた。

「汚らしい森野の血に、私を巻き込むな……」
心を込めて、姉を呪う。

「――ひとごろしのくせに」

「……」

上手く感情がコントロールできない。酷い言葉だった。でも、日向くんが生きていたとしても、彼女が彼の死を「仕方がない」で片付けようとしたことに対する怒りは消えない。姉をどう扱えばいいのか、私は心の中で持て余していた。
彼女は、寂しそうに笑うだけだった。

「あなたは、どうして？」

質問に答えるには、言葉が足りなすぎる。慎重に言葉を吟味する。
でも結局口から出たのは短く、簡単な疑問だった。

「どうして……とは？」

「どうして、日向くんになろうとしていたの？」

「……」

そして、沈黙。

穏やかに吹き去る風。陽子の髪を揺らして、少しだけ顔にかかる。
沈黙の中、陽子はゆっくりと前髪を指で梳いて戻した。そのクセが、汚れきった感情の中にほんの僅かの懐かしさを蘇らせた。

「そういえば、その質問を受けたのは初めてですね」

「……聞けるはずないよ」

私の名乗る名は、あなたと私の罪の名前だったから。

「突然いなくなってしまって、九年の歳月が流れて、ようやく見つかった時にはあなたは高辻日向だったじゃん……」

「私もびっくりしました……。同時に自分が嫌にもなりま
した……」

透明な眼を向けられる。

「幸せな自分が？」

「・・・・・・・・知った口を聞くんですね」

ねえ、姉さん。私のこの気持ちがかかりますか？

自分が幸せだと感じる度に、彼は必ず現れて、私のことを責め続けた。

滑稽でしょ？ まるで病気みたいじゃないですか？

「あなたのせいじゃないのに？」

白々しく、彼女は言う。

「姉さんは・・・・・・・・未だにそうやって私を扱うんですね・・・・・・・・」

妹としての私が、苛立った。

「そうやってあなたは何も知らないフリをして、偽りの平和を甘受させようとする・・・・・・・・」

姉さんは押し黙る。

「ふざけないでよ・・・・・・・・」

九年間溜め続けた感情が、暴発するように――。

「ふざけないでよ――っ！」

目の前の敵を、撃ち殺すように――。

「そうやって、何も知らない馬鹿な子でいたら幸せだよって、辛いのは私だけだよって被害者顔でさっ！ あなたの為、あなたの為、あなたの為――。私に勝手に罪を背負わせたのはあなたたちじゃない！」

「・・・・・・・・美月」

「そう、美月――。美月美月美月――。あなたの可愛い妹の美月！」

私たち家族は、可愛い妹の為に罪を犯しました？ はっ、あなたたちが欲しいのは美談でしょ？ 美談を免罪符にして自分のやましさを拭いただけじゃない！ 美月だけは、美月だけは、美月だけは――。今ならどうして姉さんよりも私が可愛がられたかよく分かるわ！ 父も母もあなたも、私を可愛がることを罪滅ぼしの代償行為にしたんでしょ？ はははっ、大した免罪符ね。八十万人の人間の不幸の代償が、娘を可愛がることです許されるんだから。本当にお

目出度い――」

ありったけの銃弾を、親愛なる姉へと打ち込んだ。
喉が、渴く・・・・・・・・・・。

「はぁ、はぁ・・・・・・・・・・」

息が苦しい。

「はぁ、はぁ、はぁ・・・・・・・・・・」

恐ろしい。

「・・・・・・・・・・はははっ」

恐怖の余り、笑えてくる。

「・・・・・・・・・・美月は、それでも幸せそうに見えたよ？」
なのに――。

姉さんは、私の『高辻日向』としての時間を、そう表現した。

「どうして、日向くんになろうとしているの？」

再び、問われる。

「そう、決めたからです」

「だから、どうして？」

もう日が暮れようとしている小高い丘。

――どうして？

心臓が、震えた――。

「・・・・・・・・・・っ！」

私はなぜか、泣きたくなる。

泣き崩れないように歯を食い縛って、嗚咽を堪えるのに精一杯で。

「日向くんにはなれた？」

攻撃されたのは、アキレス腱だった。

暗く影を落とす景色。

からっぽだ。

からから、と音がする。

日向くん・・・・・・・・・・どうして、・・・・・・・・・・どうしてそんな目
をしているの？

長い歳月が経った。

変わらぬ少年が唇を歪める。

私の作り上げた偶像の高辻日向、偽者の高辻日向。

彼は私を絶えず責め続けてきた。

耐え切れなかったのだ。

私を、森野美月を責め続ける声に私は耐えられなかった。

だから——私は憎む側に回ろうと思ったから、『高辻日向』になりたかったから。

だから、私は家族を殺したいほど憎むことにした。

弱い心で、ひどく身勝手な私が選んだのは、そんな最低の行為だった——。

そんな出来の悪い彼の模造品を、彼は毎日嘲笑する。

君が、僕になることなんてできはしなんだよ。

だって、君は、身体を入れ替えたって君でしかなかったじゃないか。

僕になるというのは、君でなくなるということだ。

こんにちは、『高辻日向』。

高辻日向でない、高辻日向——。

——あなたは誰ですか？

「サン——」

姉さんが、答えた。

「・・・・・・サン？」

「サンという、少女の話をしよっか——」

それは、静かに語られる。

「むかしむかし・・・・・・」

抑揚なく、無感情に。

「とある街に一人の少女がいました」

哀愁なく、客観的に。

「少女は生まれつき体が弱く、外で遊ぶこともできず、窓から外を眺めるだけの生活でした」

姉さんは、『私』のことを語り始めた。

「母と父、そしてとりわけ姉は、彼女に優しくしてくれました」
それは、まだ幸せだった頃の、家族が欠けることなくいた日々の記憶。

「でも、外に出ることのできない彼女にとっては、辛い優しさ。姉の同情は嬉しくも心苦しく、素直に受け取ることができずにいました」

「・・・・・・なんのつもりなの？」

「彼女は外を眺め続けました。姉と一緒に遊ぶ、元気な男の子の姿を」

——それが、高辻日向。陽子にとっても、美月にとっても、初めて出来た友達の名前。

「いつしか彼女の姉は気がつきました。妹は窓から自分達を眺めているということに。彼女に与えられなかった自由を羨むように。輪に入りたくて、それでも入れない自分の身体を呪うように。」

「ふざけないで——」

「アルビノの少女、ウサギの少女の話です——。姉は知っていました。自分の妹の余命が、残り幾ばくも残されていないことに」

「・・・・・・なっ」

「姉は、聞いてしまったのです。そう言って、どうしてあの子が、と泣き崩れる母と、悲愴な表情で背中を撫でながら、震えた声で慰め続ける父の姿に」

「・・・・・・だから」

だから、なんだと言うのですか？

「姉は男の子を妹の部屋に招いて遊ぶようになりました。彼女は嬉しい反面、申し訳ない気持ちで一杯でした。本当なら、二人は窓の外に広がる広い世界で遊びまわるはず。でも、動けない彼女がいる為に二人とも外で遊ぶことを諦めたのです。取り止めもない会話、とりわけ多かったのは彼女が眺めることしかできなかった外の世界の話。男の子は両手を広げながら大げさなそぶり、楽しかったことは顔一杯に笑顔を浮かべて、つまらなかったことは眉を歪めてち

よつと怒ったような顔をして、本当に表情豊かで、純粹で、まっすぐな男の子でした」

思い出を語り始める姉さんの顔は、少しだけ、ほんの少しだけ優しく見えた。

「でも、男の子は死んでしまいます・・・」

心に大きく憎悪に満ちた楔が打ち込まれる。

「ある日、御座市塚本研究所で行われている実験の噂を、父は耳にします」

——人体実験の話になる。

プログラム・チルドレンと呼ばれる子供たちの話。

「詳しくは知りませんが吐き気がするような反人道的な実験内容だったそうです。現状の遺伝子操作技術は、先天的に飛躍的な知力・体力を与えることはできなかった。よって、ジーンリッチと呼ばれる遺伝子操作により、生まれてくる子供の身体を、そのまま娘の身体としてしまうという手段。壊れかけたハードを捨て、ソフトだけを新しいハードへと移植する。狂気のプロジェクト、『ファウラウェイ・プロジェクト』——狂気の大人たちが夢見た、不老不死という希望を実現する悪夢。それ故に、『ファウラウェイ・プロジェクト』。その方法だけが、延命が絶望的だと言われていた娘を助けることができる唯一の手段でした。そして——その代価は、巨額の資金を動かすビジネスでした。塚本、春賀、沙耶、そして森野勇次による史上最悪の人災の誘発により、多額の利益を生み出す悲劇が画策されました」

「塚本？ 沙耶？」

「そう、塚本は被害者だと思った？ 違うよ、彼らも加害者。ファウラウェイ・プロジェクトの資金を引き出すために、原子炉グループに流れていた研究資金を奪おうとしたんだよ。まあ塚本は利用されるだけされて、ポイされる存在だったけどね」

——通称、ブラック・マンデー。

「八十万人の故郷と引き換えに、一人の少女の命は救われました。」

父も母も、泣いて喜びました。自らが許されない行為で汚した手で、最愛の家族を救えたのですから、彼らに後悔はありませんでした。――でも、救った少女の一言が、その家族を崩壊させる呪文になりました」

「・・・・・・・・」

噛んだ唇から、一筋赤い液体が流れる。

「ひなたくんをかえせ、ひとごろし・・・・・・・・、ってね」

それは、彼らの罪を告発する為の言葉――。

「美月。あなたの言うことは本当に正しいよ？ 父さんと母さんが選んだ手段は、許されない罪だったの。今さら、こんなことを言うてもどうにもならないけど・・・・・・・・、彼らは、あなたを助けたという、あなたの存在に許されていたの」

「欺瞞じゃないっ・・・・・・・・」

「欺瞞でもよかったじゃない。家族が幸せなら、それで良かったじゃない。なのに、美月は逃げ出したよね。あなたは、難民に紛れ、高辻日向を探そうとした。彼の行方はすぐに分かったよね？ 彼、高辻の家の結末は有名だもんね。市民団体のテロの標的になったんだから」

――あの爆弾テロで、幼い子供も巻き込んだらしいぜ？

仮設テントの中で話す難民達の会話で何度も耳にした言葉。

高辻日向の、死亡報告――。

「高辻日向って戸籍を手に入れたってことはさ、その時美月は難民として保護されたってことだね？ 身寄りのない子どもってことで南教会に引き取られた？」

「・・・・・・・・そうよ」

「それで、高辻日向になって、あなたは何がしたかったの？」

「・・・・・・・・」

止めて、私の弱さを告発しないで――。

「復讐？」

「馬鹿げている・・・・・・・・」

「許されたい？」

「故人にですか？」

精一杯の強がり、で、嘲笑してみせる。

だが、彼女は唇を歪める

「自分に――」

「なっ――」

それは、正鵠を射た発言。

言葉が見つからない。体制を取り繕う言い訳を考えるべきだったのか、強い否定を表す言葉を発するべきだったのか――。

でも、どちらも正解から程遠い回答のように思えた。そう、今さら何を言っても許されることではない。私の憎しみは酷く身勝手な独りよがりだったから。

「辛いでしょ、自分のために誰かを傷つけてしまうのは。でも、それは幸せなことだよ」

――よりにもよって、なんと表現した？

「――幸せ？」

怒りが、沸点を超えて、急激に冷たくなる。

「あなたが、あなたごときが・・・・・・どうして私の幸せを定義するのであるか？」

殺意に似た感情。

「幸せだよ・・・・・・あなたは、今も昔も、沢山の人に愛されてるんだから・・・・・・だから、高辻日向だとか名乗って、家族の思いも知ろうとせず、自分の信じたことだけを信じて簡単に誰かを傷つけることができるんだよ」

冷たく、突き放される――。

「・・・・・・ぷっ、とんだ一人相撲だよね？」

ぷっり――、と。

彼女の噴出した笑いに、何かが切れた。

「――っっっ！」

皮膚を叩く音が響く。

「……やっぱ、ダメだわ」

ぽつりと姉さんが呟く。

「やっぱり、私は、あなたのことが憎くてたまらない——」

頬に、強い衝撃を受けた。叩き返されたのだ。

姉さんに叩かれたのは、初めてだった。

「逆に聞くけどさ——愛した親から、愛してくれた親から、存在を否定された時の気持ち分かる？」

「なに、を……」

再び、頬を張られる。

頭の中が、真っ白になる。

ごうごう、と何かがうるさい。

「さて、サンが去った後の、残された家族の話をしよう——」
体温が急激に下がる。

冷たい汗が背を流れる感触がやけにリアルだった。

「サンが去った時、両親を許す存在は誰もいなくなりました。彼らは、救ったはずの実の娘を失い、残されたのは償いきれない莫大な負債のような罪と、血の繋がらない養子だけでした」

「養、子——？」

何の、冗談？

「そう、養子です。姉は、実の娘ではなかったのです。でも姉はそれでも構いませんでした。両親の愛情は妹に大きく傾いていたものの、紛れもなく、血の繋がってない彼女を愛してくれたのですから」
わけがわからない——。

「でも、そんな幸せは妹の失踪と共に終わりを告げました。サンの為に、サンの為に、愛しい我が娘の為に、何万人という人々の命を秤に載せて淘汰した罪に、まず、母が壊れました」

母親の顔——、ぼんやりとした記憶だけど、やさしく笑っていた母親の顔が浮かんだ。

「塞ぎこみ、口数が減り、遂には部屋に引きこもるようになってしまった。母を心配した養娘は、様子を見に母の部屋を覗いたのですが、

そこで見た光景は、常軌を逸していました……」
薄暗い光を宿した双眸に見据えられる。

『みつき……、だいじょうぶよ、きっと良くなるわ、だいじょうぶ、おいしゃさんももうすぐよくなるっていったから』

『みつきはあまえんぼうね、うふふつ、いいわよ、こんやおかあさんといっしょにねましようね』

叫びだしそうでした。変わり果てた姿に戦慄を覚えました。彼女は、人形に向けて、みつき、みつき、と小さい子供がままごとをするようにずっとよびかけていたのです。

『お父さん、お父さん——お母さんが、お母さんがおかしいの。人形に向けて、ずっとみつきみつきって呼びかけているの。お母さん、おかしいよ。お父さん、助けてよ』

姉は、泣きながら、父に懇願しました。お母さんを助けて、と。彼女にとって頼りになる父、大きな背中、でも、彼は姉に顔を向けず、背中越しに重い溜め息をついて、こう言いました。

『放っておきなさい——、アレは、もうダメだ。壊れてしまった』

『え——』

全てに疲れた父は、家族を避けたかったのでしょう。

その日以来、父は、家に帰らないことが多くなりました。

お喋り好きの家政婦の噂によると、他の女を作り、入り浸ってるとのことでした。

自分の蒔いた種を刈り取る為に、お父さんはブラック・マンデーの後処理に忙殺され、少なくなったプライベートの時間は、愛人と過ごす時間に当てるようになりました。

広い家には、心の壊れた母と、独りぼっちになった姉だけが残されました。

『……お母さん、ご飯、口にしてよ。何か食べないと死んじゃうよ……』

『ああ……ようこ、みてよ、みつきがね、わたしのこと、

姉も、その瞬間に壊れました――。

「・・・・・・・・」

血の気の引いた顔。

呼吸が苦しい。

罪悪感が体を蝕み、神経を侵している。

いくら吸っても足りない空気。

丘に上げられた魚きつとこんな気分なのだろうか、唐突に馬鹿なことが浮かんた。

もはや体裁さえ整えられない私を、姉さんは目を細めて笑った。
冷たいくらいに、楽しそうに、愛おしむように、怨ずるように――。

姉さんの伸ばした指が私の頬を撫でる。

「あ――」

突然の不意打ちにびくりと肩が震えた。

「恐がらないでよ」

指は頬を離れゆっくりと私の髪を梳く。

慈しむように。悪夢で眠れぬ子供を諭すように。

「美月を責めているわけじゃないよ？」

そして指は離れ、姉さんの顔から笑みが剥がれる。

「でもね、もう、家族ってヤツに疲れちゃったの・・・・・・・・」

張り詰めた空気。

吹き込んで、吹き込んで、今にも破裂しそうな緊張感。

そして、姉さんは物語の結末を語る。

「母さん、最後に正気に戻ったのか、それとも狂気に行き着いたのか分からないけど・・・・・・・・ある日ね、突然睡眠薬を飲んで自殺しちゃったの」

それが物語の結末。

長いようで短い、家族という楽園の崩壊。

「私ね、悲しいことよりも、ほっとしちゃったんだ。だって、私も

母さんも、もう苦しまなくていいじゃん。そうして、そう思ってしまった自分が嫌になって、許せなくて、そんな負の繰り返しだったワケ」

そして、私の罪が形を成していく。

「どうして、私があなたの前に姿を現したか、教えてあげよっか？」
姉さんは、笑った。

「あなたが母さんを殺したって、告発しに来たんだよ――」
絶望の始まりだった――。

サン3 ―幕間

サンの物語を話そう。

結局のところは、悲劇の物語だった。

彼女の為に、彼女の両親が犯した大いなる過ち。それが、ブラック・マンデー。

一つの政令指定都市が崩壊に追い込まれたこの国の暗部。

高辻という家系は、御座市の重要な位置を占める政治家を輩出した。それが、高辻日向という少年の父親だったのだ。彼の家族は、市を担うもの、そこに住む人々の生活を担うものである。だから、市の崩壊は彼らの責任問題に発展することも予測できるだろう。

彼がサンの屋敷に來れないのは、姿を隠さなければならなかったからだ。

あの事件のスケープゴートとして扱われたのは塚本、井端紫音達研究チーム、そして当時の市長であった高辻の一家である。原子炉誘発における市民グループの大規模なテロ事件は、その三グループをターゲットとしたものだった。

彼の両親、高辻夫妻は見つかり、その責任を問われた。

それが地下鉄爆弾テロ。

そのニュースを見たとき、サンは初めて理解した。

高辻一家は、人目を忍んで御座市を離れようとした。事件により、街を出ようと溢れかえる人々に混じり、地下鉄のホームに並ぶ。誤算は、街を出ようとする交通機関はすべて市民グループに抑えられていたことだ。

サンの悲劇は、そこから幕を開ける。

ある夜、水を飲もうとしたときだった。

居間から漏れる光を見て、父と母の会話に耳を傾けた。

崩壊の原因は、父が関係していたのだ。

聞き間違いだと思った。

思えば思うほど記憶の辻褄はパズルのように組み合わさっていく。

私たちを見る両親の寂しそうな目。

父の呟いた、すまないという言葉。

そして、姉の辛そうに見える微笑。

後ろから名前を呼ばれた。

恐る恐る振り返る。

姉の泣きそうな表情を見て、最後のピースがはまった。

そう、サンだけが何も知らなかったのだ。

そのままサンは屋敷を出た。

着の身着のまま、崩壊した国へと徘徊する。

だが、その国は、自分の国とは違う狂気に支配された国。

怒号、暴力、そして憎しみ。

地獄と表現しても、決して過言ではない。

だが、彼女は歩み続けた。

探し続ける。自らの半身を捜し続ける。

人々の目を眩ましている男の子を、少女がひとりで見つけられる

はずがない。

一日、一日と、成果の出ない徒労を繰り返す。

一ヶ月、二ヶ月と月日は残酷に、彼女の願いを無視し続ける。

聞こえてくるのは、彼が死んだという噂だけだった。

信じない。絶対にそれは信じない。

そんな彼女の意志とは裏腹に、噂は広がるばかりだった。

信じない。そんなことがあるものかと。

だが、男の子は見つからなかった。

その噂が、真実であるかのように。

分からなくなる。疲れている。

持ち出した貯金は底を付いていた。

被災者たちの仮設住宅で寝ることも多くなった。

まるで自分も被災者になったかのように錯覚した。

考えることを避けていた結末。

もしも、もしもこのまま一生見つからなければ、私はこのままなのだろうか？

同時にそれは、罪悪感の芽生えだった。

彼を地獄へ叩き落したのは彼女の存在そのものだった。

サンは幻視する。心の中で自分を責め続ける少年の姿を幻視する。

誰が悪い？

誰のせい？

分かっている。誰が悪いのかは分かっている。

誰のせいになければならないのか、分かっている。

——森野勇次、と。

サンは、全ての罪を父親へと、家族へと転換する。

銃を見つけた。小さな銃だった。本物かどうか分からない、ただずっしりとした重みのある金属だった。

サンはその日から、高辻日向となる。

その名は、彼女が失った半身の男の子の名前だった。

罪の話 ―高辻日向

全ての価値観が変わる。

オセロのように、白が全部黒に変わっていく。

目を背けていた罪悪感が、一気に形を成して私へと降り注ぐ。

黒い雨のように、私を黒く塗りつぶしていく。

クロとなった瞬間に、無数の憎悪が私に向けられていたことに気がついた。

足は止まっていた。出口はまだ見えない。

日向くんが生きていたとしても、私は迷宮のさらに深くへと誘われていった。

「・・・・・・・・お姉、ちゃん」

姉の、楽しそうな笑顔を思い出した。

姉妹の確執も終わり、その笑顔が再び私に向けられることだって夢想しなかったわけではない。

「お目出度いのは、私の方じゃない・・・・・・・・」

右の手の平で、両目を覆う。

「だったら、どうすれば良かったのよ・・・・・・・・」

泣き出してしまいたかった。

迷宮は袋小路だ。どこもかしくも憎しみに阻まれている。

「慶介・・・・・・・・」

そう呟いた自分が、また嫌になる。男に依存して、全てを解決してもらって、嫌なことからは目を背け続けることだって出来る。でも、慶介の優しさに取り入ることで、私は二度と自分を許せなくなるだろう。

「・・・・・・・・冒険してみたかったのかも」

「冒険ですか？」

私のアパートの前から、二人の会話が聞こえた。

「そこは、天国に近い場所だったから・・・・・・・・冒険してもいい

かなって」

「……天国、ですか」

南さんとのぞみだった。もしかしたら、部屋に帰っていないことがばれたのかもしれない。

「暗黙の了解——私は何ひとつ知らないけど、みんな辛いはずなのに楽しそうで、だから私もそんな風になれるかもしれないって」

「彼らは、本当に私の自慢の子供たちです」

「……そうですね」

そう、私は幸せだった。仲間に恵まれて、楽しい日常を送って——。

「他人事ではありませんよ?」

「えっ?」

「彼らの中には、のぞみ、あなたも混じっているのですよ」

のぞみの様子が少しだけおかしい。彼女もまた、自身の問題に直面しているのだろう。

「……」

のぞみはぼつりと呟く。内容までは聞き取れない。

「えっ、何か言いましたか?」

「何でもないですよ」

のぞみはいつも通りに笑ってみせる。のぞみは、私と違って強い。強くて真っ直ぐだ。ああやって仲間たちの為に笑うことが出来る。

その笑顔が姉さんと重なり、私には直視できなかった。

「……そうですか?」

南さんは首を傾げ、そして腕時計に目を落とす。

「……南さんは、もし、日向ちゃんを助ける為に他人を犠牲にしなければならなかったら……出来ますか?」

心臓が跳ね上がる。そこに、私の名前が出てくるのは予想外だった。

私の為に、他人を犠牲にするって、どういうこと?

「……どういう意味ですか?」

南さんが、私の疑問を代弁する様に。

「仲間が助かる為に、他人を貶めることは……罪ですか？」

「……」

奇しくもそれは、私の抱えていた罪と同じものだった。

——娘が助かるために、八十万人の犠牲を立てることは罪ですか、と。

辺りは、オレンジに侵食される。黄昏だった。まごうことなき、黄昏だった。

「罪です——」

南さんは言い切る。

そう、その通りだ。だから私は、家族を憎んだ——。

「じゃあ、何も出来ずに、仲間が不幸になるのを眺めなくちゃいけない？」

のぞみが姉さんと重なる。

「例え誰も責めなくとも、貴方の中で後悔が残るならば、それは罪です」

「じゃあ、見殺しにするんだね——」

のぞみは叫ぶ。

「でも、他人と仲間なら……罪のない他人を犠牲にしてでも助きたいでしょうね」

南さんは、落ち着いた口調で。

「だったら——」

「ならば、苦しみ続けるしかないでしょう」

残酷な答えだった。父は苦しみ続けるしかない、被害者は憎み続けるしかない。

「罪を背負い続けるしかないのです」

「……そんなの、誰も許さないよ？」

「罪が許されることなど、あってはならないことなのですよ」

そう——私が許されることなどない。私は家族を見捨てた罪に苦しむしかなくて、姉さんは私を恨み続けるしかない。

「許されないからこそ、背負い続けるしかないのです」

「・・・・・・・・じゃあ、裁判も必要なの？」

「そうじゃありません。許すのは、他人ではない、遺族ではないのです。例えば、誰かを見殺しにしたとして——その誰かはどんな人でしたか？ 家族はいましたか？ 友達はいましたか？ 恋人は？ 敵は？ その人は何を見て感動しましたか？ 何をして後悔しましたか？ その人の人生はどのようなものだったのか——。自分が貶めた人間が、どんな人間だったかを忘れないで下さい。それが、罪ということですから」

「・・・・・・・・」

——母さんは、どんな人だった？

母さんはいつも、私の近くにいた。優しい笑顔で、優しい声でいつも私を包み込んでくれた。母さんは私を助けようとしてくれた。八十万人の生活よりも、私を選んでくれた。その罪を背負ってくれた。そして彼女は、私を助けたという事実だけに許されていた——。

——私が、それを壊した。

もういい、もう何も・・・・・・・・聞きたくない。

私は、物陰から姿を現した。

「私が、どうかしましたか？」

「えっ——？」

のぞみが驚いて顔を上げる。南さんも、驚いた顔で私を見つめる。

「日向・・・・・・・・どうしたのですか今日は」

「ごめんなさい、南さん。学校を無断欠席してしまいました」

「日向ちゃん——、無事だったの——？」

「無事？」

首を傾げる。なぜか、そうやって私を心配してくれるのぞみが姉さんと重なった。

『姉も、その瞬間に壊れました——』

壊したのは、私です——。

「・・・・・・・・触らないでっ——！」

私には、その手を払うしかなかった。

「えっ——」

呆然とするのぞみ。謝りたかった。でも……眩しすぎるの。私は……私には……もう姉さんに近づく権利なんてない。

「南さん……さっきの罪の話」

「何ですか？」

「それは、自身の戒めの話であって、そこには被害者側の救済はないわ」

私がどれだけ悔やもうとも、そこに姉さんの救済はない——。

「……そうですね」

南さんは否定しなかった。まるで、事情を理解しているかのよう

に。
「だから、被害者が加害者を認めることは永遠にありえない——」
だから誰か、教えて欲しい——。

「そんな風に理不尽に大切な者を奪われたら、貴方はどう思う？
加害者をどうしたら許せるってことよ、のぞみ……」

のぞみ、姉さんに似たアナタへ。私は、どうすればいいのですか——？

「……日向ちゃん」

「気安くその名前を呼ばないでよ——」
叫んだ。

子供のように叫んだ。

「……気安くその名前を呼ばないで……」

その言葉は、とても静かに響いた。

私は、汚れている。

酷く、汚れている——。

不幸な少女 ― 森野陽子

一人の、不幸な少女がいました。

血のつながらない姉妹がいました。彼女は姉でした。血がつながってなくとも家族に愛されていました。取り分け妹には特に優しくしていました。身寄りのなかった自分を引き取ってくれた両親に対する恩返しもあったのかもしれませんが。

彼女の両親の話をする前に、針木市という街の話をしましょう。森野勇次という政治家が針木市へと移った当初、この街の政治は最悪でした。街並みは汚く、道路は狭い。税金は高くせに、その使用用途も不明瞭な部分ばかりでした。道路ばかりはやたらと綺麗でした。山岳部にはダムも多くありました。そうです、癒着政治の床代だったのです。

御座市と比べて、政治に対する知識も感心も市民にはありませんでした。関心のある人々は御座市や他の自治体へと去っていききました。だから、森野勇次は仲間たちとこの街を生まれ変わらせると誓いました。

春賀建設、大手ゼネコン企業。その一人娘に取り入って圧倒的なリーダーシップで企業文化から作業システムの改変までに着手したのは春賀晃でした。

高額の電気料金を放置し、市民の流出に関して政治が悪いと何も改善しなかった針木電力の無能な経営者たちから針木電力ごと買い上げたのは沙耶春樹でした。

この二人が市と癒着を続けようとする企業を徹底的に買収、統合し、森野勇次が改革を起こしやすい体制を徐々に整えていったのです。

税金を下げ、あらゆる価格を下げ、無駄を省くだけです。それだけで、あっという間に街は活気を取り戻していきました。

さて、彼女の両親が登場するのは、そんな代わっていく状況の時

です。

変化するというのは、必ずしも全ての人々を幸せにするものではありません。

癒着企業とはいえ、一つが倒産すれば路頭に迷う善良の一般家庭だって出てきます。

第一期市長演説の時でした。いよいよ陣頭へと立ち、これまで以上の大規模な改革を行おうとした時、彼は暴漢に襲われることになります。

結果として、それは未遂で終わりました。彼を守るSPにより、犯人は射殺されることになります。

犯人は倒産した癒着企業の勤めていたサラリーマンでした。歳は三十半ば、森野勇次と同じくらいでした。犯行の動機は、借金に頭が回らなくなったことに対する逆恨みでした。犯人は結婚の際、相手の父親から家も持てない甲斐性の男に娘はやれない、と反対されたのです。彼は色々なところから金を集め、その中には消費者金融もありました。家を買ひ、結婚し、子供を授かったところで、彼は職を失いました。妻は彼女の实家へと戻され離婚となり、莫大な借金と赤ん坊だけが男の手元に残りました。

犯人のポケットからは、コインロッカーの鍵が残されていました。丁度、庄治慶介が森野勇次と出会ったコインロッカーです。そこには、衰弱した赤ん坊が残されていました。警察は母親の手に戻そうとしましたが、母親の实家もまた、癒着企業でした。企業は倒産し、一家は既に離散し、行方しれずだったのです。

施設に預ける、その結論に達したとき、森野勇次はその子を引き取ると言いました。彼は出産を間近に控えた妻に、どうしてもこの赤ん坊を引き取りたい、私にはその義務がある、と言い張りました。妻は少し困ったように、私が反対してもあなたは引き取るでしょ？と言って苦笑しました。

——森野陽子。不幸な少女は、名前と共に幸せを手に入れたのです。いや、正確に言えば少し違います。不幸になりそうだった少女

は、その寸前で英雄に引き上げられたのです。
彼女の不幸はもう少し後、助からない体と共に、妹が生まれ
てきたときからです。

そのコインロッカーには、花束が置かれていた。普通ならば彼が
死んだ場所に置かれるだろう。

なんの感慨もない。顔も知らない生みの父親、姿をくらました生
みの母親に対する感情は何もない。ただあるのは、育ての父親が未
だに自分の不幸にしてきた者たちに対する負い目で一杯だったとい
う事実だけだ。

生真面目な父だから、仕方がなかったと割り切ることもできない
のだろう。母親を見捨てたとき、私は父を憎んだ。でも、今は憎ん
でいない。どうでも良くなった。多分父は自分が幸せに暮らすこと
すら、耐え難い苦痛だったのかもしれない。美月の父親だ、そうい
うところまでそっくりなのかもしれない。

実を言えば、美月に憎い、と言ったのも嘘だ。
どうでもいい。

今の私は、過去なんてどうでも良くなったのだ。

不幸な少女の不幸が始まりました。

生まれてまもなく、彼女の妹は先天性の遺伝子疾患であると診断
されました。視力の低下と皮膚癌の発生率が高いこと。それは紫外
線をから体を守るメラニンがない為です。

少女の肌と髪は真っ白で、目は鮮烈な赤色でした。まるでウサギ
みたいでした。

妹は、幼くして、皮膚癌を患いました。五歳を迎える前に余命を
宣告されました。二桁の歳を生きれるかどうか、と。

両親は泣き崩れました、どうしてこの子が、と。神様は理不尽で
す。無差別に人々に不幸を投下していきます。

——娘を助ける手段はある。

だから少女の家族は、悪魔に魂を売ってしまったのかもしれない。

悪魔というと、幻想上の存在であると認識するでしょう。でも違います。悪魔とは人間のことなのです。コキュートスはこころの最下層にあります。サタンが眠る九層の地獄の最下層。それは、人の心の一番奥底だったのです。だから、誰も気づかない。そこにたどり着いた者を除いては――。

沙耶春樹という男は、そこに辿り着いた者の一人だったのでしよう。

コキュートスとは地獄の一番奥底を流れる川、嘆きの川と呼ばれていて、そこに悪魔が氷漬けにされていると言います。

――娘を助ける代償に、あなたは八十万人の生活を犠牲に出来ますか？

沙耶春樹は、森野勇次の中に眠る悪魔の氷を溶かした。

罪は始まる。

長い長い、悪魔との戦いが始まる。

でも、その手段だけが、家族を幸せに出来る唯一の方法でした。泣き崩れる妻を横目に、英雄は悪魔に魂を売ることを決意します。

不幸な少女は、それがとても嬉しかったのです。

彼が行う行為は、けして許されるものではない。しかし、市長としてではなく、父親としての決断をしてくれた父親は、彼女の中でも眩しい希望でした。

彼女は妹のことが好きでした。

だから、その妹を救えることに、八十万人の犠牲を納得できたのです。

……そして彼女は、その妹に裏切られました。

その妹が、彼女の家族を滅茶苦茶にしまったのです――。

「……よく慶介を止めてくれた、感謝する」

私の心は、歓喜で塗りつぶされていく。

振り返れば、無表情な恭介さんが立っていた。全然嬉しそうに見えないのに感謝するとか、この人は本当に面白い。

「えへへっ、どんどん褒めてくれていいよ？」

「よくやった」

無表情のまま、私の頭を撫でる。彼は本当によく分からない。ただ分かることは、私を含めた森野っていう一族を本当に憎んでいるということだけ。

「はははっ」

私はそれでも笑う。それでいいんだ。

恭介さんがそれを求めるなら、それでいいんだよ――。

不幸な少女は、どうしようもなく不幸になりました。

妹が、家を去りました。搜索願を出しても、ブラック・マンデーという事件に忙殺されている治安組織に割くことができる人員はほとんどありませんでした。

そして、彼女の発した最後の言葉が、家族の心を滅茶苦茶に切り裂いてしまいました。

――ひとごろし、と。

その日から、母親の精神は病みました。人形を妹に見立てて、まごをするようになりました。その姿を見た父親も徐々に疲弊していき、家に帰らなくなりました。

不幸な少女は、壊れた母親と家に二人っきり。必死に母親を支えようとしたが、彼女もまた徐々に精神を病んでいきました。そして、壊れた母親が彼女の顔を掴み、妹の名前を呼んだときに、彼女を支えてきた何かが決定的に折れてしまったのです。

折れてしまったのものは、「家族」という二文字に集約される希望でした。希望は呪いになりました。家族という彼女が手に入れたはずの希望が呪いとなり、彼女の精神を蝕んでいきました。

彼女はもう疲れてしまいました。もういい、家族なんてもういい、と。いらぬものだ。思い返せばメッキだらけの思い出でした。

妹に余命を明かさずに、ひたすらに甘やかして、笑ってくれれば彼女は生まれてきて良かったと欺瞞した。彼女の為に八十万人の犠牲を払ったこともひた隠し、元気な妹を見て彼女は救われたのだと妄信した。思えば一方通行ばかり。ちぐはぐな幸せでした。

——だったら、もういいだろう？

少女の前にも、コキユートスへと辿り着いた者が現れ、手を差し伸べてくれました。

加藤恭介といいました。沙耶春樹とは違い、一目で悪魔に魂を売り渡した者だと分かりました。くすんだ目をしていました。疲弊して逃避するような弱さではなく、だが、感情もなくただその眼差しは真っ直ぐ、機械のように少女を見据えていました。

彼はただ一言、お前を救ってやる、と端的に言いました。どうするつもりなのかは分かりません。なぜこの男がこんなことを言うのか、少女の何を知っているというのか。だが、少女にとってはそんなことはどうでも良かったのです。少女はただ、その一言に頷きました。

彼がしたのは簡単なことだったでした。麻薬のマーケットに手を出した同世代くらいの少女の死体を燃やし、妹の身分証明書と一緒に埋めただけ。そして通報します。登山コースのわき道で犬が掘り返してたら、山に人間が埋められていた、と。

そして、不幸な少女の妹として、死体は回収されました。当然のように、それは壊れた母親の耳にも伝わります。警察の見解では、暴力団の事件に巻き込まれたのではないか、ということでした。家出少女にはありがちな最期だったのかもしれない。

その報告を聞いた時、母親は一瞬だけで正気に戻ったようでした。そうですか、と短い言葉を発して、あとはただ俯くばかりでした。そしてその晩、大量の睡眠薬をアルコールと共に服用して、彼女は自殺しました。

父親もそのニュースは耳にしているでしょう。彼がどのように思い、どのように嘆いたのかは分かりません。だが、それももう、ど

うでもよくなりました。

不幸な少女の不幸は、ここでお仕舞いです。

——めでたし、めでたし。

盲信 ―高辻日向

ここに來たのは、何日ぶりかくらいだ。

夕陽を真つ向から浴びて聳え立つ防護壁。

この先には、放射能汚染を受けた死の地――御座市が広がっている。

壁一面に描かれているグラフィックアートを見るに、このただっ広い夜は少年達のたまり場になっていて、あまり治安はよくないのかもしれない。

目を閉じて、自分の命と引き換えに閉ざされた世界を思うと、脳が軋んだ。

誰も知らない、責める者のなき罪――。

だから、自らが裁くしかない。

――許さぬように。

複数の足音に目を開ける。

夕陽を背に姉さんが立っていた。

大柄の、厳しい顔つきの男達を連れて――。

「・・・・・・・・」

前は男たちに、後ろは壁に阻まれて、逃げ場はない。

逃げ場がないのは、この世界と仕組みだと嘯きたい気分にな、たまになる。

でも、逃げ場のない悪夢にしても、これは度を越えて悪趣味だ。

姉さんは、手に握った凶悪な鉄の塊をこちらに向けて笑っていた。笑顔でも嘲笑でもない、慢性的な諦念に満たされた表情。

絶望の笑みを向ける。

「こんな姉さんは、軽蔑するかな？」

「・・・・・・・・質の悪い冗談ですね」

「確かに、冗談だったら悪質すぎるよね」

たった一人の女の子を相手に、群れで囲い、そのうえで銃を突き

つける。

悪趣味以外の何ものでもない。

「今の私にはね、ちょっとだけ父さんと母さんの気持ち分かるの」
「思いもよらないことを言う。」

「愛しているなら――、全てを犠牲にする覚悟がいる。愛くれるなら――、どんなに汚れることも厭わない」

銃のクリップを両手で支える素人臭い姿。

でも、銃口に震えはなかった。

何度も考え、吟味し、それでも、出てきた言葉はありふれたものだった。

「これは、どういうことですか？」

「学校の落書き事件」

知っている。

なのに、繋がらない。

「私たちの、仕業だったりするワケ」

「姉さんの、仕業・・・・・・・・・・」

「うん」

「桜井、要じゃなくて？」

「桜井要は・・・・・・・・・・私たちの仲間なの」

「・・・・・・・・・・」

――桜井要は、組織についた。

それが、加藤恭介と繋がる。

春賀、森野、沙耶、塚本――、その全てに復讐する為に。

「今頃気づいた？ バカね、恭介さん言ってたでしょ？ 復讐するって」

「・・・・・・・・・・」

「恭介さんはね」

ここに姿のない男の事を告白する。

「私を、許してくれるたった一人の特別な人なの」

「・・・・・・・・・・そう、ですか・・・・・・・・・・」

交感神経が極端に刺激されている。

思考がパニックを起こしている。

何かを考えることも億劫だ。

「美月だって、私に残されたたった一人の家族だよ？」

ええ、私にとっても……、たった一人の、大切な姉さんです。

「でも、今度こそ失いたくないの。もう、存在を否定されるのはウンザリなの……。それに、オンナなら分かるよね？ 惚れたオトコをどんな形であれ、繋ぎ止めたいって……」

「そんな一方通行の偏愛……健全じゃない」

「健全？」

おかしそうに笑う。

「私のアタマ、とつくに壊れちゃったんだよ」

右手で銃を向けながら、左手で自分のこめかみを打ちぬく仕草をする。

ああ……。そうか。

壊れてしまったのは、母さんだけではなかったのだった。

私の言葉はもう、姉さんには届かない――。

それが、悲しくて仕方がなかった。

「ようやく……。気づけたのに」

「気づけた？」

「私は……。姉さんのことが好きでした。だからこそ嫌いになった。そのパラドクスが私の中で矛盾として認知されたから、私は姉さんのことを憎むとき、いつも焦燥感に駆られた」

「……。嬉しいね、マイ・シスター」

認めることで、ようやく前に進むための光が見えたはずだったのに――。

「……。どうしてっ」

この光景は、一体、なに――？

「ごめんね……。折角好きって言ってくれたのにさ、こんな

やり方しかできなくて。本当に最低だな。お姉ちゃん失格だ」

「私に、何をさせたいの……」

声が、震えた。

「お父さんを殺して」

平然と姉さんは告げる。

「……殺す？」

「慶介くん、高辻日向はね、復讐に失敗したんだよ」

「……復讐って」

——アイツは、一体何を？

「慶介くんはね、ずっとお父さんを憎んでいたの。彼は知っていた。森野勇次がブラック・マンデーを裏で糸引いてたことを、ね」

「……」

「でも彼は、最後の最後で結局引き金を引けなかった。彼は結局優しいままだったんだ。日向くんのままだったんだ。だから、消されるの——」

彼女の言葉が、理解できなかった。

「なに、それ……」

「失敗した人間を野放しにするほど、加藤恭介という人は甘くないよ？」

周りを囲む男たちの視線は、洗練された軍隊のようでもある。

感情なく自らの仕事をこなすかのように、そこらのチンピラとは一線を駕している。

「——それで、どうして私なのよ」

「お姉ちゃんからのお願いだよ。慶介くんの代わりにお父さんを殺してよ」

「どうして慶介にそんなことを！ 復讐なんて囁かなければ、そのまま幸せになれたかもしれないのに——」

「幸せになれたから、でしょ？」

冷たい物言い。

「いい夢見させたんだからそろそろその分働いてもらいましょうっ

てのが上の考え」

「・・・・・・ノーって言ったら？」

「彼らと友情ごっこを続けるってこと？」

「ごっこじゃない・・・・・・」

けして、ごっこ、なんかじゃない。

「どっちにしろ、ノーならここで死んでもらうしかないね。もちろん、慶介くんにもね」

決定的だった。

「酷い姉だって、思ってくれていいよ」

「ですよ。憎い妹なら・・・・・・簡単に殺せますよね」

「違うよ、本当に、好きだよ、美月」

優しい口調で。

「でも、裏切ったのはアナタだから、借りは返してもらおうよ？」

泣きそうな口調で。

「恭介さんの願いはね、あなたに父を殺してもらうか、消えてもらうかしかないの。強引なことはあまりやらない方がいいし、あなたのことを殺したくないんだけど、ノーというなら殺さなくちゃいけないの」

「殺さなくちゃ、『いけない』、ですか――？」

「だって、彼がそう望むもの」

「利用されてるだけじゃない――っ！」

叫ばずにはいられなかった。

「あのオトコが姉さんにどんなことをしてくれたのかは知らないけど、好きな人にそんなことをさせるわけじゃないじゃない――。都合のいい駒にされてさあ！」

「そだよ、知ってる」

「だったら！」

「だったら、美月がそこで自殺してくれる？」

「なっ・・・・・・」

「いいんだよ、都合のいい女で。駒でも、淫売婦でも、なんでも。」

恭介さんがそんな私を必要としてくれるなら、私は何でも差し出す
絶望的な論理構成だった。

「身体だろうと、心だろうと、友達だろうと、肉親だろうと」

「それが……誰かを生贄にするようなことであってもですか」

「言ったよね？ 今なら、父さんと母さんの気持ちが分かるってさ。
その為なら、八十万人の命だろうと差し出すことが出来るの」

姉さんの語る恋愛は、狂信者の祈りのようでもあった。

「恋愛じゃなくて、宗教じゃない……」

「言い得てるよ、妹を失い、両親を失った私にとっては、彼の存在
だけが唯一の救いだった」

神無き世界にもたらされた、人為による、策略的な唯一の救い。

「恭介さんという神様に、救われたんだよ——」

彼女の愛情は、あまりにも重すぎた。

「そんな私が、今さら倫理とか道徳を振り回せると思う？ 出来る
わけじゃないじゃない。そんなものの振り回してしまえば、私は再びあの
薄暗い日々に戻るんだよ」

「……」

「もういいでしょ、美月？ あなたの姉はもういないの。そう思っ
たほうがずっと楽でいい。さあ、返答を聞かせて。イエス、オア、
ノー？」

「……」

「さあ——！」

覚悟しなければ、いけない時が来た。

綺麗な、夕焼けだった。

まごうことなき、黄昏。

世界の、終焉の始まりだった。

家族を不幸にした罪の返済が、求められたのだ。

私の中で、何かが砕けた——。

願望 ― 庄治慶介

本当に俺が欲しかったものはなんだったのだろうか。

父と母を殺した、クロさんを狂わせてしまった森野勇次への復讐だったのだろうか。

それとも、久たちと過ごした暖かくもどこか不安定な日常だったのだろうか。

美月、陽子と共に過ごした幸せな過去だろうか。

掴んでは手をすり抜けていく。全てが手をすり抜けていった。

手の平はあまりに小さい。たった一つも持つことが出来ないのかもしれない。

――僕たちは、傲慢すぎる。

その通りだ。何も出来ないガキだ。身体がでかくなっても、この通り無力なガキだ。

でも、欲しいものがあつた。

もしも、もしもだ。

この世界に神様がいたとして。

たった一つだけ願いを叶えてしてくれるとしたら、お前は今何を望む？

俺は――。

冷たい床の感触だった。辺りは薄暗く、埃臭い。

手を動かしてみた。特に縛られてるわけでもないらしい。

生きてるじゃねえか。

散々人のことを言いながらクロさんも甘いな。

――クロさん、その名前を思い出すたびに優しかった昔のクロさんを思い出して首を振る。

答えは決まっている。

もしも、たった一つだけ願いが叶えられるとしたら――。

俺は、何が何でも美月——日向を助ける。

死ぬまで続けてみせる。庄治慶介を死ぬまで続けてみせる。

そう決意した時、場違いの電子音が流れる。携帯電話の着信音だった。

表示された名前は、久だ。

「もしもし」

「慶介、今どこにいる？」

「分からん、倉庫みたいな場所だ」

「何をしているの？」

「森野勇次を殺し損ねた」

「・・・・・・」

押し黙る。

「下らない事は止めることにした」

「それは、日向の為に全てを諦められるってこと？」

「そうだ、死ぬまで続ける。お前らとの日常を俺は死ぬまで続ける」

「本気で？」

「今度は、本気だ——」

「はははっ・・・・・・」

「何が可笑しい？」

「はははっ・・・・・・、ごめんごめん。やっぱり慶介は、僕たちの希望だ」

「もっと褒めろと言いたところだが、そんなワケで俺は目下拉致されている。日向が誘拐されたとか騒ぎながら、俺が誘拐されちまったわけだ」

「そのようだ、倉庫街だね」

「分かるのか！」

「GPSだよ」

さすがだ、頼りなる。

「頼む、助けに来てくれ！ オレは！」

「そのつもりだとも、マイ・心のフレンズ」

ガキッ、という凶暴な音が電話越しに聞こえる。なぜか、嫌な予感がした。

「・・・・・・・・お前、何をしているんだ？」

「いやあ、慶介の單車だけど、直結とかしたら動くかなってさ。原付みたいにハンドルあたりをぶち壊して——」

「ま、待て貴様——！」

素人がそんなことをするんじゃない——！

「それ！」

久の掛け声と共に一層凶悪な音が響いた。

「あっ・・・・・・・・」

「ちよっと待て！ そのあっ、って何だ！」

「はははっ、気にしない、気にしない」

「俺のバイクうううう——！」

心の叫びだった。

高かったんだぞ、畜生・・・・・・・・。

「お前、俺の部屋の前にいるってことだろう、スペアキーは机の一番上の引き出しの中だ、頼むからそれで動かしてくれ・・・・・・・・」

「そういうことは早く言ってよ」

ぬけぬけと。

「貴様がその前に直結しようとしたんだろうが！」

そう言えば、下らない話をしている場合じゃなかった。

「久、恭介の動きは分かるか？」

「分からない。ごめん、しばらく乗っ取られてたから」

「乗っ取られていた？」

奇妙なことを言う。

「暗黙の了解、全部終わったら話すことにしよう。本当の友達になるために——」

「・・・・・・・・」

言いたいことは分かる、だが——。

「ソイツは取り消せ」

「えっ？」

「俺たちは、本当の友達だ。ただ、友達に隠し事をしたくないから言うだけだ」

「・・・・・・そうだね」

「話を戻すぞ。お前なら、森野勇次を殺すならどの舞台を選ぶ？」

「それって、慶介以外の誰かを使うってことかい？」

「日向だ」

「なるほど、そういうことか・・・・・・」

含みのある物言いだった。

「何か知ってるのか？」

「・・・・・・」

久は一泊置いて。

「慶介、僕はね、ずっと森野陽子を疑問視していた――」

「何？」

予想外の言葉だった。

「ビリヤードのとき、彼女の位置からだけは日向が確認できたはずだ。どうして彼女は日向に見せ付けるように腕を絡めたりしたんだろうね？ キスだってそうだ。僕も始めからいたけど、遠くから彼女を観察することにした。案の定、彼女泣き叫ぶ前に笑ってたよ。誰にも気づかれない程度だけだね」

「そんな馬鹿な――」

信じられない――。

「慶介、森野陽子は敵だ――」

嘘だ――。

「慶介」

「そんなはずはない、だってアイツは、いつだって妹に優しくして、妹を一番に思ってた、そんなヤツがどうして――」

「変質させたはずだ。ブラックマンデーは、あらゆるものを歪めたはずだ」

「っ――」

「森野美月は加藤恭介に使われている。ただそれだけの話だよ」

「なっ、にを……」

「さあ、十分で行く。電話切るよ」
通話は切れる。

ダメだ……。呆然とするんじゃない！

今はとにかく……。美月を……。

「庄治慶介、目を覚ましたか？」

厳つい男たちが倉庫に入ってくる。光が差し込み、思わず目を細めてしまう。

微かに見えた景色は、海だった。

「ここは、どこだ？」

「南国港の倉庫だ」

「南国港？」

針木市のはずれだ。随分と遠くまで運ばれたようだ。

「中国にでも輸出するつもりか？」

「今からお前を市外へと送らせてもらう。そうして関西圏へと送り、お前は逮捕される手はずだ」

「なんだと？ 逮捕？」

「お前は麻薬ブローカーとして逮捕される。だが未成年だ、すぐにシャバに出られるだろう。お勤めを果たした後は、恭介さんがお前に貯金を残してくれている。それで、その土地で暮らせとさ」

何だそりゃ？ 結局クロさんは、俺を気にかけてるってことかよ。

「加藤恭介も随分と甘いな」

「俺たちもびっくりしている。顔色を変えずに人を殺すあの男がどうしてお前だけは助けるのか。お前はどうかやら加藤さんのお気に入りのようなな」

「そうそう、加藤恭介といえば――」

思わせぶりの口調で、全てを知っているように演出する。

「森野陽子は美月に接触したのか？」

男たちの動きが止まる

「したんだな？」

カマをかけ続ける。

「貴様、森野陽子の目的に気づいていたのか？」

——やはり、そうだったのか。

「なぜ、森野陽子はそんなことをする？　アイツの姉じゃなかったのか？」

男たちは、馬鹿にするように笑った。

「お前、あの女のことを知らないのか？　あの女はイカれている。加藤恭介の信者だよ、あの女は。加藤さんが股を開けと言えばあの女は股を開く。死ねと言われれば死ぬ。殺せといわれれば殺す。取り分け色狂いってところか」

今度こそ、言葉を無くした。

「まあ最後だし教えておいてやるよ。あの女は自分の母親を殺したようなもんだ。どうやったら自殺に追い込めるかよく知っていた。それを的確に加藤さんに実行してもらい、あの女は精神を病んで自分の母親に止めを刺して自殺に追い込んだんだ」

「もういい、黙れ——」

「何？」

「俺の前から消えろ、クソ野郎共——」

俺を囲む男たちの雰囲気が獰猛なものに変わる。

「お前はこれから船に乗るんだよ、舐めたこと言ってるじゃねえ——グッ」

言い終わる前に男の膝に体重をかけるように蹴りを入れた。

手加減はない、完全にブチ折ってやるつもりだった。

「あああああ——」

男が崩れ落ちると瞬間に走る。

「なっ——」

男たちの反応が遅れる。だがそれも一瞬。

「テメェ——」

「ガッ——」

倉庫を出る瞬間に脇腹に蹴りを入れられた。そのまま飛ばされるように俺の身体は倉庫の外へと転がった。

ヤバい。骨がイッたかもしれないねえ――。体格通り、とんでもなく暴力ってヤツに慣れてやがる。

「手を煩わせてんじゃねえぞ、このクソガキが！」

蹲る俺に蹴りを浴びせる。手加減のない暴力だった。渾身の力で爪先が叩き込まれ、その度に激痛に意識が遠のきそうになる。

クソ――ッ。どうにか、どうにかしねえ・・・・・・・・と。

顔面に爪先が当たり、鼻が鉄の臭いで埋め尽くされる。目の前で星が飛んだ。

あッ――、マジでヤベェ・・・・・・・・。

意識が飛びそうな瞬間に――。

「おしゃべりは終わりだよ！ 今から俺たちと船に――グガッ」

暴力が突然途切れる。複数の男に囲まれていたはずなのに。

目を開いてみる。

「ああ、ついつい跳ねちゃった。可哀想に、中型に跳ねられたからきつと痛いだろうね」

厳つい男たちに囲まれているのに、久は緊張感もなく笑っていた。

「・・・・・・・・何だお前は」

十メートルほど飛ばされた男の凶暴さは消えることなく、久を捕らえる。

「逃げ、ろ――」

「ウェイ――」

だが久は堂々と答える。

男たちの様子が変わる。凶暴さは消えて、まるでうろたえる様に。

「き、貴様が？」

「分かったら消えなよ。沙耶春樹の使いだ」

俺は呆然とするばかりだった。そんなに、沙耶春樹という名前には力があるのか？

「久・・・・・・・・」

「慶介、随分と男前な顔してるじゃない。でも、時間がない。急ぐよ？」

「ウルセエ、って時間がないだど？」

「舞台の幕はすでにあがっている。選挙最終日の今日、市民館で行われる演説会場だ。狙うなら外だろう」

「そのノーヘル——！」

ファンファンと、パトカーの音が響く。

「あ、やばい。早く出して慶介」

いつの間にか久は、後部座席に移動していた。

「お前、何をした？」

「道路交通法を少々」

「やっぱりテメエが一番油断ならねえ——！」

「いいから急いで」

「イエス・サー！」

「こらっ、大人しく捕まりなさい——」

バイクを発進させた。

「さて、盗んだバイクで走り出しますか」

久はいつも通りにそんなことを言う。その態度に、救われた気持ちになった。

「俺のバイクだ、バカ野郎——」

希望 — 庄治慶介

「お前……、こんなこととして、お前の方はいいいのかよ？」
後ろに座る、久の表情は分からない。

しばらくの沈黙の後――。

「絶望的だったよ……」

「……久？」

日はすでに堕ちかけている。

長い夜が始まろうとしていた。

「結局僕たちは……正解を選べなかったんだ」

「何？ お前……まさか諦めたとか言わないだろうな？」

「まさか」

「俺も今から日向を助ける――」

「日向――？」

久は不思議そうに。

「それは、誰のこと指してる？」

「えっ――？」

真底不思議そうに。混乱する。

「そんな人、本当はいらないのかもしれない」

真っ白になる。

頭から言葉が掻き消されていく。

「高辻日向は、十年前に死んだ。それが、この世界が刻んだ事実でいいと思う」

「何を言ってるやがる――」

「僕は、そう思うよ」

淡々と語る久の声。

「そんなこと聞いてんじゃねえ――！」

「重要なことだよ」

「高辻日向は――！」

叫ぶ。

「その名前があるから……君たちは正解を選べなかったんじゃないかなってね」

「……………」

久は、寂しいことを言う。

「もし、俺が高辻日向を捨ててしまえば、森野美月が高辻日向であることを捨ててしまえば……………」

情けなく、尻すぼみな言葉。

「仲間になれたかな？」

「……………久」

「だったら、僕たちは五人だったのかもしれない」

「だが、俺たちは今、七人だ——！」

「でもキミは、それを六人にしようとした。そしてそれは……………僕も同じだ」

「……………それは」

言いよどむ。

「今ならば分かる、始めから手を取り合えばよかった。自分ひとりで背負えるなんてとんだ傲慢だったってね」

「……………」

久の言葉に耳を集中させる。

「僕たちにとって、仲間の定義はとてつもなく重い」
言葉を失う。

「仲間って言っても色々あるよね？ お互いを信頼しあい、そこには嘘や隠し事のない絆から、上辺だけを取り繕った皮膚1枚の絆まで、本当に、色々だ……………」

「それがなんだよ」

「僕らは、どっちだった？」

「……………」

「後者であったことは、慶介も認めるよね？ なのにな、それがあまりにも重たかったんだ」

「・・・・・・・・・・はは」

認めるしかない。

「だからこそ、仮初の樂園は終わりを迎えたわけさ」
乾いた笑いしか出てこない。

「大切でも仮初だから、友達には成り得ないのだから」
笑うしかなかった。

「希望と言うのはそういうことだよ慶介。手を結ぼう。暗黙の了解を七人で結び合おう」

久は、そう断言する。

「・・・・・・・・・・だから、助けに来てくれたのか？」
有難かった。

「運命を共に、そして進むんだ」

「・・・・・・・・・・なんだそりゃ」

「だから、まずは皆で高辻日向を救済しよう」

「日向、アイツは・・・・・・・・・・どっち求めているんだろうな」

「高辻日向か庄治慶介か、かい？」

「ああ・・・・・・・・・・」

俺はどうあるべきだったのか。

「お前は仮初というが、本当に嘘や隠し事があるのはいけないことなのか？　それがあれば全てを否定しなければいけないのか？」

「違うよ・・・・・・・・・・」

「何が違う？」

「彼女を否定したのは、慶介だ」

「・・・・・・・・・・何を、言っているんだ？」

「俺がいつ、アイツを否定した？」

「彼女が高辻日向であることを否定したのは、君のほうなんだよ」

「だから――！」

「君の行動は、紛れもなく高辻日向を否定した」

「――！」

久の、責めるような声だった。

「高辻日向としての彼女を否定して、君は彼女に森野美月であることを望まなかった……」。慶介は、一体何がしたかったの？」
静かな口調が、静かなまま威圧感を増していく。

「高辻日向と共に過去から逃げたかった？ それとも森野美月と共に過去に囚われたかった？」

「それは……」

高辻日向とは、彼女にとっての過去の象徴。

それは——矛盾だ。

当事者である彼女を蚊帳の外にするということ。

過去に進もうとする彼女を、一人未来へと逃がすことなど出来るはずがない。

「逃げるということは、君が持つ過去を全て捨てることだよ。思い出も、憎しみも、決意も、失ったままで未来へと逃げるんだ。それはとても強いことだよ。過去とは自分の軌跡だ。それを捨てることは自分を否定することに他ならないからね」

高辻日向のまま彼女を逃がすことなど、出来るはずがなかったのだ。

森野美月を、肯定しなかったから。

久は続ける。

「慶介にそんな強さはなかったでしょ？」

サイドミラー越しの、揺るがぬ久の眼光に思考が混濁する。

「彼女は、際限なく全てを憎むしかなかったでしょ？ そんな彼女が、一人だけ未来へと逃げるなんて選ぶはずがないんだ」
ぐるぐると。

「慶介は未来を選ぶ強さが無い。それならば——」
「……」

「——君たちに未来は選べない」

言葉と感情が渦巻き、徐々に追い詰められていく。

「この世には、選べないとか比べられないという言葉で絶対に誤魔化していけないことがある。そんな二者択一の選択の瞬間が、世界

にはあるんだ。前か、後ろかなんて選べない。って慶介は言うつもりかな？」

「未来か、過去か……」

「でも、時間は待つてはくれない。どちらかを選ばなければ、君は現状維持を繰り返すしかない。だが、現状維持は彼女にとって苦痛以外の何物でもない。……真っ直ぐであることを望む彼女が、そんな回答を選ぶことは出来ない」

分かっていた。

「だから慶介にとっても、選ぶということ、その行為自体が正解だった。——彼女を連れて過去から逃げるか、彼女と共に過去へと沈むか……」

「……」

「だから物語は、前へと紡がれ始めたんだ——」
はっ、とする——。

針木市のセントラル街に辿り着く。

瞬間、エディフィスタワーの街頭テレビが、よく知る名前を映し出した。

選挙の立候補者の名前だ。

次に演説する政治家の名前が映し出される。

「……まさか」

その高層ビルの下で、加藤恭介はこちらを見ていた。

「僕は願っているよ」

久は眩き、信号待ちで止まるバイクから降りた。

「久？」

「テレビのイディオット・カードは、けして正解を教えてくれない。製作者に都合のいい答えしか提示してくれないんだ」

喝采が起こる。

本命の政治家である。

「君は、それを鵜呑みにした」

——森野、勇次。

「だから、僕は願っているよ。このゲームで、君が正解を選べることを……」

「ああああ……」
理解する。

それは思考停止だ。悪を設定して盲目的にそれを憎んだ俺の過ちだった。

「……庄治慶介はディフェンスに徹するべきなんだ」

久は笑った。

——選べるのは、未来だけだ。

「どうするつもりだ——！」

加藤恭介は驚きの表情で久と俺を見る。

「慶介、急げ——！」

久が叫ぶ。

「……お前は」

「僕は？」

「お前は……友達だ！」

「だから、願うことにした。今度こそ、君が間違えないことを」
バイクのアクセルを開ける。

「お前は本当に、クソみたいな友達だ！」

エンジンの轟音が当りに響く。

もう時間はない。森野勇次の演説が始まる——。

——幸運を。

エンジンの音に混じり、久の声が聞こえた。

俺は、エディフィスタワーを後にした。目指すは目の前、市民館だ。

敵対 ―ウエイ

「アイツ――、性懲りもなく――！」

加藤恭介。

彼が焦るのは珍しい。

焦って市民館へと向かおうと駆けて行く。

庄治慶介と加藤恭介。

彼らの心はすれ違っている。

加藤恭介がそう望んだからだ。

「止まってもらえるかな？」

オレは行く手を遮る。

「どうしてだ？ 貴様はアイツの親友だったはずだ。そのままアイツは、日向は助かるはずだった。分かっているはずだろう、貴様。これから森野美月は壊れる。それを目の前で見せることになるんだぞ！」

「クールな加藤さんらしくない」

小馬鹿にするように。

「そうやって慶介の前でも感情的なアナタを見せてあげればよかったのに。慶介は辛かったはずだよ、狂っているアナタを見るのが……」

「黙れ――」

「狂ったフリをしていれば、例え裏切られても落胆はないから。実はまともなアナタに裏切られるのは絶望的だからだ……」

――加藤恭介は、狂ってなどいない。

彼の本音はいつでも彼の口から洩れていた。

庄治慶介を巻き込みたくない、と。

「そこをどくんだ――。邪魔をするならば貴様でも容赦しない」

「そう」

ポケットの中で握っていた折りたたみ式のナイフを出してみせる。

そして、静かに目を閉じる。

「……お前は——」

恭介は呟く。

「当たり前だよ」

そして、唇を歪めて笑う。

「オレはね、キミにも興味があったんだ。スクラップの心で絶望を
必死に憎悪へと代えて稼動した人間、黒瀬智也」

「ウェー——」

「魔女からの伝言だ、しばらくオレと遊んで行けってさ。アイツも
分かってきたじゃないか、人間何が一番堪えるかってさあ」

慣れた手つきでナイフを握りなおす。

それを見た群集から悲鳴が上がる。

「……お前、正気か？ こんな往来で騒ぎを起こせばどうなるか分
からないはずはないだろう？」

「オフ・コース。オレ達は時間を稼ぎたい。オレはキミと遊びたい。
キミはどちらにしろ足止めされる」

「……」

忌々しそうに、加藤恭介は携帯電話を取り出す。

「ああ、残念だよ。そうなるよね。ここでドンチャンするのは目立
ちすぎるからね」

だが。

「陽子、俺だ。今そちらに——」

加藤恭介の言葉が途切れる。

「ははっ——。どうかしたかい？」

加藤恭介の携帯電話からは、無機質な機械音声が流れるばかり。

「……これは敵対行為だ」

「敵対行為？」

ナイフを弄びながら。

「自分だけ大切なものを差し出さないのはずるいじゃないか。オレ
達は春賀のぞみを差し出した。だったらキミも、大切な人間を差し

出すのが筋というものだろう？」

「……貴様は」

「それが嫌なら、排除すればいい。敵はたかだか子供二人だ。殺すのは簡単だ、自分のことさえ顧みなければね——」

「……くっ」

「そしてキミは、それが出来ない。キミは大切なものに順位をつけているからね。だから一番以外は切り捨てるしかなくなる。だってら初めから、中途半端な優しさで庄治慶介を救おうとするべきじゃなかった。いい加減キミは、覚悟を決めるべきだよ」

ナイフを、加藤恭介に突きつけた。

「……」

後は、沈黙が流れるばかり。

——選べるものは、限られている。

憎しみと折り合いをつけることが出来なかったオレ達ならば、なおさらね。

その姉妹は ― 庄治慶介

その姉妹は、いつも手を繋いでいた。

時には姉が引っ張っていくように。

時には妹が寄り添うように。

生まれた時からそうやってきた。

――それは。

それは、姉妹だったからだろうか？

姉が拾われた負い目を持っていたからだろうか？

妹が長くない体だったからだろうか？

いや、理由はきっと大切じゃない。

ただ、繋がれた手の暖かさを共有する。

そうして微笑み合う。

笑えば、心も温まる。

世界が暖かいブランケットに包まれる。

お互いを思いあっているからこそ、包まれる。

そう、思ってきたつもりだったのだろう。

姉妹は、いつだってそうやってきたのだから。

でも、繋がれた手は離された。

どうしてだろうか？

お互いを思いあってなお、それでは足りないというのだろうか？

それとも、互いを思いあっているからこそだろうか？

それとも、その思いは一方通行だったのか？

・・・・・・。

姉が取ろうとした手を、妹が払った。

妹が伸ばそうとした手を、姉が拒んだ。

払われた姉は悲痛の表情で。

拒まれた妹は絶望に包まれた。

当然だ。

本当に痛い。

叫ぶことも、泣くことも出来なくなるくらい。

どこか歪な姉妹だった――。

好意がいつも、一方通行ばかりで・・・・・・・・。

しかし、分かることだってある――。

姉妹は、間違いないお互いを想いあっていた。

例えそこに理由があっても、お互いを憎みあう理由があったとしても、だ。

手を払った妹は、きつとそれ以上に痛かった。

妹を拒んだ姉は、きつとそれ以上に悲しかった。

だって・・・・・・・・そうじゃないか。

妹は甘えん坊じゃないか。

いつも・・・・・・・・姉の手に縋っていたじゃないか。

そして姉は、本当は妹の存在に救われていたじゃないか――。

本当は――。

本当は、美月は――。

――陽子に止めて欲しかったんじゃないのか？

本当は、陽子は――。

――美月に拒んで欲しかったんじゃないのか？

「なのに、どうして・・・・・・・・？」

どうして、すれ違う？

それは・・・・・・・・どこから間違えた？

ならば、行かなければならない。

友の期待に答える為に。

今度こそ、間違えないために――。

「わたしがあなたに望むのはひとつだけだよ――」

大ホールへと続く廊下に、彼女は立っていた。

「陽子・・・・・・・・」

「それ以外に望むことは、もうないの。わたしが本当に望むものを、あなたが与えることはないから・・・・・・・・」

それは一体、何だったのだろうか。俺には分からなかった。

「だから、せいぜい苦しんでください。自分の無力さを呪い、罪悪感に苛まれながら部屋の隅で膝を抱えてください」

慇懃無礼に。

「お前は、何を苦しんでいるんだ？」

「あなたにわたしを救うことなんてできない」

「だから、踏み込むなと？」

「できっこないのだから……」

寂しそうに笑う。

「そして——苦しみぬいた後は、忘れてください」

「どうしてお前は、森野勇次を殺すことを止めた？」

「……」

「今のお前は、加藤恭介の信者じゃなかったのか？」

「ねえ、踏み込まないでよ。美月すら救えなかったクセにさ——」

「断る」

一歩陽子へと踏み出す。

陽子は、困ったように溜息をつくばかり。

「——わたしはキミのことが好きでした」

踏み出した足を、止められる。

「でもキミはね、私の側にいなかったの」

声は淡々としていた。

「一番苦しいときに、一番寂しかったときに、一番側にいて欲しかったときに、キミはいなかったんだよ——」

泣きそうな声で。

「だから、加藤恭介を妄信したのか？」

「そうだよ、恭介さんしか、私にはいなかったんだよ」

「お前に母親を殺させるようなヤツがか！」

「知った口利かないでよ——！」

そう叫んだ彼女の唇は震えていた。

「だったらどうして、私の側に居てくれなかったのよ！ どうして

キミは、美月の側に居たのよ！」

瞳からは、涙を流して。

「キミはどうせ、私のことなんて忘れていたんでしょ——！」

「……否定は出来ないな」

「分かってるよ、今私は残酷なこと言ってる。キミだって深く傷ついていた。小父さんと小母さんを無くして家族を失ったんだから。でも、私も家族を失ったの。壊れた母さんと家に戻らない父さん、……キミが生きていればって私は思った。私はずっと、寂しかった——！」

「俺は、今ここにいる——！」

「遅いんだよ、もう遅いんだよ！」

誰も居ない廊下に、二人の叫び声が木霊する。

「もう私は疲れたのよ、もう期待なんてしない。流れるままに受け入れて、言われたとおりに生きる方がずっと楽でいいよ……」

「嘘だな」

「どうして、決め付けるのよ」

「もうこんなのは嫌だって。お前、そんな顔をしているぞ？」
笑ってみせる。

「何よそれ、どんな顔だって言うのよ……」

「鏡を見てみろ、酷い顔が更に酷い顔だ」

「失礼だよ」

「親しき仲に礼儀はない」

「バカだよ」

「ああ、留年にリーチがかかっている」

「ほんとうに、バカだ……」

「ああ、——だけだな、お前はもっと馬鹿じゃねえか」

「えっ——」

その一瞬について、陽子の腰に手を回す。

そして——唇にキスをした。

「——っ！」

陽子は驚いたように目を見開く。

時間が突然ゆっくりになる。

たっぷりと時間をかけて、そして離れた。

「……..な、んで？」

「昔は愛だとかそんな言葉を簡単に使ってたくせによ。なんと言えなくなってるんだ？ 言えば良かったんだ。私のほうが寂しいって、私のほうが辛いって。だから、美月じゃなくて私の側に居て欲しいってよ。私を——好きになって欲しいってよ」

「バカじゃないの！」

何度か口をパクパクさせて。

「強制猥褻！ 自意識過剰！ 色情狂！」

「ほう、そうなのか？ じゃあ俺はイタいヤツだったわけだ。だったら美月のほうにいくことにしようか」

そう言うのと、陽子はぎゅっと俺の背中を掴んだ。

「……..意地悪だ」

消えそうな声で、そう呟いた。

「なあ、もう止めよう陽子。確かに色んなことがあった。許せないことも沢山あった。傷は癒えない、けして癒えることはないのかもしれないけど——」

俺は、森野勇次と同じことを言っていた。

「お前は、過去は選べないって言ったけど——俺は、過去を取り戻したいんだよ。お前と美月との暖かな思い出を取り戻したい。そして、久たちとの未来も手に入れたい。どれか一つ選べなんて無理だ！」

叫んでいた。

「何も諦めたくない！ 無力だからって、どれかを諦めるなんてしたくない！ 全部欲しい！ 未来も、過去も、現在も、全部——！」

「私は……..」

震える声で。

「陽子——！」

ハッキリと言えばいい。

「私も——」

もしも、一つだけ願いが叶うとするならば——。

「お前も何だ——！」

お前は、何を願う——？

「私も、全部欲しい！」

そうして、ようやく陽子の本心を引き出した。

「私も、美月と日向くんとの過去も、かおりんやのぞみんとの未来も、慶介くんとの現在も、全部、全部欲しい——！ だから——」

その瞬間に、冷たいものが首筋に当てられる。

「だから——ゴメン……………」

「えっ——」

バチツと火花の弾ける音がした。

どうして？

疑問は、言葉にならなかった。

——体と意識は、俺の思いに反して、闇の中へと沈んでいった。

盲目 ―高辻日向

針木市市長選挙最終日。

針木市市民館、大ホール。

割れんばかりの喝采と共に、壇上に森野勇次が姿を現した。

その表情、仕草は私の知る父親の姿とは異なり、威風堂々とした姿は正しく英雄と呼ぶにふさわしいものだった。

街頭演説にて、彼は御座市再興を宣言し、ブラック・マンデーの戦犯である高辻洋平市長を擁護した発言がメディア各誌で反響を起こしていた。だが、彼を迎え入れるこの声援は、まるでそんなものなど吹き飛ばすかのように、森野勇次の持っている勢いを現していた。

父は笑っている。

いかにも人の良さそうな顔を撒き散らして、手を振っている。

「民自等の森野勇次です――」

言葉と共に喝采はピークに達する。

吐き気がするような雑音。吐き気を催すほどの会場の熱狂と一体感。

彼らは期待の眼差しで、それはそれは恐ろしい眼差しで、森野勇次を迎える。

どうして………？

どうして、誰も気付かない？

あれは、空々しい作り笑いに違いないのに。

『………真実ね』

久の声を思い出した。

彼らしからぬその言葉は、本当に不思議だ。

どんなに否定したって、回りまわって最後には思い知らされる。

『真実とは、実際にこの世界に起こった事じゃないんだ』

『嘘でも本当でもいい。要は、人が信じたいかどうかなんだ……』

・・』

人は信じたいものの為に、自ら蒙昧であることを選ぶ。

政治家森野勇次は、市民を未曾有の危機から救った。

誰よりも市民の側に立って素早い決断を下し、そして市民を助けようとした。

『だからこの世界では、本当であることに意味なんてないんだ』

森野勇次は真実を作り上げた。

かつてドイツの独裁者であるヒトラーが言った言葉を思い出した。

『人々が考えないということは、なんと治めやすいことか』と。

疑問などない。都合のいい現実を前に、誰も疑問など抱かない。

姉さんが、加藤恭介を妄信するように、集まった人々は森野勇次を妄信している。

広い平野を埋め尽くすほどの人々の幸せ、その屍の上に立つ偽りの英雄を。

何も知らなければ、気付くことはできない。だって、私も気付かなかった。何も知らずにのうのと・・・。

——私には、あなたを責める資格はありません。

——だってあなたは・・・家族を、娘たちを、大切にしてくれたのだから。

母は、何も知ろうとしなかった。盲目だから、壊れた。

父が、高辻日向の家族を殺した。

父が、母を見殺しにした。

父が、姉さんを壊した。

なんだ——。

悪いのは、全てあの男じゃないか——。

ごめんね、姉さん、私が間違ってた。

本当は、一番初めにあの男を殺さなければならなかったんだ。

「先日街頭演説での発言、一部では市民の皆さんの気持ちを考えない軽薄なものであったとの報道が流れているのは皆さんもご存知だと思います」

私には・・・・・・思考を停止するしかない。

「私はそれを真摯に全て飲み込み、噛み砕いて、その上でもう一度皆様に、私の公約を聞いていたきたい。それでもなお、御座市再興にかける私の思いを理解して欲しいのです」

あなたが悪ければ――全ては丸く収まる話だったんだよ。

「・・・・・・わたしは、笑えなくなっただんだよ？」

そう呟いた。

笑えないと言った私の顔は、笑っていた。

焦点の合わない、うつすらと浮かべる軽薄な微笑。正気を失っていると思えないだろう。

そう、正気なんかじゃなかった。正気でなんていらなかった。

「ねえ、『お父さん』・・・・・・仕方ないよね？ 私たちは、汚いんだから――」

歩を歩んでいく。ふらふらとした足取りだ。だが、誰も気づかない。

盲目な少女へ ― ???

「御座市再興に着手するにあたり――」

――サンよ、今一度問おう。誰が悪かったのだ？

「東区の放射能汚染調査においては――」

――敢えて問おう。誰が悪かったのだ？

「一帯を、春賀建設を中心として――」

――そうだ、森野勇次には罪がある。だが、それは森野勇次だけだったのか？

そんなに、これは簡単な問題だったのか？

誰かが悪かったとして、お前はどうしようというのだ？

「そうして、高潔だった御座市の――」

法律という尺度で測るのではない。

サンよ、一体誰が悪かったのだ？

お前は迷いなく答えるだろう。森野、勇次と――、森野、美月と――。

確かに、彼の犯した罪は重い。

罪を乗せた左の天秤が吊りあうには、右の天秤に彼の命を乗せるしかないのかもしれない。

では、この結末は正しかったのだろうか？

人に過去は選べない。

失ったものを取り戻すことは出来ない。

壊れた物を元通りにすることはできない。

私たちは、けして神様にはなれないのだから。

私たちが出来るのは、忘れたことを思い出すことだけなのだ。
だから、復讐は禁止された。

この国にだって、復讐が正とされた時代が確かにあった。
だが、私刑は否定された。

多数決で否定されたものかもしれない。

それは、少数の人にとっては否定することのできない絶対的な行動原理なのかもしれない。

私には、その少数の人々を否定することは出来ないのかもしれない。

しかし、仕方ない、そう言って視野を狭めないで欲しかった。

私は、お前に難しいことをしろとは言わない。

ただ、釘付けの目をお前を囲む世界へと向けて欲しかった。

お前の世界は、お前が思うほど狭くはない。

前後不覚と成っている今、お前の目に見えるものがあまりに少ないから、お前はそうするしかなかったのかもしれない。

姉に対する、慶介に対する負い目に、お前は再び誰かのせいにするしかなかったのかもしれない。

あるがままに映る景色を感じてみて欲しい。

そしてそれを、現実だと認めて欲しい。

何が、見える？

誰が、いる？

お前は許されない罪を犯した。

それは、お前にとってとは仕方なかったのかもしれない。

だが、それに心を痛める人は一人もいなかったか？

お前の大切な人は傷つかないだろうか？

イエスならば、お前はとても幸せだ。

お前は、それに気付いていたはずだ。

慶介は、お前にそんなことをさせたくはなかったはずだと。

そして、森野陽子。

お前は、姉のことを愛していたはずだ。

お前は知っていたはずだ。

姉もまた、本当はお前を愛していたことに気づいていたはずだ――

だからこそ、お前が家族を捨てたことに彼女は絶望したのだろうか？
だから、「仕方ない」、なんて悲しいことを言わないで欲しかった。

た。

過去は、選べないのだ……。

だがお前は、選べないものを選ぶうとして、その手にあるものも捨ててしまうことを選んだのだ。

歯車は噛みあわないまま、悪魔のシナリオを演じ続けてきた。

そうしてお前は……。

お前は結局、過去という耽美な幻想に囲まれた密室で、一人で夢を見続けることを選んだのだろうか……。

だが……。

だが、それでも――。

それでも、陽子は――。

お前の姉さんはずっと、お前のことを思っていたのだ――！

盲目的少女の選択 ―高辻日向

「森野勇次氏への、花束を贈呈いたします――」
割れんばかりの喝采。

それは一つの狂気。

私は舞台の袖から出た。

そして、その狂気を一身に浴びる。

目を見開く。

鳥肌が立つ。

唇が、指先が震える。

どうしようもない恐怖の中、理解する。

――父は、これほど大きなものを背負っているのだと。

泣きそうだった。

群集が、無責任な期待の群れが、あまりにも怖ろしかったから。

――お父さん、貴方はたった一人で、ずっとこんなものと戦って

いたのですか？

ごめんなさい、ごめんなさい……………。

それでも、私は――。

ぱちっ。

心の中で、薪が爆ぜる。

燃える――。

勢いを増して燃え広がる一つの感情が言葉となる。

それは――。

「父さん……………死んでください」

小さく呟く。

そして、大きく息を吸い込み――顔を上げた。

「……………」

会場の喝采の中、私は埋もれていた。

壇上の女の子の異変に、最前列の聴衆やスタッフが気にすること

はなかった。

それは、悲壮なまでの決意だった。

私は、自分の弱さに耐えられなかった――。

姉が望むならば、と自ら考えることを止めるしかなかった。
ゆつくりと父さんへと歩を進める。

この場にもし、慶介が居たならば止めてくれただろうか。

だが、彼はこの場所にはいない。

依存できる相手は、ここにはいない。

『ではここで、花束が贈られます』

アナウンスが入る。

歩を進める。

手には大きな花束。

ゆつくりと父さんはこちらに目を向けて。

そして、その動きが止まる。

突然現れた娘を、父親は信じられないものを見る目で迎えた。

ずっと、探していた娘のはずだ。

死んだと、そう聞かされていた娘だ。

なのに、その表情に喜びの色はない。

あるのは戸惑いだけ。

目の前にある光景に、理解が追いつかないのだろう。

花束と共に持つ、金属の光。

実際には一秒か二秒。

その時間が、永遠に近いほど体感時間を延ばす。

人々の思考だけを早送りするように、人々の動作をスローモーションにする。

「ねえ」

呼びかける。

「み、つき……」

「お願いだから、死んで――」

花束を離す。

落下しながら、ふわりと幾枚もの花びらを宙に躍らせる。

父さんは動けない。

混乱が身体への命令を全て拒否させる。

その花吹雪の中でカチャツと、金属音を響かせた。

「・・・・・・・・えっ」

その瞬間、父さんの口から言葉が完全に失われた。

完全に体が硬直している。

銃を、父さんに向けた。

そして――。

私は、泣いていた・・・・・・・・。

「ゴメン――お父さん・・・・・・・・」

銃を両手で握り締めて。

轟音が響いた――。

美月の為に ―高辻日向

「・・・・・・・・どう、して・・・・・・・・」

理解が出来ない。

目の前の現実があまりに遠い。

世界は未だ、静寂の中。

「・・・・・・・・あ」

手が、銃を握る手が、発砲の反動で震えていた。

その先から、パラパラッとスポットライトのガラス片が舞う。

キラキラと幾つもの光を反射して舞う。

「・・・・・・・・ああ」

理解する。

「・・・・・・・・え、さん」

か細い声。

「ねえ、さん・・・・・・・・」

怯える声。

その声を聞いた姉さんは、優しく微笑む。

彼女は、私の手を握り、狙いを外したのだ。

止めようとしてくれたのだ――。

家族を滅茶苦茶にした私を、こんな、どうしようもない私を――。

――同じ不幸を繰り返してはならないと。

――何よりお前が今、幸せであることに気づいて欲しかったのだ。

日向、いや、美月よ――。

陽子は、お前の姉さんは、お前を救うことを選んでくれたのだ――。

「えっ――？」

舞台の脇から、黒いスーツの男たちが父さんを守るように何人も

立ち憚る。

そして——私たちに幾つもの銃口が向けられた。

「止めるんだ、彼女たちは——！」

父さんの制止を聞くこともない。

当たり前だ。彼らは、英雄を守るためだけに存在する。

例えその娘であろうと、彼に害を及ぼすのならば——必ず排除する。

眩暈に視界が歪む。

これは、絶対的な終わりだ——。

全ての時間が止まった。

「美月っ——！」

その止まった時間の中で——ただ一人だけが動いた。

姉さんは——私を抱きしめた。

そして時間は、再び動き始める。

——何発もの轟音が鳴り響いた。

拳銃何発分の衝撃だったのだろうか？

それが全部、私を抱きしめた姉さん越しで伝わった。

折り重なるように、私たちは舞台へと倒れる。

私は仰向けで、姉さんはうつ伏せで。

遅れて私の頬に、姉さんの血が付いた。

「な………んで………？」

理解が出来ない——。

姉さんは、泣きながら、笑いながら、震える手で私の頬を両手で覆った。

「美月——、ごめん………ね………」

「どうして、——あやまるの………」

「私は馬鹿だか、ら………何も気づかなかった………、なに、も………できな、かった………」

声は苦しそうに途切れ途切れで。

目からは堪えきれない涙が溢れて。

ただ、姉さんの手の震えは大きくなる一方で。

「なん、で・・・・・・・・」

「あなたの、お姉さんになりたかった・・・・・・・・」
力ない姉さんの身体は、寒気がするほどに重たかった。

「・・・・・・・・」

「あ・・・・・・・・」

暖かな血液が傷口から流れる。

じわじわと、姉さんの血が私へと染み込んでいくような気がした。
血の気が一気に引いた。

「ああ・・・・・・・・」

握り締めた銃が、力なく落ちる。
するりと。

銃は鈍い金属音をたてて転がった。

人込みが弾けるように悲鳴を上げて、止まっていた時間が動き始める。

「救急車——！」

混乱する人々が叫ぶ。

「みつ、き・・・・・・・・？」

愕然とする。

もはや姉さんには、体を起こす力すら残されていない。

「キミも、バカだなあ・・・・・・・・」

なのに、姉さんはいつものように笑う。

何が楽しいのだろうか。

理解できない。

なのに姉さんは。

——全く、仕方ないな、と。

そんな声が聞こえてきそうなくらいに、姉さんの横顔は穏やかだった。

「なんで・・・・・・・・こんな、バカなことを・・・・・・・・」
呟く。

「私が望めば．．．．．キミは、人を．．．．．殺すのかね？」
「えっ？」

場に酷く不似合いな、ふざけた口調で。

「バカは．．．．．美月も同じ」

そして最期の力で、私を抱きしめる。

力強かった。

今にも解けそうな、震える細い腕は――力強かった。

「わた、し．．．．．？」

呆然と、姉さんの成すがまま抱きしめられる。

「思い出は大事だし、私だって大切にしたいよ．．．？　でも、それに囚われて、ずるずるいっちゃうと．．．．．もっと大切なこと見失う」

「大切な、こと．．．．．」

「美月は、本当に楽しそうだったよ．．．．．」

久のこと、のぞみのこと、悠希のこと、栄治のこと、佳織のこと、――そして、慶介のこと。

そしてそれは、本当に幸せな、大切な日常だった．．．．．。

「本当に、いいトモダち持ったんだって．．．．．私、嫉妬しちゃったんだ」

「ああ．．．．．」

「友情って．．．．．本当にいいものですね」

「でも、私にそんな資格．．．．．」

「あるよ――」

姉さんは子供の頃、友情や愛なんて言葉を好んで使った。

言葉にしては嘘くさくなると、人は言葉に出来ないことを高尚と捕らえがちだ。

友情と言葉にする物語は興が冷める、と。

愛と口にするラブソングは商業的である、と。

本当に大切なことは言葉に出来ないのだろうか？
たまに思う。

その考えは間違いではないかと。

言葉にしなければ形を失い、意識の中で曖昧に拡散してしまう。

だから、見失ってしまう。

だから、言葉は生まれたのではないか。

「大切だったら守らなきゃ・・・・・・・・・・。愛と、勇気と、友情だ・・・・・・・・」

そして今も、姉さんは愛と勇気といった嘘くさい言葉を好んで使った。

照れくさいから冗談のように言うのだけれど、姉さんはきつとその言葉が伝わることを信じた。

姉さん自身が知っているからだ。

本当は大切なもののほど、言葉を与えて、輪郭をつけて、形付けなければならぬことを。

使い古されてもいい。陳腐になったっていい。

だからこそ、大切なものを見失わずに済むのだから。

「よくさ・・・・・・・・過去か未来か、みたいな究極の選択ってあるよね？ それって、結局選択の答えは決まってるの」

「・・・・・・・・」

「手に出来る可能性があるのは、未来だけ・・・・・・・・過去は戻らない・・・・・・・・手に入れることなんて出来ないの」

痛いほどに、私にはこの言葉の意味が分かるはずだ。

「だから・・・・・・・・どっちなか選べって言われたら、私たちは未来って言わなきゃいけないの」

私も、姉さんも・・・・・・・・そうやって間違えてしまったのだから――。

「われわれは・・・・・・・・我々は暖かな過去を置き去りにして、未来に進まなければならない・・・・・・・・」

「うん・・・・・・・・」

「それが、どんなに冷たい監獄であろうと、どんなに残酷な荒野であろうと。私たちには未来しかないの・・・・・・・・」

「お、ねえちゃん．．．．．」

私は姉さんを抱きしめる。

父さんは尻餅をついたまま、魂の籠もらない抜け殻のように私たちを見つめていた。

「よかった．．．．．お姉ちゃんって、また．．．呼んで、くれるだね．．．．．」

震える手はゆっくりとほどけていく。

姉さんの体から、温もりが消えようとしていた。

「あなたの、お姉ちゃんに戻れたのなら——嬉しいよ」

「ごめんなさい．．．．．」

かわりに私が、ありったけの力を込めて姉さんを抱きしめる。

「ごめんなさい、ごめんなさい．．．．．」

何度も謝る。

「やっぱり、優しいね．．．．．」

「．．．．．もう喋らないでよ」

「．．．．．美月は．．．．．優しいね．．．．．」

そうして静かに、言葉は途切れる。

陽子の言葉は、それっきりだった。

「優しくなんてない——！」

叫ぶ。

「こんなに、我が儘じゃない！ 私は！ ．．．．．私は本当は

ずっと、姉さんみたいになりたかった。誰にでも明るくて、優しくて、頼りになるような．．．．．」

そうだ。

高辻日向と私は名乗った。

その理想像は無意識の内に姉さんを浮かべていたのだ。

誰にでも優しく、いつでも明るかった姉さん。

だが、私の心はその事実を否定した。

だから、姉さんと正反対のことをしようとした。

規律やタブーを重んじて、潔癖であろうとしたのだ。

背中に回した手で、傷口を塞ごうとしたとした。
でも、押さえても押さえても、赤い血が出続けて。
絶望的な予感に眩暈を覚える。

あまりに遅すぎるサイレンの音が響く。

その音は救いではなく……。

絶望的な諦念を辺りに教えているようだった。

姉さんはもう、喋ることはなかった。

苦しげな息を繰り返すだけだった。

人ごみがモーゼのように裂けていく。

そこから制服に身を包んだ警官数名と刑事風の男。白い服に身を
くるんだ救急隊員。

一直線にこちらへと向かってくる。

そして、姉さんの身体を、抱えあげる。

ポタポタと、姉さんから零れた雫が、私へと降り注ぐ――。

「殺人未遂の現行犯だ――」

屈強な警官に取り押さえられる。

取り乱すでも、反抗するでもなく――。

ただ、私は――。

「……ごめん、なさい……」

もう一度、姉さんに謝った――。

夢 — 森野陽子

「美月——」

ゆっくりと彼女は振り返る。

遅れて揺れる白いレース。

「・・・・・・・・」

言葉を失った。

「どうしたのお姉ちゃん？」

不思議そうに美月は首を傾げる。

「・・・・・・・・んん。」

ああ、衝動が湧き上がる・・・・・・・・。

「お姉ちゃん？」

「もう限界——」

「きゃあっ・・・・・・・・」

猫の如く美月に飛びつく。

「ちよ、ちよっと・・・・・・・・お姉ちゃん——」

「美月ー、かうわいいよー」

「なっ、ちよ、お姉ちゃんとりあえず離れて——」

無理やり剥がされる。

残念。

「うん」

改めて美月の花嫁姿を見る。

過去に囚われた儚い少女の姿はもうそこにはない。

希望に満ち溢れた一人の美しい女性。

「美月、すっごく綺麗」

両手でフレームの中に収めてみる。

「もう・・・・・・・・時と場所を考えてください。子供じゃないんですから」

「ごめん、ごめん・・・・・・・・」

ちよつとはしゃぎ過ぎたのかも。

反省。

「改めて、結婚おめでとう」

「はい」

美月は笑う。

「ありがとう、お姉ちゃん」

私も笑う。

「日向くん、いつも美月のこと見てたんだね」

「ええ……」

「随分と、遠回りしちゃったかなあ」

「でも、こうして戻ってくる事が出来ました」

「どうですか、あの頃の未来に立ってみた感想は？」

レポーターの振りをして、見えないマイクを美月に差し出す。

「そうですね……想像と少し違います」

「と、いいますと？」

「私、本番に弱いから、もっと緊張してガチガチになっちゃうかも
って思ってた」

「あれ、緊張はない？」

「うん」

本当に嬉しそうに笑う。

「ただ、なんか暖かくていいなって」

「他人事みたい」

「実感ないだけかも」

「これから嫌ってほど実感するよ」

「そうかもね、いいことも悪いことも」

「悪いこと言わない。幸先悪いから」

「ごめんなさい」

ふう。

苦笑してみせる。

相変わらず、マイナス思考のところは直ってない。

まあ、それもいいかって思う。

足りないところは日向くんが埋める。

そして日向くんの足りないところは、美月が埋める。

うん、理想的だ。

「じゃあ、アタシそろそろ行くわ」

「うん」

そうして美月の楽屋を後にしようとして――。

「そうそう、一個忘れてた」

振り返る。

「美月――」

「ん？」

美月は首を傾げる。

「――はっぴー？」

「・・・・・・」

きょんとした顔。

そして。

「ふふふっ――」

くすくすと笑い始める。

「――はっぴーですか？」

もう一度問いかける。

「ふふふっ・・・・・・いえす――だよ」

心残りはない。

私は満足して楽屋を出る。

ああ・・・・・・。

すっごく時間がかかったなあ。

十年、かあ・・・・・・。

ほんとに、長かったよ。

やっど。

やっど私は取り戻せたんだ――。

私――。

美月——。

日向くん——。

頑張ってよかったなあ……………。

頑張って、よかったあ。

そう思うと、突然力が抜けてくる。

……………なんだかなあ。

……………なんだか眠たい。

どうしてだろう？

まあ、いつか……………。

今はただ、この喜ばしい日を祝おう。

……………。

ぐるぐると、思考が混濁としていく。

あれ……………？

私は、何をしてるんだろう？

上手く手足が動かない。

まぶたが……………重いなあ……………。

上手くないなあ。

世の中、ままならないや……………。

ごめん、美月——。

私、ちょっとだけ……………眠るね？

ごめん、ね……………。

それじゃ……………おやすみ——。

「患者の心臓が、停止しました——」

冷たい車の中で、救急隊員が静かに告げた。

エピソード1

人々の喧騒を切り裂いて、車はサイレンを鳴らしている。

赤いランプは目の前を何度も血の色に染めながらも、彼の止まった思考を動かすことはなかった。

森野は情けなく両腕を垂らしたまま、眼前の光景を眺めていた。瞬きすることも許されない。

喉はカラカラで、息をする度に喉の奥の皮膚が裂けるような痛みを覚える。

一夜の悪夢のように思えた。

いや、悪夢であって欲しいと願った。

だがそう考えてしまうと、逆に目の前に繰り広げられた惨劇は自身の避けられない現実であることを認識しなければならなかった。

眼球を抉ってしまいたかった。

鼓膜を破いてしまいたかった。

鼻を叩き折ってしまいたかった。

「先生――」

壮年の刑事が悲痛な表情で寄ってくる。くたびれたスーツが悲愴感を余計に際立たせる。

「鑑識が検証を終えました……娘さんと、お会いになれますか」

「ああ」

声高に演説を行っていた彼からは想像もつかないほど、しわがれた声だった。

「こちらです」

刑事に連れられて森野は歩く。

どれくらい自失していたのだろうか。

今さらながら彼は、夜の冷え込んだ空気で手が悴んでいるのに気づいた。

暖房のよく効いた市長室の中では気がつかなかったことだ。

「・・・・・・・・冬、だったんだな」

「はい？」

呟いた声に壮年の刑事が振り返る。

なんでもないと告げる。

病院は、いつの間にか辺り一面を警察が規制していた。

マスコミたちは、外で騒いでいるのかもしれない。

近づいたベッドには、眠るように一人の少女が横たわっている。

森野が近づくと彼らは一様に顔を上げて視線を向けた。

その中心に、眠り姫は眠っていた。

森野は歩を進める。

壮年の刑事が何かを言う。

耳鳴りでよく聞こえなかった。

「顔を・・・・・・・・」

目を、姫の顔に被せられた白い布にに向けたまま、森野が呟く。

「ええ、お別れを言っておあげるのがいいでしょう」

医師が答えた。

ゆつくりと白い布を持ち上げる。

茶色の髪、額、閉じられた目。

不自然なほどに白い、森野陽子の顔が現れた。

眠っている、と言われればそう信じてしまうほどだ。

もしかしたら生きているのではないか、とすら希望を抱いた。

だが、そんな微かな希望は心の奥から湧き上がってくる圧倒的な

現実感に飲み込まれて、気がつけば諦念だけが残った。

森野は遺体に触れるでもなく、ただ表情も変えずに見つめ続ける。

森野の目から涙が溢れることはなかった。

それどころか、一滴たりとも流れることはなかった。

体の至る所が乾燥しているようで、それはただ慢性的な諦念で満たされる彼の心を表しているようでもある。

森野はふと思った。

十年前の夜、娘の美月が家を飛び出した日のこと。

彼女は怒るでもなく、泣くでもなく、無表情にその眼球は鏡となり反射する自分の姿を映し出したのを。

一番最初に彼が目にした、あの事件の被害者の表情である。

あの時目にした娘のような表情を、今自分も同じように浮かべているのだろうか、と思った。

「ああ……」

ようやく理解できた。

その時、美月は無表情に私の顔を見上げ続けた。

——それは娘の絶望だったのだ。

その日を境に、森野勇次が春賀建設と癒着の疑いがある記事が一斉に各マスメディアで公開された。

議会の場においては野党の議員より、癒着に対する厳しい追求が上がった。

出所は不明であるが、とある料亭にて春賀建設の接待を受けたとされる写真を証拠として提示し、森野勇次を始めとする与党への市民の反発は一気に加速する。

英雄への期待は、そのまま絶望となり、森野勇次への憎しみとなった。

一部の過激派の市民グループも現れ、森野の自宅前で拡声器を使って罵倒を行い、石を投げつけて窓を割るものもいた。

だが、当の森野勇次は、議会の場には姿を見せず、窓を割られた家から出ることはなかった。

森野勇次は来る日も来る日も自室で明かりも点けず、壁に背を預けて座っていた。

暗い部屋の中で膝を抱えながら、たまに思うことがある。

綺麗ごとだけではこの世界は回らない、そんなことは子供だって知っている。

だが、物事には限度というものがあるのだ。

今回騒がれている癒着の件についても、多少強引で法を逸脱しているが、それはまだ許容範囲である。

暗黙の了解として、法律とは別に曖昧なルールが存在する。

時に曖昧な境界線から一歩足を踏み出すようなグレーゾーンの駆け引きを続け、それを大きく破ることなく均衡を保とうとする。

だがあの日、ブラック・マンデーが起こった十年前に、森野達はルールを大幅に逸脱した。

今も外で騒いでいるような、そんな生ぬるい市民団体などではない。

あの時彼らが生み出したものは、自らの土地を汚染され、約束された富は与えられず、手に持っていた職さえも奪われて、怒りに我を忘れた人々の群れだ。

ゾンビの仮面を被った市民がテロリスト顔負けの残虐さで公共の電波をジャックして、一人の女性を公開処刑した衝撃的な映像を思い出した。

若い女性だった。

森野もパーティーの席で一度だけあったことがある。

あのときの彼女は穏やかな微笑で、しかし御座市の発展の為に尽くす真っ直ぐな瞳を持った清しい女性であったことを思い出した。願わくば、娘の陽子と美月も、あのような素晴らしい女性に育ってくれればとすら思った。

そして、その彼女にあのような屈辱に塗れた末路を与えた自分に対する嫌悪感が、今さらながら思い出された。

そこまで考えて、思考を放棄した。

無駄だ、と。

そんなことを十年前の自分に望むべくはない。

人は、信じたいと思うものを信じるように出来ている。

悪魔の誘惑に負けた自分に向けて、ルールを説いたところで悲劇を回避できたはずがない。

目を閉じる。

思い浮かぶ風景はずっと同じだ。

「・・・・・・・・陽子」

美月を抱きしめる陽子の顔が浮かんだ。

その情景は、角膜に烙印のように刻まれている。

その情景は、森野勇次の築き上げてきた世界、彼の家族の終焉の象徴だった。

森野は目を開けて回想を止めた。

暗い部屋の中。

だが入り口のドアが開き、外の光が一筋射しているのに気づいた。逆光の中で立っている男。

市民グループの暴漢が忍び込んできたのかと思った。

森野は彼が部屋の中に入ってきたのに今さらながら気づいた。

「・・・・・・・・誰だ」

「バカな男だ」

冷淡な声が響く。

「お前がルールを逸脱したから、お前の娘たちは不幸になった」

「・・・・・・・・――っ」

ナイフのような一言だった。

「父親の手段を選ばぬ仕事で、多くの人々が職を失い、時に命を失った。そのことでお前の代わりに胸を痛め、罪悪感に苛まれてきた妻と、それを支え続けた陽子の気持ちが分かるか？」

「わ・・・・・・・・わたし、は・・・・・・・・、かぞくの、ため、に・・・・・・・・」

「陽子は、家族を愛していた。妹のことも、父親のことも。だから彼女は父親の仕事について責めることも、口出しすることもできなかった。でも、本当は心の底で、叫んでいた」

語られる言葉は全て呪詛となり、森野勇次の全身に絡みつく。

「父親の非情な手段で、大切な友達を奪われた、それが慕っていた父親と分かった時の、美月の絶望がお前には分かるのか」

家族への愛情は、いまや呪いとなり森野勇次に絡みつく。

「彼女は、お前を殺してやりたいと何度も思った。それは、きつかけさえあれば簡単に実行できてしまうほどの深い、本当に深い憎しみだった・・・・・・・・。その憎しみの果てに、彼女は姉を失ったんだ」

「ああ・・・・・・・・」

喘ぐ。

見下ろす男の目付きはより一層厳しいものになった。

「お前さえ、いなければ・・・・・・・・。お前たちが、あの日ルールを逸脱しなければと、俺は何度も思ったよ」

男のだらしなく垂らされていた手が震えていた。

森野は今になって男が右手に何か持っているのに気がついた。

「・・・・・・・・おまえ、は？」

森野の声は途中で途切れる。

頭が後ろに折れて、そのまま動かなくなる。

眉間には小さな赤黒い穴が空いていた。

男の手にした黒い鉄塊から煙が上がり、硝煙の臭いが辺りに立ち込めた。

「高辻、日向――」

庄治慶介は物言わぬ死体に答えた。

エピソード2

人を撃ったのは初めてだった。
信じられないほどに呆気なかった。

人の命とは、こんなにも簡単に奪うことができるとは思わなかった。

手を腰に当てる。

丁度銃を隠している部分。

銃は頼りないほどに小さかった。

ごつごつとした無骨な、無機質な感触である。

そんなつまらないもので、あの男の命を奪ったのだ。

復讐は完遂した。

俯きながら背中を丸めて歩いていた。

酷く足取りが重い、と慶介は思った。

喉がやけに渴いている。

ふら付く足取りは、光に誘われるように自動販売機の前で止まった。

ゆっくりと、本当にゆっくりとした動作で硬貨を入れてボタンを押す。

異常に炭酸飲料が飲みたかった。

タブを開けて、ジンジャーエールを一気に流し込む。

突然の刺激に思わず咳き込んだ。

「ゴホッ・・・」

慶介は、口元を押さえる。

涙目のまま何度も咳をした。

しばらく収まるのを待って、ゆっくりと長い息を吐いた。

無残な最期を遂げた高辻の家族のことを思い出す。

父がいた、母がいた、暖かな家庭であった。

彼らは御座市の発展の為に、針木市と友好な関係を結ぼうと奮迅

したのだ。

逃げ惑い殺されていった家族のことを思い出す。

発狂した人々の手で焼かれた屋敷のことを思い出す。

心の中に飼いならしてきた、ヘドロのような感情が濁流となるのを感じた。

終わったんだ、もう、終わったんだ、と目を閉じて何度も繰り返すと、不思議と沈殿していた感情はゆっくりと薄れていく。

薄れた後の心のスペースにはぽっかりと穴が空いている。

ただ、虚無だけが残った。

血の付いていない右手を眺めながら、慶介は涙を流す。

泣いていると気が付かなかった。

激しい悲しみも、深い喜びもそれには伴ってなかったからである。ただ目尻を拭いて、涙の跡を不思議そうに眺める。

終わったんだ、と慶介はもう一度呟いた。

エピソード2（後書き）

始めはもうこの辺で、と思いながら、いつの間にか積もりに積もって収集がつかなくなっていました。

その結果が第二部であり、さらに三部まで作らないと何が何だか分からないことばかりというこの状態。

作りながら自分に、お前伏線張りすぎ、と突っ込みたくなりました。

というわけで ウォン⇒サン ときて、物語は第三部「エヴァ」へと続きます。

ここまでお付き合い頂いた方（果たしているのかは疑問だが……）よろしければもう少しだけお付き合い頂ければ光栄です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8247g/>

SUN's fault -the 2nd story-

2010年10月8日13時36分発行